

北海道立埋蔵文化財センター

# 年報16

平成26(2014)年度



北海道立埋蔵文化財センター

# 年報16

平成26(2014)年度





▲岩内町東山1遺跡遠景（↓遺跡の位置）（南→）



▲岩内町東山1遺跡 発掘区4 竪穴住居跡検出状況（南東→）



# 目 次

I	施設の概要	
1	設置の目的	1
2	沿革	1
3	施設の概要	1
	(1) 工期	
	(2) 面積	
	(3) 組織図	
	(4) 職員名簿	
II	調査研究事業	
1	重要遺跡確認調査	2
	(1) 岩内町東山1遺跡の調査	
	(2) 湧別町シブノツナイ竪穴住居群の調査	
2	埋蔵文化財に関する調査研究	3
	(1) 保管出土品を活用した研究	
	(2) 研修・情報収集	
	a 平成26年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会	
	b 平成26年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会研修会	
	c 平成26年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会北海道・東北ブロック会議	
	d 第5回文化財写真技術研究会	
	e 文化財保存修復学会第36回大会	
3	分析・鑑定・保存処理等	9
	(1) 分析・鑑定	
	(2) 保存処理	
4	市町村教育委員会支援	9
	(1) 指導・協力等	
	(2) 出前研修会	
	(3) 埋蔵文化財担当職員研修会	
III	収蔵・保管事業	
1	収蔵資料	11
2	図書資料	14
	(1) 購入図書一覧	
	(2) 受領刊行物一覧	
IV	普及・啓発事業	
1	展示公開	20
	(1) 常設展示「掘り出された北の歴史」	
	(2) 企画展示	
	a 「北の縄文—縄文探訪と縄文工房—」展	
	b 北海道遺跡百選 7 八雲町野田生1遺跡と注口土器群 —注口土器群の出土状況から見た縄文時代後期の集落—	
	c 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター平成25年度発掘調査成果展	
	d 世界遺産をめざす北の縄文展	

2	資料の特別利用等	24
	(1) 特別利用	
	(2) 模写品等の刊行等の承認	
	(3) 資料の貸出承認	
3	講座等の開催	28
	(1) 一般道民対象の講座	
	a 「ものづくりの考古学」教室 1. ガラス玉づくり入門	
	b 「はじめての考古学」教室 1. 入門「縄文文化と世界遺産」(1)	
	c 「はじめての考古学」教室 2. 入門「縄文文化と世界遺産」(2)	
	d 「ものづくりの考古学」教室 2. 石器づくり入門	
	e 「埋文センター発掘物語」Vol. 1—小樽市忍路土場遺跡—	
	(2) 児童生徒学生対象の体験型講座	
	a 「親子ガラス玉づくり教室」	
	b 「夏休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊 (第1次)	
	c 「夏休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊 (第2次)	
	d 「冬の縄文工房」	
	e 「冬休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊 (第3次)	
	f 「冬休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊 (第4次)	
	(3) 児童生徒対象の出前講座	
	a 事業目的	
	b 事業内容	
	(4) 教育連携講座	
	(5) 一般道民対象の講演会	
	a 夏季講演会「遺跡の年代はどうしてわかるの？炭素を使って年代を測ろう」(工藤雄一郎氏)	
	b 秋季講演会「北海道から世界へ発信 考古学と形質人類学のコラボレーション」(松村博文氏)	
	(6) 近隣市町村等対象の出前講座	
	(7) 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター平成25年度発掘調査報告会	
4	共催・協力	33
	(1) きたひろしまの考古展—北海道史のなかの北広島—	
	(2) 北海道文化財保護協会「子どもの文化財愛護推進事業」	
	(3) 講師派遣	
	(4) 職場体験	
	(5) インターンシップ	
	(6) 博物館実習	
5	周辺施設・大学との連携	33
	(1) 文京台地区道立教育3施設連携	
	(2) 発見！ 体験！ スタンプラリー！ 夏休み探検隊♪	
	(3) かるちゃんnet	
	a 「発見・体験 文化の秋—遊ぼう！学ぼう！あつべつ・えべつ—」	
	b かるちゃんガーデン	
	(4) のっぽろ11ネット	
6	協賛事業への取り組み	35
7	利用状況	36
	(1) 入館者数一覧	
	(2) 団体利用者対応	
8	講演会要旨	40
	(1) 夏季講演会 「遺跡の年代はどうしてわかるの？炭素を使って年代を測ろう」(工藤雄一郎氏)	
	(2) 秋季講演会 「北海道から世界へ発信 考古学と形質人類学のコラボレーション」(松村博文氏)	

# I 施設の概要

## 1 設置の目的

北海道には貴重な埋蔵文化財が数多く発見されており、これらの埋蔵文化財の保護、保存・活用を図るため、調査研究を行なうとともに、出土文化財等の収蔵保管、展示公開並びに文化財保護思想の普及啓発を図る総合的な機能を有する道立の埋蔵文化財センターを設置する。

## 2 沿革

平成7年

3月 北海道立埋蔵文化財センター（仮称）基本構想策定

平成8年

9月 本館基本設計完了

平成9年

3月 本館実施設計完了

10月 本館建設工事着手

12月 別館（整理作業所）基本設計完了

平成10年

3月 別館（整理作業所）実施設計完了

9月 別館（整理作業所）建設工事着工

平成11年

3月 本館建設工事竣工

4月 北海道立埋蔵文化財センター開設

8月 別館（整理作業所）建設工事竣工

11月 一般公開

## 3 施設の概要

### (1) 工期

[本館工事] 平成9年10月31日着工

平成11年3月18日竣工

[別館工事] 平成10年9月10日着工

平成11年8月18日竣工

[外構工事] 平成11年7月28日着工

平成11年12月10日竣工

### (2) 面積

[敷地面積] 18,599.50㎡

[延床面積]

本館：5,063.02㎡（鉄筋コンクリート造・2階建）

別館：2,081.80㎡（鉄筋造・3階建；整理作業所）（渡り廊下含む）

[部屋別面積]

本館1階

調査研究室（253㎡）

保存処理室（167㎡）

観測・計測室・修復室（47㎡）

金属製品処理室（31㎡）

分析室（48㎡）

実験室（53㎡）

撮影室・暗室（105㎡）

図書室（177㎡）

一般収蔵庫（399㎡）

展示収蔵庫（321㎡）

展示室（310㎡）

本館2階

所長室（47㎡）

事務室（241㎡）

特別収蔵庫（227㎡）

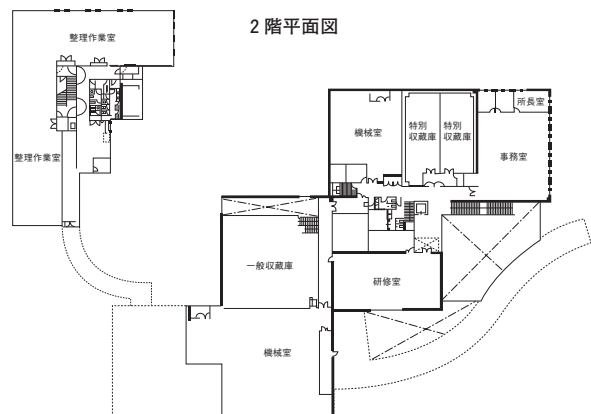
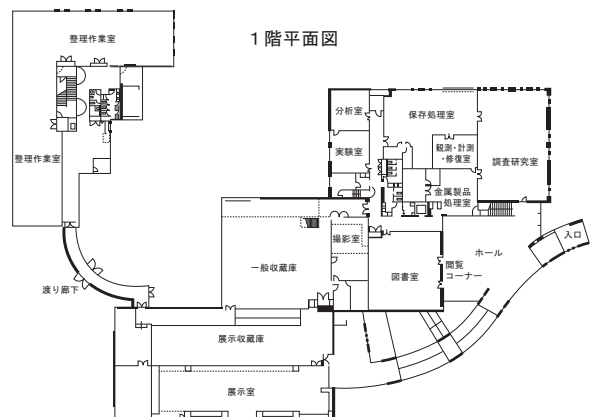
研修室（196㎡）

一般収蔵庫（319㎡）

別館1階：整理作業室（520㎡）

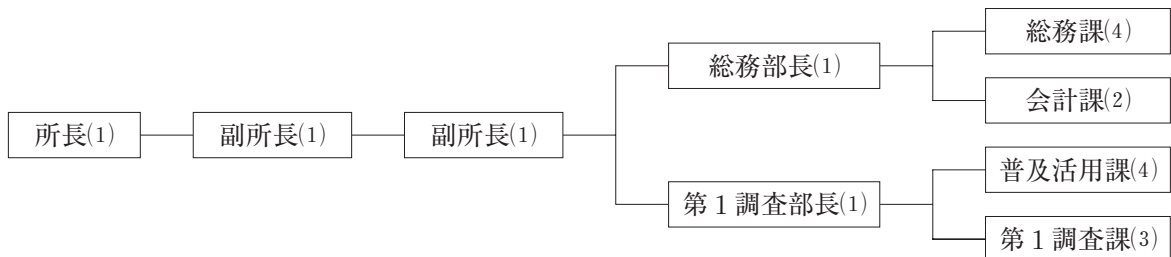
別館2階：整理作業室（540㎡）

別館3階：整理作業室（220㎡）





### (3) 組織図



### (4) 職員名簿

職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
所長	坂本 均	総務部長	和田 基興	第1調査部長	千葉 英一
副所長	*畑 宏明	総務課長	葛西 宏昭	普及活用課長	鎌田 望
副所長	中田 仁	総務課主査	小杉 充	普及活用課主査	倉橋 直孝
		総務課参与	前田 博	普及活用課主査	藤井 浩
		総務課参与	作田 千秋	普及活用課主任	藤本 昌子
		会計課長	礪田 千秋	第1調査課長	田口 尚
		会計課主査	中村 貴志	第1調査課主査	柳瀬 由佳
				第1調査課主査	吉田裕吏洋

\*平成26年 8月28日死去

## II 調査研究事業

### 1 重要遺跡確認調査

年度当初に北海道教育委員会から平成26～29年度重要遺跡確認調査実施要領が通知され、今年度は岩内町東山1遺跡と湧別町シブノツナイ竪穴住居群を調査対象とすることとなった。岩内町東山1遺跡については発掘調査を主とした調査が最優先であること、湧別町シブノツナイ竪穴住居群については次年度調査のための準備および資料収集を行うこととなった。

今年度より、調査成果を報告する重要遺跡確認調査報告書については、年度ごとに刊行する年次報告となったため、ここでは概略のみ記述する。

#### (1) 岩内町東山1遺跡の調査

10月28日(火)～11月12日(水)まで、調査対象面積5,606.8㎡のうち600㎡を調査した。遺構は盛土遺構1か所、竪穴住居跡4件、土坑13基、柱穴状ピット7基、焼土12か所を検出した。遺物は縄文時代前期後半～中期前半の土器、扁平打製石器、北海道式石冠、石皿などの石器あわせて16箱(59cm×39cm×15cmのコンテナ)出土した。

#### (2) 湧別町シブノツナイ竪穴住居群の調査

9月21日(日)に教育委員会と打ち合わせ・現地確認を行い境界杭の一部、出土遺物を確認し、関連図面や資料の提供を受けた。また、1月30日(金)に教育委員会と打ち合わせ・現地確認を行い空撮・聞き取り調査・作業員採用の協力を快諾して頂いた。

## 2 埋蔵文化財に関する調査研究

### (1) 保管出土品を活用した研究

#### 【調査研究計画】

指定管理第3期の初年度に当たり、今期の調査研究の主な課題として、これまでの研究内容及び方針を継承しつつ、新たに3つの課題を掲げることとした。

1、保管遺物を対象にした科学的分析で、主に材質分析を行うこと。

2、保管遺物を対象にした遺物と遺構との関係を整理すること。

3、保管遺物を活用して、新たな体験学習教材または体験学習内容及び方法を開発すること、の3つである。

1については、昨年度まで明治大学黒曜石研究センターなどに依頼して、保管資料の材質、原産地などの分析を行い、データ集合作業を行ってきた。

今期からは当センター独自での分析を行う体制を整えつつ、特に千歳市美々4遺跡の石製品などから材質分析を行うこととなった。分析は今年度末から開始し、結果については次年度から報告の予定である。

2、3の課題は今期から新たに提起したものである。主に常設展示や体験学習講座の内容充実のために、一般の人々にとって関心の高い分野を中心に、活用できる情報を収集することがこの目的である。

これまでのアンケートによると、展示、講座、教室、体験学習での利用など、多くの点で当センター利用者の満足度は高いが、様々な具体的要望も多い。

常設展示に対しては、より詳細な説明、特に展示資料の背景についてのストーリー性のある説明が喜ばれ、これを要望されることが多い。

また、体験学習についても学校の団体利用や縄文工房などの利用者からの要望が多く、特に新しい体験内容の開発を期待する声が多くなってきた。学校や社会教育の関係者からは、遺物に直接触れる体験を希望されることが多くなり、ものづくりだけでなく、より深い体験を要望される傾向が感じられる。

最近では、遺物を授業で使いたい、自分で説明したい、という要望も増えてきた。これまでの出前授業のような職員が出向いて行うスタイルも好評ではあるが、センター職員の対応に限りもあり、

日程の調整など制約も多い。利用する側からは、授業等の進行状況に応じて随時遺物を利用した説明ができるような、長期にわたっての借用を希望する声もあり、職員が直接対応できない場合の方法などを考案する必要性が生じてきた。

このような状況を背景に、今年度では2と3の課題に関わりのある調査研究の概要について報告する。

#### 【保管遺物を対象にした遺物と遺構の関係】

この研究の目的は、常設展示に関する内容の充実である。考古資料の有する情報の中でもその出土状況は重要である。実物資料を多く展示する当センターではこの説明が不可欠である。

今年度は、常設展示の遺物を対象にした。報告書からその出土状況についての記述、図面、写真を抜き出して、遺物ごとに整理をはじめた。現時点で40点分をまとめた。今後もデータを蓄積し、常設展示の解説に追加し充実させていきたいと考えている。

【保管遺物を活用して、新たな体験学習教材、体験学習内容、方法を開発すること】

今年度も小学校の授業での遺物利用など、保管遺物を活用した体験学習が数多く行われた。その中でも、今後の遺物活用を考える上で示唆に富んだデータが得られた事例について報告する。

#### 【札幌国際芸術祭2014での事例報告】

札幌国際芸術祭は平成26年7月19日から9月28日までおよそ2か月間、札幌市内中心部各地で展開された芸術イベントである。

平成26年度当初にイベントの一つの担当者であるアーティスト鳥袋道浩氏と芸術祭担当者の小田井真美氏が来所され、打ち合わせを行った。

「携帯電話と石器を交換する」というテーマで、参加者が石器を持って遺跡を歩くという芸術イベントを行うにあたり、石器を貸して欲しい、との依頼が主な内容であった。アーティストからは石器は携帯電話サイズの石斧が良いという希望もあり、実物を見ながら説明し、打ち合わせを行った。

実施にあたっては、貸出が2ヶ月間という長期にわたること、管理担当者が埋蔵文化財を専門とする学芸員ではないこと、石器を自由に持って歩くときの管理方法など様々な問題が考えられた。

打ち合わせを積み重ねた結果、最初に石器及びその取り扱いについての説明をイベントスタッフにすること、定期的に体験講座を行うことで、遺物の状況を確認するとともに、関係者の石器に対

する理解を深めることを条件に、貸出を行うこととした。

貸出は石斧30点で、体験学習用に抜き出してあった報告書未掲載資料20点に掲載資料10点を加えて作成した。アーティストのイメージである「かつて鯉のいたところで水の音を聞く」を尊重して石狩川に近い江別市対雁2遺跡出土のものから多く抜き出した。

貸出の方法は、イベントの趣旨を説明した上で受け付けで30点の石斧の中から自由に選び、自分の携帯電話と交換する。隣接する知事公館内の遺跡を石斧を持って散歩し、受け付けに戻って返却すると、携帯電話が戻ってくる、という流れで行なわれた。

石器の扱いについては特に受付で説明があり、防犯のために身分証明書を控えることも行われた。

イベントの結果については整理の途中であるが、主催者によると現段階では、会期中に実施された54日間で、実際に石器をもって歩くことを体験した参加者は529名、興味をもって受付で石斧を見たり、説明をきいた人は2,435名であった。

参加者すべてからアンケートをとって、体験の感想も記されている。

「(体験を終えて)携帯を取りにいくとき、とても哀しい気分になりました。携帯がなくても石器と過ごした数時間、心が豊かでした。携帯がない分、目の前に見たものを自分の目や耳で記憶したいと思えました。」

「石器を大切にしてきた人たちの気持ちを感じることができた。」

「石を手にしたときのずっしりした感じが印象的でした。石器をもっただけでいつもと違う世界を感じ方をできるとは思いませんでした。」



▲参加者受付の様子



▲石器と携帯電話がならぶ様子

「このような機会でもないと、石器や遺跡に立ち止まること、ましてや触れることなどないと思います。参加してよかったです。」

多くの感想から、見るだけではなく、実際に持つて歩くことで、満足度がかなり高くなることにあらためて気づかされ、この体験が利用者にとって有意義なものであったことがうかがえる。

しかし、実施にあたっては、長期に及ぶ貸出、持ち出しが遺物に与える影響については最も危惧されたところである。今回、幸いなことに目立った遺物の損傷などは見られなかったが、今後検討する際には、ダメージを避けるための工夫はいつも必要になると思われる。

また、参加者に対して直接、企画の趣旨を伝え、遺物の説明をするボランティア方に対して、十分な指導、説明ができるかという点も課題であった。今回は芸術関係のボランティアがほとんどで、考古学的な説明が十分に伝わったか課題の一つである。アンケート結果によって調査したい。

#### 【今後について】

札幌国際芸術祭の事例においては、これまでの普及活動ではなかった多くの経験を得られた。アーティストという私たちとは立場の異なる主催者に対して、埋蔵文化財に対する考え方を理解してもらうことの難しさは、最も大きな経験である。一般に普及活用をアピールすることと、資料を保存していく重要性を受け入れてもらうことの実際の両立は難しい。最近注目されてきたパブリック考古学などの動向なども意識しつつ、こちらの考え方を整理しておきたい。

今回の結果をさらに整理したうえで、引き続き作業を行い、展示や体験の充実を図っていきたいと考えている。

## (2) 研修・情報収集

### a 平成26年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会

期 日：5月29日（木）～5月30日（金）

会 場：山梨県甲府市丸の内1-21-15  
岡島ローヤル会館

参加者

副 所 長 中田 仁

総務課参与 前田 博

内 容：5月29日（木）は岡島ローヤル会館で総会・講演、30日（金）は甲府城跡・河口浅間神社ほかの視察を行った。

5月29日（木）

〈議 事〉

#### ①会員の入退会について

大津市及び各務原市埋蔵文化財調査センターから退会届の提出があり、了承した。

#### ②平成25年度事業報告について

事務局（榎原考古学研究所）から総会・研修会・役員会の開催、機関誌の発行、文化庁への要望活動、発掘された日本列島展への協力について説明・報告があり了承された。なお、平成26年度の要望事項については、アンケートから「埋蔵文化財発掘調査体制等の今後の方向性の明示とその堅持に向けた基盤整備」、「地域に根ざした埋蔵文化財活用事業にかかる調査・研究への国庫補助事業の創設」を要望事項とすることについて了承した。

#### ③平成25年度収支決算について

事務局から説明・報告があり了承した。

#### ④監査報告について

監事である中鉢氏（静岡県埋蔵文化財センター）から監査結果の報告があり了承した。

#### ⑤新規加盟機関の勧誘について

事務局から新規加盟組織の勧誘について説明があり了承した。

#### ⑥発掘された日本列島2014展について

事務局から事業概要の説明・報告があり了承した。

#### ⑦平成26年度事業計画（案）について

事務局から総会・研修会・役員会の開催、機関誌の発行、文化庁への要望活動、発掘された日本列島展への協力について説明・報告があり了承した。また、10月に開催される「研修会」のテーマについては、幹事機関の奈良市埋蔵文化財調査センターから報告があった。

#### ⑧平成26年度収支予算（案）について

事務局から説明・報告があり了承した。

#### ⑨規約の改正について

事務局から説明・報告があり了承した。

#### ⑩平成27年度総会及び研修会開催地について

事務局から総会（秋田県）・研修会（岡山県）の開催地について説明があった。

〈講 演〉

「埋蔵文化財保護行政の現状と課題」

榎宜田佳男 氏（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）

専門職員数の推移、東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱い、今後の埋蔵文化財発掘調査体制の在り方についての講演をされた。

〈特別講演〉

「信仰の山・富士山」

清雲俊元 氏（山梨県文化財保護審議会会長、元富士山世界文化遺産山梨県学術委員会委員長）

5月30日（金）

〈視 察〉

8：45 甲府城跡 鉄門・稲荷櫓視察

10：00 河口浅間神社

11：00 外川家住宅

12：00 富士山駅

12：45 富士浅間神社北口本宮

13：30 解散

### b 平成26年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会研修会

期 日：10月23日（木）～10月24日（金）

会 場：奈良県奈良市法蓮町757-2

春日野荘

参加者

第2調査部第1調査課 主査 影浦 覚

内 容

10月23日（木）は春日野荘で研修を行った。24日（金）は大安寺の旧寺域を踏査後、奈良市埋蔵文化財センターを施設見学。その後、薬師寺に移動して、解体修理中の東塔内部を見学した。

〈特別講演〉

「都の大寺―発掘調査成果から」

菅谷文則 氏（奈良県立榎原考古学研究所所長）

大王（おおきみ）の寺として平城京に建立された大寺はいくつか数えられるが、その成立過程、堂塔の建立順序等は様々である。瓦や須恵器などの遺物編年を重視した調査報告では、寺の創建年

代はもちろん、堂宇等の建立順序を解明するのに充分ではないことが今日では常識になりつつある。

たとえば、藤原京から平城京への遷都に伴い、寺も多くが移建され、それに伴って瓦の転用がなされたこと。それから、寺院の流記資材帳、繡帳、絵画等の記録から、古代寺院にあっては、創建時の建物がすべて瓦葺であったわけではないことなどがわかっている。

こうしたことから、古代寺院の発掘においては、基壇の造成、礎石の配置（抜き跡の配置）、建て替えの痕跡を細かく調査、文献や絵画記録等が残されているならばそれらも調査結果と照合、柱等木材があれば年輪年代測定、さらに瓦や仏像・仏具を中心とした遺物編年を総動員して、包括的に検討していくことが今日的な古代寺院調査のあり方になってきている。

〈事例報告1〉

「平城京における大安寺の造営計画」

森下恵介 氏（奈良市埋蔵文化財調査センター所長）

大安寺は薬師寺と共に藤原京から平城京への遷都にともなって移転した官寺であり、位置的にも東西で対をなした配置である。しかしながら、薬師寺が藤原京における本薬師寺の伽藍配置をほぼ忠実に再現しているのに対して、大安寺は藤原京時代の前身である大官大寺と比べて、大きな変更が加えられていたことが調査結果によって明らかになった。最大の違いは、大官大寺の長大な回廊が、長大な僧坊に改変された点である。これは当時の国策であった鎮護国家の確立のために、優秀な僧侶の育成が重要視されていたためと考えられる。薬師寺は官寺であるものの、天武天皇が皇后の病氣平癒を目的に創建した私寺的な性格が実態であった本薬師寺が前身であり、僧侶育成という実務面を重視された大安寺とで寺の機能・役割も使い分けられたものと考えられる。

〈事例報告2〉

「唐招提寺の発掘調査成果」

米川裕治 氏（奈良県立橿原考古学研究所主任研究員）

唐招提寺は1937（昭和12）年に礼堂<sup>らいどう</sup>解体修理の際に、古社寺修理技師が行った調査を嚆矢として、過去80年近くの期間に、30次近くの調査が行われてきたが、その大半は断片的な調査が多く、遺構の把握すら容易でないところがあった。しかし、

近年になって、これまでの調査成果を概観し、積極的に解釈を試みる研究者があらわれ、研究課題が明確になってきた。さらにはこの10年間にも金堂の大修理などに伴う大規模な調査が相次いでなされるようになり、重大な知見もいくつか明らかになってきた。たとえば、金堂創建年代などに関しても金堂周辺の出土瓦、基壇の調査結果、金堂部材の年輪年代分析の結果等から、延暦年間創建の可能性が高いことが、わかるようになってきている。

〈施設見学1〉

史跡大安寺旧境内（塔院地区～南大門、経楼跡等）における遺跡整備の現状見学

大安寺は再建されているものの、規模は大きく縮小され、かつての寺域の一部が宅地化している状況である。その状況の中で、いかに遺跡整備を行っているかという観点で史跡見学が行われた。

〈施設見学2〉

奈良市埋蔵文化財調査センター「秋季特別展」の見学

『蘇る大寺』と題して、大安寺の発掘調査成果展が行われていた。時期ごとに異なる瓦、大きな風鐸、奈良三彩の壺などを見学した。

〈施設見学3〉

史跡薬師寺東塔解体の現状見学

薬師寺東塔は、経年劣化により、2009年度から2018年度迄の10年計画で、解体修復工事中である。塔全体を素屋根で覆い、7階建の作業櫓を素屋根と塔の間に回廊状に設えて作業は行われてきた。

基壇の敷石や礎石を実測後、番号を付して、慎重に解体しているところであり、基壇敷石、礎石の現況、それから外したばかりの心柱を中心に説明が行われた。礎石は低いところと高いところで15cmの高低差が生じており、それが塔全体に歪みを生じさせているという。ひとつひとつの礎石の表面には、円形の柱の痕跡がいくつも重なり合って観察された。創建時の柱の痕跡、明治時代に修復したときの柱の痕跡、歳月によって柱が少しずつずれた痕跡などが担当者の側から説明され、どれがいつの時代のものなのかを見極めることが重要である。

7階まで登り三重部の井桁組を見学後、隣接地にある薬師寺伽藍木材倉庫に入った。分解した塔の部材もいくつか拵げられてあったが、ここでは四面の水煙を間近に見ることができた。

**c 平成26年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会北海道・東北ブロック会議**

期 日：11月13日（木）～11月14日（金）

会 場：岩手県北上市立花14-62-2

北上市立埋蔵文化財センターほか

参加者：副所長 中田 仁

内 容

北上市立埋蔵文化財センターが開催機関となり、加盟13機関中10機関17名が参加して開催された。

〈会 議〉

11月13日（木）は北上市立埋蔵文化財センターにおいて全体会議を行い、開催挨拶の後、協議事項並びに各機関から提案された照会事項について、協議及び意見交換が行われた。

(1)協議事項

①平成27年度北海道・東北ブロック会議開催機関について

議長である北上市立埋蔵文化財センターから、先に決定されている輪番表に従い、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館としたい旨の提案があり、当該機関も開催を了承したので、全会一致で決定した。

②平成27・28年度北海道・東北ブロック幹事機関について

議長から、平成25年度のブロック会議において推薦のあった次期ブロック幹事候補について確認があり、青森県埋蔵文化財センター及び北海道立埋蔵文化財センターとも了承するとともに、ブロック代表幹事となる青森県埋蔵文化財センターが全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会の会長機関の候補となることについても確認された。

(2)照会事項

続いて、各機関から照会のあった事項について、提案機関から趣旨説明の後、各参加機関の事例紹介など活発な意見交換が行われた。

①リース契約における複数年契約について

青森県埋蔵文化財センターから照会の趣旨説明の後、各機関の現状について報告、意見交換が行われた。単費等での契約を除き、受託事業での複数年契約は行っていない機関が多かった。

②3月末までの受託契約における精算について

青森県から照会の趣旨説明の後、各機関の現状について報告、意見交換が行われた。

③整理作業員における障害者雇用の実績について  
青森県から照会の趣旨説明の後、3機関から雇

用実績、作業内容等について報告があり、その後、意見交換が行われた。

④確定労働保険料の支払いについて

青森県から照会の趣旨説明の後、各機関の現状について報告、意見交換が行われた。

⑤遺跡（遺構）測量システムの導入について

秋田県埋蔵文化財センターから照会の趣旨説明の後、各機関の現状について報告、意見交換が行われた。各機関の導入状況に差異がみられるとともに、導入している機関からも、費用や操作方法などの知識・技術の習得などに課題があるとの意見があった。

⑥文化財担当職員の採用及び採用試験の状況及び

⑦文化財担当職員の採用について

盛岡市遺跡の学び館並びに滝沢市埋蔵文化財センターから照会の趣旨説明の後、各機関の現状について報告、意見交換が行われた。

⑧史跡の広域的活用について

照会機関の釧路市に代わって議長から照会の趣旨説明の後、各機関の現状について報告、意見交換が行われた。

〈視 察〉

11月13日（木）の全体会議終了後、北上市立埋蔵文化財センターの視察が行われた。14日（金）は北上市立博物館及び花巻市総合文化財センターにおいて、市の担当者から説明を受けながら視察が行われた。

**d 第5回文化財写真技術研究会**

期 日：7月4日（金）・5日（土）

会 場：奈良県奈良市二条町2-9-1

奈良文化財研究所 平城宮跡資料館 講堂  
参加者：第1調査部第1調査課 主査 吉田裕実  
内 容

7月4日（金）

研究会Ⅰ

改めて学ぶ写真撮影

～文化財写真黎明期の撮影と保存～

「入江泰吉記念奈良市写真美術館における写真保存の現状」

兼子健吾 氏（奈良市写真美術館）

奈良市写真美術館での膨大な量のフィルムやガラス乾板を所蔵しており、その保存の現状についての発表がなされた。保管ケースには無酸性ダンボール。無酸性接着剤を使用するなど、保存対象物への長期的影響を考慮したものとなっている。

7月5日(土)

「光ディスクメディアの長期保存対策について」  
酒井健男 氏(株アルメディア)

寿命推定試験規格に基づく一般市販ディスクメディアの保存性能やその取り扱いについての発表がなされた。また市販ドライブとの相性もあり、購入にあたっては情報収集も必要であるとの指摘もなされた。

「埋蔵文化財写真撮影の標準仕様について」  
標準仕様検討ワーキング・グループ

デジタルカメラによる遺物撮影業務の仕様書と設計書の雛形を作成、その雛形に対する説明がなされた。その仕様に対する改善点などの指摘がなされた。

研究会Ⅱ

改めて学ぶ写真撮影

～ライティングからRAW現像処理～

「デジタル撮影におけるライティングの基礎」

玉内公一 氏(テクニカルアドバイザー)

スタジオ撮影でのライティングについて実技と共に解説が行われた。撮影時におけるカメラの設定の重要性について述べられた。

「RAWデータの現像調整処理の実際」

勝田 徹 氏(国立歴史民俗博物館)・北田仁司 氏(宮内庁正倉院事務所)・高山さやか 氏(東京大学史料編纂所)・吉田裕吏洋(公益財団法人北海道埋蔵文化財センター)

4名によりRAWデータ現像の実技とその説明が行われた。過度な現像や画像処理の必要としない適切な撮影の重要性について言及された。

## e 文化財保存修復学会第36回大会

期 日：6月7日(土)～6月8日(日)

会 場：東京都千代田区神田駿河台1-3

明治大学アカデミーコモン

参加者：第1調査部第1調査課長 田口 尚

内 容

今大会では口頭発表とポスターセッションが6月7日と8日の両日に分けられた。口頭発表では7日にセッションⅠ～Ⅳ、8日はセッションⅤ～Ⅷが開催され、合計22件の研究発表となった。ポスターセッションは、7日にP1～P60、8日にP61～P120が掲示され、それぞれコアタイムを設定し、研究発表が行われた。その他に特別行事として災害対策への学会の取り組みの報告とパネルディスカッションが開催された。また、最新の

文化財科学分析・保存処理機器、環境測定機器修復・保管材料、安価な3Dプリンターや計測機器などの展示が35件あった。

ここでは発表数が多いので、口頭発表ではセッションごとの概略、特別行事とポスター発表では、発表題目および道内における埋蔵文化財調査や文化財保存に関わるものを選別した。

(口頭発表) セッションⅠ～Ⅷ

[セッションⅠ・Ⅱ修復事例]：O3「使用方法によるアクリル樹脂系接着剤の接着力と可逆性の変化：中間層とアクリル樹脂系接着剤を用いた裏打ち」米田奈美子(保存修復油画)が出土編組製品や編布などの取上げ・強化、劣化したアイヌ墓出土の布資料や民具などの保存修復に活用できる報告として注目された。

[セッションⅢ屋外保存]：O6「ひたちなか市虎塚古墳の保存科学的調査」矢島國雄(明治大学文学部)他では装飾古墳の修復や保存管理の実際について具体例が示され、保守管理の難しさと共に新たな調査・保存方法の視点が述べられた。

[セッションⅣ災害]：O8「文化財の放射線対策に関する調査研究—体制づくりと日本の文化施設のバックグラウンド研究—」石崎武志(東京文化財研究所)他の中で、初めて文化財の放射線被害対策について発表された。原発やその実験施設周辺にある文化財収蔵・展示施設では今後検討を要する課題である。O9「津波被災資料の安定化処理—陸前高田市立博物館の取り組み—」神庭信幸(東京国立博物館)他は、簡易的な応急措置済の文化財の今後の対応と目指すべき方向性について示唆する重要な発表である。海に囲まれ、地震の多い北海道では津波被災時に対応を含め、参考とすべき内容であった。

[セッションⅤ分析]：O12「アジャンター仏教寺院遺跡第2窟にみられる赤色の有機質色材に関する調査」島津美子(国立歴史民俗博物館)他では、有機染料分析方法と産地分析についての新知見が得られた。

[セッションⅥ分析]：O15「ローマ期エジプトの三連祭壇画に使われた膠着剤原料のELISA法及び質量分析法による同定」深草俊輔(奈良女子大学)他が興味深く、今後は考古資料にも期待される分析手法のひとつである。

[セッションⅦその他]：O18「来歴を活かす資料保存を考える—国立歴史民俗博物館におけるコンディション調査より—」金山正子(公益財団法人)

人元興寺文化財研究所) 他が民俗資料調査に問題点を提起した。以前の補修痕跡と使用材料は時代背景や技術水準を示す重要な記録である。安易に除去せず、時代に合わせた修復が必要とのこと。修復技術や修復材料も、保存収集すべきである。

[セッションⅧ製作技法] : O20「敦煌文書における楮紙と麻紙について」坂本昭二(龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター) 他によって、書かれた紙素材から当時の植生分布と流通・交易などの知見が得られ、素材分析の重要性を再認識させる発表であった。

(特別行事)

内田俊秀による「文化財保存修復学会と災害対策」の報告につづき、「阪神・淡路大震災における文化財保存修復学会の活動」日高真吾(災害対策調査部会)、「中越地震における文化財保存修復学会の活動」村田忠繁(国立民族学博物館)、「能登半島地震における文化財保存修復学会の活動」中村晋也(金沢学院大学)、「東日本大震災における文化財保存修復学会の活動」日高真吾、「山口・島根豪雨における文化財保存修復学会の活動」日高真吾らの発表があり、各地で発生した災害と膨大な文化財・歴史資料等の被害報告、レスキュー活動、応急措置、個別資料修復活動、処理方法などを口頭とポスターにより報告した。

(ポスター発表)

P040「臼杵市・下藤キリシタン墓地における遺構の凍結防止策<sup>(2)</sup>」朽津信明(東京文化財研究所) 他、P041「虎塚古墳石室内の温湿度と壁面含水量の調査結果」犬塚将英(東京文化財研究所) 他、P046「被災した漆器製品の応急処置事例」日高真吾(国立民族学博物館) 他、P091「X線CTによる「アイヌ文化伝世の漆椀」の内部構造調査<sup>(2)</sup>—「熊図文入漆椀」と「津軽塗(系)漆椀」に注目して」小林幸雄(北海道開拓記念館) 他、P103「アイヌ民族資料の保存修復に向けた現況調査」杉山智昭(北海道開拓記念館) 他などが注目される発表であった。

### 3 分析・鑑定・保存処理等

#### (1) 分析・鑑定

道央部の縄文時代・続縄文時代の玉類の化学組成を測定し、石材の確認・同定を行った。継続的に作業を行い、基礎データを収集する計画である。また、道南地方の幕末期の銃弾の化学組成分析を行った。今後は関連情報を収集し、測定値の検討

を行う。また、重要遺跡確認調査にかかる遺物分析・同定の準備を進めている。

蛍光X線分析装置、電子顕微鏡などの設置環境の維持管理を行った。

#### (2) 保存処理

①重要文化財「北海道美々8遺跡出土品」については、保存処理計画の立案をしている。

道立センター収蔵・展示・保管中の木製品や金属製品などは、日々保管環境を点検し、未処理のものは保存処理を実施した。点検により、劣化や破損確認された資料については、再処理と修復を実施した。また、収蔵品のうち、水漬保管の資料は、容器の洗浄、水と養生材料の交換を行った。処理済木製品や金属製品など、乾燥保管の資料はシリカゲル、アートソープ、脱酸素剤などの調湿剤を随時交換し、必要性に応じてフィルムパックを行った。

## 4 市町村教育委員会支援

#### (1) 指導・協力等

①厚真町上幌内2遺跡発掘調査検出の中世アイヌ墓副葬品の取り上げについて(厚真町教育委員会) [6/28(土)~6/29(日) 田口] アイヌ墓出土人骨および副葬品をシリコンと硬質発泡ウレタン樹脂により切り取り移設した。

②恵庭市西島松Bチャシ跡(環濠)の調査指導(恵庭市教育委員会) [7/7(月)・7/8(火) 田口] 壕跡土層断面の剥ぎ取り転写を指導・助言した。

③町内遺跡発掘調査事業にかかる職員の派遣(別海町教育委員会) [7/14(月)~7/17(木) 田口] 床丹1チャシ跡出土遺物のサンプリング及び壕の土層断面剥ぎ取り転写を指導・助言した。

④上ノ国町「町内出土遺物保存処理事業に係る職員の派遣」(上ノ国町教育委員会) [10/1(水)~10/3(金) 田口] 木製品の糖アルコール保存処理、漆器の保存処理法及び塗膜分析用プレパラート作成に関する指導・助言をした。

⑤平取町豊糠8遺跡出土金属製品保存処理指導およびX線透過撮影について(平取町教育委員会) [11/5(水) 田口] X線透過画像を撮影し、保存処理の留意点を指導・助言した。

⑥金属製品保存処理の指導・助言について(美幌町教育委員会) [12/10(水)~12/11(木) 田口] 町内出土金属製品の保存処理、収蔵保管、X線透過撮影などの実践研修をした。

⑦『寒冷地における遺跡保存の検討会』（東北芸術工科大学）[11/15（土）～11/16（日）田口]  
東北各地の屋外遺跡保存法や劣化状況を報告し、遺跡のモニタリングおよび今後の課題を討議した。

## (2) 出前研修会

「地域の埋蔵文化財―後志を対象に―」

目的：地域の埋蔵文化財についての見識を深めるとともに、公開活用の事例として、展示収蔵施設を見学する。

講師

北海道文化財保護協会 理事 矢吹俊男 氏  
余市水産博物館 館長 乾 芳宏 氏

日時：9月4日（木）

会場：余市町中央公民館・余市水産博物館

内容

研修1

「後志の埋蔵文化財」

（講師：矢吹俊男 氏）

後志の埋蔵文化財について研修を行った。

研修2

「余市町の埋蔵文化財」

（講師：乾 芳宏 氏）

余市町の遺跡と出土資料についての概要および余市水産博物館の公開活用について研修を行った。

研修3

「余市町大川遺跡」

（講師：乾 芳宏 氏）

余市町大川遺跡について研修を行った。

研修4

「余市水産博物館見学」

（講師：乾 芳宏 氏）

余市水産博物館見学の見学を行った。

日程

9：45 受付・オリエンテーション

10：00 研修1

11：00 研修2

12：00 昼食

13：00 研修3

14：00 研修4

15：30 研修終了・修了式

参加者：市町村職員等10名、センター職員13名、計23名。



▲出前研修

### 【出前研修参加者一覧】

	氏名	振興局	所属
1	矢吹 俊男	北海道文化財保護協会理事	（講師）
2	乾 芳宏	余市水産博物館館長	（講師）
3	工藤 義衛	石狩	石狩市教育委員会
4	木村 則子	石狩	石狩市教育委員会
5	木戸奈央子	石狩	石狩市教育委員会
6	塚田 直哉	檜山	上ノ国町教育委員会
7	杉浦章一郎	空知	岩見沢市教育委員会
8	石川 直章	後志	小樽市教育委員会
9	菅原 慶郎	後志	小樽市教育委員会
10	山本 侑奈	後志	小樽市教育委員会

（センター職員を除く）

## (3) 埋蔵文化財担当職員研修会

「石器分類の実際 続縄文時代・擦文・オホーツク文化期」

目的：発掘調査に携わっている市町村職員を対象に、①石器群の変遷 続縄文時代、②石器群の変遷 擦文文化期、③石器群の変遷 オホーツク文化期について、専門的な研修を行う。

講師

北海道大学埋蔵文化財調査室 高倉 純 氏  
利尻富士町教育委員会 山谷文人 氏

日時：12月12日（金）

会場：北海道立埋蔵文化財センター2階研修室

内容

研修1

「石器群の変遷 続縄文時代」

（講師：高倉 純 氏）

研修2

「石器群の変遷 擦文文化期」

（講師：高倉 純 氏）

### 研修3

「石器群の変遷 オホーツク文化期」

(講師：山谷文人 氏)

\*航空機運休により山谷文人氏は来館できなかったため、研修3の部分では以下の研修会参加者が

#### 【埋蔵文化財担当職員研修会参加者一覧】

	氏名	振興局	所属
1	塚田真理子	石狩	北広島市教育委員会
2	山田 央	渡島	七飯町教育委員会
3	木元 豊	渡島	木古内町教育委員会
4	大谷 茂之	渡島	八雲町教育委員会
5	石神 敏	後志	小樽市総合博物館
6	小川 康和	後志	余市町教育委員会
7	岩谷維千歌	後志	余市町教育委員会
8	高島 孝宗	宗谷	枝幸町教育委員会
9	金田 卓浩	上川	名寄市教育委員会
10	眞坂 隆太	空知	滝川市教育委員会
11	山路 紀子	空知	砂川市教育委員会
12	葛西 智義	空知	深川市教育委員会
13	八重柏 誠	オホーツク	美幌町教育委員会
14	林 勇介	オホーツク	湧別町教育委員会
15	天方 博章	オホーツク	羅臼町教育委員会
16	平河内 毅	オホーツク	斜里町教育委員会
17	工藤 大	オホーツク	斜里町教育委員会
18	田代 雄介	胆振	むかわ町教育委員会
19	三谷 智広	胆振	洞爺湖町教育委員会
20	森岡 健治	日高	平取町教育委員会
21	片岡 佑平	釧路	弟子屈町教育委員会
22	中田 裕香		北海道教育委員会

(センター職員を除く)



▲埋蔵文化財担当職員研修会

ら山谷氏作成の資料に基づいてコメントや発表をしていただいた。

枝幸町教育委員会 高島孝宗 氏

「石器群の変遷 オホーツク文化期資料のコメント」

公益財団法人北海道埋蔵文化財センター  
第2調査部第1調査課 主査 福井淳一

「オホーツク文化の石錘」

むかわ町教育委員会 田代雄介 氏

「オホーツク文化期の石器についてのコメント」

#### 日程

10:00 受付開始

10:20 オリエンテーション

10:30 研修1

12:00 昼食

13:30 研修2

15:00 研修3

16:30 質疑応答

17:00 研修終了・修了式

参加者：市町村職員等22名、センター職員23名、計45名

## Ⅲ 収蔵・保管事業

### 1 収蔵資料

出土文化財を北海道出土文化財取扱要綱（平成13年4月11日付け教育長・出納長通知）等に則して保管し、いつでも活用できるよう管理を行い、整理作業を進めている。今年度新たに収蔵した資料はない。

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物 コンテナ数	その他 コンテナ数	復元土器 個体数		
1	道教委	1	昭和52	1977	美沢川流域の遺跡群Ⅰ	千歳市	美々4	5	140	1
2	道教委	1	昭和52	1977	美沢川流域の遺跡群Ⅰ	千歳市	美々5	1	1	0
3	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々4	3	152	15
4	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々5	11	74	0
5	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々6	2	13	0
6	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々7	7	42	0
7	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々4	6	365	108
8	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々5	3	50	5
9	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々6	2	16	3
10	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々7	1	4	3
11	北埋調報	7	昭和56	1981	美沢川流域の遺跡群Ⅴ	千歳市	美々8	1	91	117
12	北埋調報	8	昭和57	1982	美沢川流域の遺跡群Ⅵ	千歳市	美々8	1	5	9
13	北埋調報	9	昭和57	1982	ママチ遺跡	千歳市	ママチ	9	161	73
14	北埋調報	14	昭和58	1983	美沢川流域の遺跡群Ⅶ	千歳市	美々4	9	166	143
15	北埋調報	14	昭和58	1983	美沢川流域の遺跡群Ⅶ	千歳市	美々9	1	2	4
16	北埋調報	17	昭和59	1984	美沢川流域の遺跡群Ⅷ	千歳市	美々4	3	33	32
17	北埋調報	17	昭和59	1984	美沢川流域の遺跡群Ⅷ	千歳市	美々5	1	5	0
18	北埋調報	24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々2	9	53	4
19	北埋調報	24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々4	5	57	0
20	北埋調報	24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々8	1	7	5
21	北埋調報	35	昭和61	1986	美沢川流域の遺跡群Ⅹ	千歳市	美々3	2	13	4
22	北埋調報	36	昭和61	1986	ママチ遺跡Ⅲ	千歳市	ママチ	8	84	75
23	北埋調報	44	昭和62	1987	美沢川流域の遺跡群ⅩⅠ	千歳市	美々8	2	42	27
24	北埋調報	62	平成1	1989	美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ	千歳市	美々3	2	39	7
25	北埋調報	62	平成1	1989	美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ	千歳市	美々8	1	42	72
26	北埋調報	69	平成2	1990	美沢川流域の遺跡群ⅩⅣ	千歳市	美々3	14	134	34
27	北埋調報	69	平成2	1990	美沢川流域の遺跡群ⅩⅣ	千歳市	美々8低湿部	0	0	0
28	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々3	4	10	31
29	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々7	3	14	12
30	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々8	3	37	16
31	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々8低湿部	1	0	2
32	北埋調報	83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々7	3	11	7
33	北埋調報	83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々8	2	59	72
34	北埋調報	83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々8低湿部	1	0	1
35	北埋調報	86	平成5	1993	ユカンボシC2遺跡	千歳市	ユカンボシC2	4	24	14
36	北埋調報	89	平成5	1993	美沢川流域の遺跡群ⅩⅦ	千歳市	美々8	1	0	84
37	北埋調報	90	平成5	1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市	オサットー1	1	0	0
38	北埋調報	90	平成5	1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市	キウス7	4	14	13
39	北埋調報	92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	キウス5	9	33	12
40	北埋調報	92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	キウス7	1	5	7
41	北埋調報	92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	ケネフチ8	1	5	0
42	北埋調報	96	平成6	1994	オサツ2・14遺跡	千歳市	オサツ2	4	20	117
43	北埋調報	96	平成6	1994	オサツ2・14遺跡	千歳市	オサツ14	7	31	16
44	北埋調報	100	平成7	1995	ユカンボシC9遺跡	千歳市	ユカンボシC9	3	25	33
45	北埋調報	102	平成7	1995	美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ	千歳市	美々8	0	0	14
46	北埋調報	102	平成7	1995	美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ	千歳市	美々8低湿部	2	168	10
47	北埋調報	103	平成7	1995	オサツ2遺跡(2)	千歳市	オサツ2	5	0	30
48	北埋調報	104	平成7	1995	キウス5遺跡(2)	千歳市	キウス5	9	89	18
49	北埋調報	105	平成7	1995	キウス7遺跡(3)	千歳市	キウス7	15	97	110
50	北埋調報	113	平成8	1996	美沢川流域の遺跡群ⅩⅨ	千歳市	美々4	12	343	229
51	北埋調報	114	平成8	1996	美沢川流域の遺跡群ⅩⅩ	千歳市	美々8低湿部	1	0	0
52	北埋調報	115	平成8	1996	キウス5遺跡(3)	千歳市	キウス5	17	113	254
53	北埋調報	116	平成8	1996	キウス5遺跡(4)B・C地区	千歳市	キウス5	9	24	17
54	北埋調報	117	平成8	1996	キウス7遺跡(4)	千歳市	キウス7	8	29	0
55	北埋調報	119	平成8	1996	キウス4遺跡	千歳市	キウス4	4	37	1
56	北埋調報	124	平成9	1997	キウス4遺跡(2)	千歳市	キウス4	24	377	121
57	北埋調報	125	平成9	1997	キウス5遺跡(5)A2地区	千歳市	キウス5	11	151	159
58	北埋調報	126	平成9	1997	キウス5遺跡(6)B・C地区	千歳市	キウス5	4	46	1
59	北埋調報	127	平成9	1997	キウス7遺跡(5)	千歳市	キウス7	6	16	5
60	北埋調報	128	平成9	1997	ユカンボシC15遺跡(1)	千歳市	ユカンボシC15	3	36	81
61	北埋調報	133	平成10	1998	ユカンボシC15遺跡(2)	千歳市	ユカンボシC15	14	283	63
62	北埋調報	134	平成10	1998	キウス4遺跡(3)A H K I 地区	千歳市	キウス4	42	302	234
63	北埋調報	135	平成10	1998	キウス4遺跡(4)A2地区	千歳市	キウス4	5	39	14
64	北埋調報	136	平成10	1998	キウス5(7) キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス5	1	0	0
65	北埋調報	136	平成10	1998	キウス5(7) キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス7	1	1	0
66	北埋調報	138	平成11	1999	柏台1遺跡	千歳市	柏台1	26	22	0
67	北埋調報	144	平成11	1999	キウス4遺跡(5)	千歳市	キウス4	11	33	40
68	北埋調報	146	平成11	1999	ユカンボシC15遺跡(3)	千歳市	ユカンボシC15	1	46	14
69	北埋調報	147	平成11	1999	対雁2遺跡(1)	江別市	対雁2	2	42	14
70	北埋調報	148	平成11	1999	キウス4遺跡(6)	千歳市	キウス4	7	16	2
71	北埋調報	152	平成12	2000	キウス4遺跡(7)	千歳市	キウス4	18	109	45
72	北埋調報	157	平成12	2000	キウス4遺跡(8)	千歳市	キウス4	49	519	380
73	北埋調報	159	平成12	2000	ユカンボシC15遺跡(4)	千歳市	ユカンボシC15	1	1	3

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物 コンテナ数	その他 コンテナ数	復元土器 個体数	
74	北埋調報 160	平成12	2000	対雁2遺跡(2)	江別市	対雁2	5	32	41
75	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー1	4	14	33
76	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー2	1	5	0
77	北埋調報 174	平成13	2001	ケネフチ9遺跡	千歳市	ケネフチ9	2	10	1
78	北埋調報 176	平成13	2001	ユカンボシC15遺跡(5)	千歳市	ユカンボシC15	0	0	0
79	北埋調報 177	平成13	2001	対雁2遺跡(3)	江別市	対雁2	1	6	69
80	北埋調報 178	平成14	2002	西島松5遺跡	恵庭市	西島松5	68	218	97
81	北埋調報 180	平成14	2002	キウス4遺跡(9)	千歳市	キウス4	90	1,623	696
82	北埋調報 187	平成14	2002	キウス4遺跡(10)	千歳市	キウス4	0	0	0
83	北埋調報 188	平成14	2002	オリイカ1遺跡	千歳市	オリイカ1	2	32	2
84	北埋調報 189	平成14	2002	オリイカ2遺跡	千歳市	オリイカ2	5	17	4
85	北埋調報 192	平成14	2002	ユカンボシC15遺跡(6)	千歳市	ユカンボシC15	0	59	0
86	北埋調報 193	平成14	2002	対雁2遺跡(4)	江別市	対雁2	41	81	36
87	北埋調報 194	平成15	2003	西島松5遺跡(2)	恵庭市	西島松5	7	21	19
88	北埋調報 204	平成15	2003	対雁2遺跡(5)	江別市	対雁2	3	5	11
89	北埋調報 206	平成15	2003	オリイカ1遺跡(2)	千歳市	オリイカ1	1	2	2
90	北埋調報 207	平成15	2003	チブニー2遺跡(2)	千歳市	チブニー2	2	12	12
91	北埋調報 209	平成16	2004	西島松5遺跡(3)	恵庭市	西島松5	55	455	467
92	北埋調報 215	平成16	2004	対雁2遺跡(6)	江別市	対雁2	0	1	0
93	北埋調報 221	平成17	2005	オリイカ2遺跡(2)	千歳市	オリイカ2	23	34	10
94	北埋調報 224	平成18	2006	西島松5遺跡(4)	恵庭市	西島松5	10	27	22
95	北埋調報 225	平成17	2005	チブニー2遺跡(3)	千歳市	チブニー2	31	7	27
96	北埋調報 226	平成17	2005	対雁2遺跡(7)	江別市	対雁2	16	38	41
97	北埋調報 231	平成18	2006	対雁2遺跡(8)	江別市	対雁2	33	49	429
98	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	梅川2	3	5	6
99	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	祝梅川上田	5	9	4
100	北埋調報 240	平成18	2006	対雁2遺跡(9)	江別市	対雁2	13	14	22
101	北埋調報 248	平成20	2008	西島松3・5遺跡(5)	恵庭市	西島松5	33	486	140
102	北埋調報 251	平成19	2007	キウス5遺跡(8)	千歳市	キウス5	3	17	10
103	北埋調報 252	平成19	2007	キウス9遺跡	千歳市	キウス9	13	49	181
104	北埋調報 253	平成20	2008	梅川4遺跡(1)	千歳市	梅川4	8	20	51
105	北埋調報 255	平成19	2007	対雁2遺跡(10)	江別市	対雁2	1	2	4
106	北埋調報 260	平成21	2009	西島松5遺跡(6)	恵庭市	西島松5	39	53	11
107	北埋調報 265	平成21	2009	西島松2遺跡	恵庭市	西島松2	93	437	168
108	北埋調報 267	平成21	2009	オリイカ2遺跡(3)	千歳市	オリイカ2	3	6	53
109	北埋調報 268	平成21	2009	アンカリトー7・9遺跡	千歳市	アンカリトー7	3	10	3
110	北埋調報 268	平成21	2009	アンカリトー7・9遺跡	千歳市	アンカリトー9	8	1	0
111	北埋調報 269	平成21	2009	梅川4遺跡(2)	千歳市	梅川4	8	57	20
112	北埋調報 284	平成23	2011	キウス5遺跡(9)	千歳市	キウス5	5	22	134
113	北埋調報 285	平成23	2011	祝梅川小野遺跡(1)梅川1遺跡(1)	千歳市	祝梅川小野	31	180	81
114	北埋調報 285	平成23	2011	祝梅川小野遺跡(1)梅川1遺跡(1)	千歳市	梅川1		2	2
115	北埋調報 296	平成24	2012	対雁2遺跡(11)	江別市	対雁2	18	85	101
116	北埋調報 297	平成24	2012	祝梅川小野遺跡(2)梅川1遺跡(2)	千歳市	祝梅川小野	7	27	54
117	北埋調報 297	平成24	2012	祝梅川小野遺跡(2)梅川1遺跡(2)	千歳市	梅川1	1		3
118	北埋調報 299	平成24	2012	キウス5遺跡(10)	千歳市	キウス5	30	112	56
119	北埋調報 300	平成24	2012	祝梅川上田遺跡(2)	千歳市	祝梅川上田	5	30	13
120	北埋調報 306	平成25	2013	梅川4遺跡(3)	千歳市	梅川4	55	201	183
121	北埋調報 307	平成25	2013	祝梅川小野遺跡(3)梅川1遺跡(3)	千歳市	祝梅川小野	2	8	0
122	北埋調報 307	平成25	2013	祝梅川小野遺跡(3)梅川1遺跡(3)	千歳市	梅川1	35	108	0

(道教委・道埋文センター発掘調査分) 合計 1,292 9,707 6,356

1	保第 2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ボンオサツ	2	1	18
2	保第 2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ケネフチ5	5	42	0
3	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ15	1	14	1
4	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ16	4	44	14
5	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ18	1	1	0
6	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	ボンオサツ	1	1	0
7	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	オサツ18	1	1	8
8	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	ケネフチ5	5	14	2
9	保第 6	平成8	1996	オサツ15(2)	千歳市	オサツ15	5	47	7
10	保第 7	平成8	1996	オサツ16(2)	千歳市	オサツ16	13	28	8
11	保第 8	平成9	1997	オサツ15(3)	千歳市	オサツ15	6	26	4
12	保第 9	平成9	1997	オサツ16(3)	千歳市	オサツ16	2	14	0
13	保第 10	平成9	1997	ケネフチ5(3)	千歳市	ケネフチ5	11	68	23

(保護協会発掘調査分) 合計 57 301 85

総 合 計 1,349 10,008 6,441

## 2 図書資料

### (1) 購入図書一覧

番号	書名	編著者名	出版者
1	北の縄文連続講座・記録集2 「縄文人はどこへ行ったか？」	北の縄文文化を発信する会	北の縄文文化を発信する会
2	旧石器時代(考古調査ハンドブック9)	小田静夫	ニュー・サイエンス社
3	古墳の見方(考古調査ハンドブック10)	土生田純之	ニュー・サイエンス社
4	古代官衙(考古調査ハンドブック11)	江口 桂	ニュー・サイエンス社
5	遺跡・遺物の語りを探る フィールド科学の入口	小林達雄、赤坂憲雄	玉川大学出版部
6	三内丸山遺跡(日本の遺跡48)	岡田康弘	同成社
7	考古学の研究法	一瀬和夫	学生社
8	The縄文公式テキストBOOK	三内丸山縄文発信の会	三内丸山縄文発信の会
9	よみがえる縄文の女神	渡辺 誠	学研パブリッシング
10	土器の実測をしよう!はじめて実測を試みるあなたへ 第2弾	小畑三千代	九州文化財研究所
11	考古学とポピュラー・カルチャー	櫻井準也	同成社
12	北の自然を生きた縄文人・北黄金貝塚(シリーズ「遺跡を学ぶ」097)	青野友哉	新泉社
13	縄文社会と弥生社会(日本歴史の最新講義10)	設楽博己	敬文舎
14	縄文人がはくの家(うち)にやってきました!?	山田康弘	実業之日本社
15	はじめての考古学(あさがく選書4)	菊池徹夫	朝日学生新聞社
16	絵本版おはなし日本の歴史1 縄文のムラ	児玉祥一、早川和子	岩崎書店
17	縄文人のくらし大研究 衣食住と心をさぐる!	岡崎務 著/小栗一夫 監修	P H P 研究所
18	火山のしくみ しかけえほん	フルール・スター	大日本絵画
19	縄文少年ヨギ	水木しげる	講談社
20	大工道具の文明史 日本・中国・ヨーロッパの建築技術(歴史文化ライブラリー374)	渡邊 晶	吉川弘文館
21	イネの歴史を探る フィールド科学の入口	佐藤洋一郎、赤坂憲雄	玉川大学出版部
22	化石観察入門 様々な化石の特徴、発掘方法、新しい調べ方がわかる	芝原暁彦	誠文堂新光社
23	千島列島をめぐる日本とロシア	秋月俊幸	北海道大学出版会
24	北海道を考える	齊藤 傑	北海道出版企画センター
25	焚き火大全	吉長成恭、関根秀樹、中川重年	創森社
26	先生のための百科事典ノート この一冊で授業がわかる!	赤木かん子	ポプラ社
27	歴史的思考力を伸ばす授業づくり	島山孟郎、松本通孝	青木書店
28	子どもとミュージアム 学校で使えるミュージアム活用ガイド	日本博物館協会	ぎょうせい

### (2) 受領刊行物一覧 (\*所在地市町村コード順に掲載。平成25年12月14日~平成26年12月31日受領分。)

番号	[北海道]
	北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館
1	アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ46 揺れる山丹神の岬
2	アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ47 クレイセの女
3	アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ48 メノコユカラ私の姉サムブンクルが私を妬んだためにウバユリの根を掘って採る際に私を殺した
4	平成25年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗技術調査5
5	地域創造 第36号
	北海道立アイヌ民族文化研究センター
6	アイヌ民族文化研究センターだより No40
7	北海道立アイヌ民族文化研究センター 研究紀要第20号
	公益財団法人北海道生涯学習協会 道民カレッジ事務局
8	カレッジだより Vol.25
	北海道大学
9	リテラポプリー53号
	北海道大学総合博物館
10	Biodiversity and Biogeography of the Kuril Islands and Sakhalin vol. 4
11	知られざるクリル・カムチャツカ ロシアから見た境界のイメージ
12	北海道大学総合博物館ニュース 28号
13	北海道大学総合博物館ニュース 29号
	北海道立文学館
14	絵本・カムイの物語 鑑賞ノート
15	第19回特別展「紙芝居展」 紙芝居がやって来た
16	「荒巻義雄の世界」展
17	平成24年度 年報
18	資料情報と研究 2013
19	北の表現者たち 2014 北海道文学大事典補遺
	一般財団法人北海道開拓の村
20	野外博物館北海道開拓の村 村民だより VOL.26 ('14年春号)
21	野外博物館北海道開拓の村 村民だより VOL.27 ('14年夏号)
22	野外博物館北海道開拓の村 村民だより VOL.28 ('14年秋号)
23	野外博物館北海道開拓の村 村民だより VOL.29 ('14年冬号)
	札幌市教育委員会
24	市内遺跡発掘調査報告書6 平成25年度 調査報告書
	札幌市埋蔵文化財センター
25	札幌市文化財調査報告書99 S354遺跡 第3次調査
26	札幌市文化財調査報告書100 S547遺跡
	アイヌ民族に伝わる漆器の調査研究グループ
27	アイヌ民族に伝わる漆器の調査研究 ―アイヌ民具としての漆器類の基礎的データの収集と分析―
	網走市立郷土博物館
28	史跡最寄貝塚整備事業報告書
29	モヨロ貝塚発見100年シンポジウム「もっと知りたい!モヨロのくらし」開催概要報告書
	苫小牧市教育委員会 苫小牧市埋蔵文化財調査センター
30	北海道苫小牧市 市内遺跡発掘調査等事業報告書
	三笠市立博物館
31	三笠市立博物館年報 第31号 2012年度

32	三笠市立博物館紀要 第17号 千歳市教育委員会埋蔵文化財センター
33	千歳市文化財調査報告書38 オサツ8 遺跡
34	国指定史跡 キウス周堤墓群
35	ちとせの遺跡 千歳川左岸
36	ちとせの遺跡 千歳川右岸
37	ちとせの遺跡 美々川・美沢川流域
38	ちとせの遺跡 キウス川流域 恵庭市郷土資料館
39	恵庭市郷土資料館年報18 2014 有島記念館
40	有島記念館 館報 13号 美幌博物館
41	美幌町埋蔵文化財各種開発確認調査報告書
	[青森]
	弘前大学人文学部 北日本考古学研究センター
42	冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト研究報告書1 亀ヶ岡文化の低湿地遺跡
43	冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト研究報告書2 亀ヶ岡文化の漆工芸I
44	冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト研究報告書3 日本の出土米I
	[岩手]
	滝沢市埋蔵文化財センター
45	狐洞遺跡発掘調査報告書
46	滝沢市埋蔵文化財センター調査報告書第1集 滝沢笹森遺跡発掘調査報告書
47	タイムカプセル たきざわ
	[宮城]
	東北歴史博物館
48	東北歴史博物館研究紀要15
	[秋田]
	秋田県立博物館
49	Museum News 秋田県立博物館ニュース No158
50	Museum News 秋田県立博物館ニュース No159
51	秋田県立博物館 年報 平成26年度
52	秋田県立博物館研究報告 第39号
	[福島]
	福島県教育委員会
53	福島県文化財調査報告書第488集 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告13 西木流C遺跡(1次)
54	福島県文化財調査報告書第489集 阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘調査報告3 小田高原遺跡(3次調査)
55	福島県文化財調査報告書第490集 トロミ地区遺跡調査報告2 トロミ遺跡(1・2次調査)
56	福島県文化財調査報告書第491集 常磐自動車道遺跡調査報告68 赤柴前遺跡(3・4次調査) 赤柴遺跡 北狼沢A遺跡
57	福島県文化財調査報告書第492集 常磐自動車道遺跡調査報告69 南狼沢遺跡(1次調査) 南狼沢B遺跡
58	福島県文化財調査報告書第493集 常磐自動車道遺跡調査報告70 朴木原遺跡 新田遺跡
59	福島県文化財調査報告書第494集 福島県内遺跡分布調査報告20
	広野町教育委員会
60	広野町文化財調査報告書第5冊 桜田IV遺跡
	[茨城]
	水戸市埋蔵文化財センター
61	水戸市埋蔵文化財調査報告第26集 荷鞍坂遺跡(第1地点)
62	水戸市埋蔵文化財調査報告第58集 台渡里14
63	水戸市埋蔵文化財調査報告第59集 吉田神社遺跡(第1地点)
64	水戸市埋蔵文化財調査報告第60集 日新塾跡 第1次～第6次発掘調査報告書
	[栃木]
	栃木県教育委員会
65	栃木県埋蔵文化財調査報告第363集 栃木県埋蔵文化財保護行政年報36 平成24年度(2012)
66	栃木県埋蔵文化財調査報告第364集 下野国分尼寺跡II
67	栃木県埋蔵文化財調査報告第365集 頼朝塚古墳群
68	栃木県埋蔵文化財調査報告第366集 神田城南遺跡
69	栃木県埋蔵文化財調査報告第367集 薬師堂遺跡
70	栃木県埋蔵文化財調査報告第368集 くるま橋遺跡
71	栃木県埋蔵文化財調査報告第369集 北ノ内遺跡・助五郎内遺跡・星ノ宮遺跡
72	栃木県埋蔵文化財調査報告第370集 西向遺跡
	公益財団法人とちぎ未来づくり財団文化財センター
73	研究紀要 第22号 2014
	[埼玉]
	所沢市教育委員会
74	所沢市立埋蔵文化財調査センター年報 No.19
75	所沢市埋蔵文化財調査報告書 第60集 市内遺跡調査報告20 一下安松遺跡第6次調査-
76	所沢市埋蔵文化財調査報告書 第61集 北久米遺跡 -第1～4次調査-
77	所沢市埋蔵文化財調査報告書 第62集 谷戸遺跡 -第3次調査-
	桶川市教育委員会
78	平成25年度 桶川市内遺跡範囲確認調査報告書 吉見町教育委員会
79	吉見町埋蔵文化財調査報告書 第13集 町内遺跡8
	[東京]
	駿台史学会
80	駿台史學 第150号
81	駿台史學 第151号
82	駿台史學 第152号
	公益社団法人日本文化財保護協会
83	埋蔵文化財調査要覧 平成26年度 公益財団法人伝統文化活性化国民協会

84	伝統文化 2014春 No51 株式会社文化環境研究所
85	Cultivate42号
86	文環研レポート 第33号 港区立港郷土資料館
87	資料館だより 第72号
88	資料館だより 第73号
89	資料館だより 第74号
90	港郷土資料館館報31
91	港郷土資料館館報32
92	台東区教育委員会 台東区埋蔵文化財発掘調査報告書70 東京都台東区合羽橋通り遺跡 (株)バスコ文化財センター
93	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書23 神成松遺跡第5地点 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟
94	世界遺産 年報 2014 大成エンジニアリング(株)
95	東京都渋谷区豊沢貝塚第14地点
96	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書21 上粕屋・鳥居崎遺跡 (有)吾妻考古学研究所
97	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書22 王禅寺口横穴墓群 第2次調査 株式会社 四門
98	東京都渋谷区 千駄ヶ谷五丁目遺跡 3次調査 [神奈川県] 神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課
99	神奈川県埋蔵文化財調査報告59
100	神奈川県埋蔵文化財センター年報25
101	平成25年度かながわの遺跡展・巡回展 地中に埋もれた江戸時代の道具たち 公益財団法人かながわ考古学財団
102	年報20 平成24年度
103	研究紀要19 かながわの考古学
104	かながわ考古学財団調査報告294 上粕屋・石倉中遺跡
105	かながわ考古学財団調査報告295 馬場綿内谷遺跡
106	かながわ考古学財団調査報告296 小倉原西遺跡
107	かながわ考古学財団調査報告297 中依知遺跡群 (第2次調査)
108	かながわ考古学財団調査報告298 西富岡・向畑遺跡 I
109	かながわ考古学財団調査報告299 上ノ町遺跡IV
110	かながわ考古学財団調査報告300 河原口坊中遺跡 第4次調査
111	かながわ考古学財団調査報告301 下馬周辺遺跡
112	かながわ考古学財団調査報告302 畑久保西遺跡
113	かながわ考古学財団調査報告303 上ノ町遺跡V
114	かながわ考古学財団調査報告304 河原口坊中遺跡 第1次調査
115	かながわ考古学財団調査報告305 東田原象ヶ谷戸遺跡 株式会社玉川文化財研究所
116	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書18 中原D遺跡第4地点
117	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書19 船久保遺跡
118	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書27 下北原遺跡Ⅲ 横浜市歴史博物館
119	横浜市歴史博物館NEWS 36
120	横浜市歴史博物館NEWS 37 (株)アーク・フィールドワークシステム
121	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書24 河原口坊中遺跡第6次調査 国際文化財株式会社
122	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書14 河原口坊中遺跡第5次調査 [新潟] 新潟市文化財センター
123	シンポジウム 蒲原平野の王墓 古津八幡山古墳を考える 1600年の時を越えて
124	シンポジウム 蒲原平野の王墓 古津八幡山古墳を考える 1600年の時を越えて -記録集-
125	日本遺跡Ⅱ 第6次調査
126	峰岡城山遺跡 第2次調査
127	細池寺道上遺跡Ⅱ 第25次調査
128	沖ノ羽遺跡V 第18・19次調査
129	新潟市文化財センター年報 第1号 -平成23(2011)年度・平成24(2012)年度年版-
130	敬和学園大学 人文社会科学研究所年報 No12 敬和学園大学 新発田学研究センター
131	年報 新発田学 第5号 津南町教育委員会
132	津南町文化財調査報告書 第63輯 本ノ木遺跡
133	津南町文化財調査報告書 第64輯 諏訪前遺跡
134	津南町文化財調査報告書 第65輯 諏訪前北遺跡群 [富山] 富山県埋蔵文化財センター
135	北高木遺跡 (パンフレット)
136	北高木遺跡出土品集
137	埋文とやま 第125号
138	埋文とやま 第126号
139	埋文とやま 第127号 [福井] 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
140	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡43 平成24年度発掘調査・環境整備事業概報
141	一乗谷朝倉氏遺跡資料館 紀要2012

	敦賀市立博物館
142	古文書の街敦賀 私の祖先平松周家「社記」は語る
143	平成二十年度特別展 氣比さんとつるが町衆 ～氣比神宮文書は語る～ DVD
	[山梨]
	山梨文化財研究所
144	山梨県文化財研究所報 第55号
145	多摩市埋蔵文化財調査報告 第69集 東京都多摩市竜ヶ峰遺跡 第4次
146	東京都多摩市・八王子市 上っ原遺跡(第2次)・大塚日向遺跡
	[長野]
	南アルプス市教育委員会文化財課
147	遺跡で散歩 Vol. 7
148	山梨県南アルプス市 文化財年報 平成24年度
149	南アルプス市埋蔵文化財ガイドブック 第3集 Ver3 堤の原風景
150	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第9集 寺部村附第12遺跡
151	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第33集 平成23年度埋蔵文化財試掘調査報告書
152	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第34集 ロタコ(御勅使河原飛行場跡) 滑走路第3地点
153	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第35集 榊形堤防 第2次調査
	[岐阜]
	岐阜県文化財保護センター
154	岐阜県文化財保護センター調査報告書第128集 下切遺跡
	[三重]
	三重県埋蔵文化財センター
155	三重県埋蔵文化財調査報告115-30 筋違遺跡(第2・3次)発掘調査報告
156	三重県埋蔵文化財調査報告115-32 相川西方遺跡発掘調査報告
157	三重県埋蔵文化財調査報告115-33 にんごう遺跡・にんごう古墳群発掘調査報告
158	三重県埋蔵文化財調査報告343 平成24年度県営農業基盤整備事業地域(伊勢管内)埋蔵文化財発掘調査報告
159	三重県埋蔵文化財調査報告344 円座近世墓群発掘調査報告
160	三重県埋蔵文化財調査報告345 奥ノ田遺跡発掘調査報告
161	三重県埋蔵文化財調査報告346 上長瀬遺跡発掘調査報告
162	三重県埋蔵文化財調査報告347 南張貝塚(第4・5次)発掘調査報告
163	三重県埋蔵文化財調査報告348 上野城跡第13次(藤堂新七郎屋敷跡)発掘調査報告
164	三重県埋蔵文化財調査報告349 鯛浦間近世墓発掘調査報告
165	三重県埋蔵文化財調査報告350 東ノ谷遺跡発掘調査報告
166	三重県埋蔵文化財調査報告351 朝見遺跡(第1・2次)発掘調査報告
167	三重県埋蔵文化財調査報告352 上野城下町遺跡(第5次)発掘調査報告
168	三重県埋蔵文化財調査報告353 野添大辻遺跡(第1次)発掘調査報告
169	三重県埋蔵文化財調査報告354 大瀬古遺跡発掘調査報告
170	平成24年度 三重県埋蔵文化財年報
	[滋賀]
	公益財団法人滋賀県文化財保護協会
171	蛭子田遺跡1
172	蛭子田遺跡2
173	近江大橋有料道路建設工事(西詰交差点改良)に伴う発掘調査報告書 膳所城遺跡
174	ほ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書41-1 上沢遺跡・浄土屋敷遺跡Ⅲ
175	ほ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書41-2 下羽田遺跡
176	能仁寺川通常砂防工事に伴う発掘調査報告書2 清滝寺遺跡・能仁寺遺跡Ⅱ
177	農地環境整備事業関係遺跡発掘調査報告書1 相谷熊原遺跡Ⅰ
	大津市教育委員会文化財保護課
178	大津市埋蔵文化財調査報告書(69) 石山国分遺跡発掘調査報告書Ⅱ
179	大津市埋蔵文化財調査報告書(71) 近江国府跡・管池遺跡発掘調査報告書
180	大津市埋蔵文化財調査報告書(72) 南滋賀遺跡発掘調査報告書Ⅴ
181	大津市埋蔵文化財調査報告書(76) 滋賀里遺跡発掘調査報告書Ⅲ
182	大津市埋蔵文化財調査報告書(77) 史跡延暦寺境内発掘調査報告書Ⅱ
	守山市教育委員会
183	滋賀県守山市山田町遺跡発掘調査報告書
	守山市立埋蔵文化財センター
184	下之郷遺跡確認調査報告書Ⅷ
185	守山市文化財調査報告書 -平成24年度国庫補助対象遺跡発掘調査報告書-
	公益財団法人栗東市体育協会
186	栗東市埋蔵文化財調査報告 2012(平成24)年度 年報
187	はっくつ2013 栗東市 話題の発掘調査
188	登場!大型建物 -近江の弥生集落- 平成26年度企画展示パンフレット
189	栗東市埋蔵文化財調査報告 2011年(平成23)年度 年報
190	技術者の系譜 古代近江の金属生産
191	はっくつ2012
192	栗東発掘再発見Vol. 3 縄文時代草創期・栗東最古の考古遺物 有形尖頭器
193	栗東発掘再発見Vol. 4 奈良時代の祭祀具 土馬
	公益財団法人秀明文化財団
194	Shangri-La MIHO MUSEUM通信 Vol. 33
	[京都]
	立命館大学文学部
195	立命館大学文学部学芸員課程研究報告第15冊 杉沢遺跡 2012年度発掘調査概報
196	立命館大学文学部学芸員課程研究報告第16冊 五塚原古墳 第4次発掘調査概報
	[大阪]
	公益財団法人大阪府文化財センター
197	公益財団法人大阪府文化財センター 要覧 -平成25年度-
198	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第238集 瓜破北遺跡
199	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第239集 久宝寺遺跡2
200	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第240集 吹田操車場遺跡9
201	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第241集 大田郡条里遺跡
202	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第242集 蛭池北遺跡

203	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第243集	川北遺跡
204	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第244集	本町遺跡
205	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第245集	千提寺南遺跡
206	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第246集	止々呂美城跡
207	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第247集	天美北6丁目北遺跡
208	大阪文化財研究 第42号	
209	大阪文化財研究 第43号	
210	摂河泉発掘資料精選Ⅲ	
	堺市文化観光局文化財課分室	
211	堺市埋蔵文化財調査概要報告第142冊	陶邑窯跡群光明池地区 (SMKM - 4) 発掘調査概要報告
212	堺市埋蔵文化財調査概要報告第143冊	大仙西町遺跡 (DSW - 3) 発掘調査概要報告
213	堺市埋蔵文化財調査概要報告第144冊	平成23・24年度市内遺跡発掘・立会調査概要報告
214	堺市埋蔵文化財調査概要報告第145冊	檜尾中山 (HON - 4) 遺跡発掘調査概要報告
215	堺市埋蔵文化財調査概要報告第146冊	堺環濠都市遺跡 (SKT1077) 発掘調査概要報告
216	四ツ池遺跡 その6	昭和51年度発掘調査報告書
217	百舌鳥古墳群の調査 7	
218	第三回 百舌鳥古墳群講演会 記録集『漆黒の武器・白銀の武器』	
219	第三回 土塔講演会 記録集『東大寺と土塔』	
220	平成24年度 国庫補助事業発掘調査報告書	
221	登録有形文化財 清学院保存修理工事報告書	
	岸和田市教育委員会	
222	岸和田市文化財調査概要40	平成25年度発掘調査概要
223	岸和田市埋蔵文化財発掘調査報告書12	久米田古墳群発掘調査報告 2
224	第26回濱田青陵賞授賞式	
	[兵庫]	
	姫路市教育委員会	
225	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第4集	小山遺跡 第6次発掘調査報告書
226	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第6集	姫路城下町跡 姫路城跡第278次 但陽信用金庫姫路支店の建替えに伴う発掘調査報告書
227	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第7集	姫路城下町跡 姫路城跡第281次発掘調査報告書
228	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第8集	姫路城下町跡 姫路城跡第290次発掘調査報告書
229	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第9集	豊沢遺跡第4次発掘調査報告書
230	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第10集	和久遺跡第9次発掘調査報告書
231	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第11集	姫路城下町跡 姫路城跡第296次発掘調査報告書
232	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第12集	姫路城下町跡 姫路城跡第286次発掘調査報告書
233	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第13集	姫路城下町跡 姫路城跡第289次発掘調査報告書
234	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第14集	石ツミ遺跡第1次発掘調査報告書
235	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第15集	山所南遺跡発掘調査報告書
236	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第16集	姫路城下町跡 姫路城跡第300次発掘調査報告書
237	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第17集	八代山古墳群 6号墳確認調査報告書
238	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第18集	三宅遺跡発掘調査報告書
239	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第19集	姫路城下町跡 姫路城跡第309次発掘調査報告書
240	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第20集	姫路城下町跡 姫路城跡第311次発掘調査報告書
241	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第21集	坂本城跡第18次発掘調査報告書
242	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第22集	丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書
243	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第23集	姫路城下町跡 姫路城跡第302・308・312次発掘調査報告書
	那珂ふれあい館	
244	多可町文化財報告22	奥中・三内遺跡 極楽寺遺跡Ⅱ 豊部・森内谷遺跡 奥豊部古墳群
	上郡町郷土資料館	
245	上郡町埋蔵文化財発掘調査報告 2	中山古墳群
	[鳥取]	
	鳥取県埋蔵文化財センター	
246	調査研究紀要 5	
247	青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報 2013	
248	鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書54	西坪中中畝遺跡
249	鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書55	殿河内上ノ段大ブケ遺跡
250	鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書56	下甲退休原第1遺跡
251	鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書57	殿河内ウルミ谷遺跡
252	鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書58	赤坂小丸山遺跡
253	鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書59	青谷上寺地遺跡13 第13次・第14次発掘調査報告書
254	青谷上寺地遺跡の骨角器	
	鳥取市教育委員会	
255	鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書	平成25 (2013) 年度
	[鳥根]	
	鳥根県埋蔵文化財調査センター	
256	一般国道9号 (仁摩温泉津道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 5	庵寺古墳群Ⅱ 大迫ツリ遺跡 小釜野遺跡
257	一般国道9号 (朝山大田道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2	市井深田遺跡 荒樫遺跡 鈴見B遺跡 1区
258	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ	石見焼陶連遺跡調査報告 3 大田屋窯跡
259	鳥根県教育庁 埋蔵文化財調査センター年報22	平成25年度
260	トキ土器まいぶん No55	
	浜田市教育委員会	
261	鳥根県浜田市遺跡地図Ⅵ	浜田市旭町重富試掘調査 平成24年度市内遺跡発掘調査報告書
	[広島]	
	公益財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室	
262	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第58集	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (30) 岡東第1~7号古墳・岡東第1号横穴墓・岡1号遺跡・岡2号遺跡・半戸1号遺跡
263	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第59集	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (31) 風呂谷遺跡・風呂谷古墳

264	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第60集 宮の本遺跡, 宮の本第11・33～35号古墳	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(32)
265	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第61集 箱山第3～6号古墳	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(33)
266	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第62集 下矢井南第3～5号古墳	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(34)
267	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第63集 若見追遺跡 畑尻遺跡	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(35)
268	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第64集 三隅山遺跡	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(36)
269	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第65集 頼藤城跡	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(37)
270	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第66集 杉谷遺跡	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(38)
	広島県立歴史博物館	
271	広島県立歴史博物館紀要第15号	
272	広島県立歴史博物館紀要第16号	
273	草戸千軒遺跡調査研究報告11 備後渡辺氏に関する基礎研究	
274	草戸千軒 発掘調査50年の想い出	
275	平成24年度夏の企画展 菅茶山と化政文化を彩る7人の巨人たち 菅茶山とその世界Ⅳ	
276	平成24年度秋の企画展 考古学と伝統工芸	
277	特別展 手塚治虫×石ノ森章太郎 マンガのちから	
278	特別展 手塚治虫×石ノ森章太郎 マンガのちから 別冊図録	
279	ふくやま草戸千軒ミュージアム(広島県立歴史博物館) ニュース 第98号	
	[山口]	
	山口市教育委員会	
280	山口市文化財年報7 -平成24(2012)年度-	
281	山口市埋蔵文化財調査報告書 第110集 大内氏築山跡7	
282	山口市埋蔵文化財調査報告書 第111集 大内氏館跡15	
283	山口市埋蔵文化財調査報告書 第112集 大内氏関連町並遺跡8	
284	山口市埋蔵文化財調査報告書 第113集 大浦古墳群	
	[高知]	
	高知県教育委員会文化財課	
285	埋文こうち 第27号	
286	高知県埋蔵文化財年報11 平成24年度	
	[福岡]	
	北九州市立自然史・歴史博物館	
287	市政50周年記念 邪馬台国が見える!! 古代日本の原風景	
288	北九州市立自然史・歴史博物館 研究報告 B類 歴史 第11号	
	九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室	
289	九州大学考古学研究室の記録 -考古学研究室開設55周年記念-	
	福津市教育委員会教育総務課	
290	福津市文化財調査報告書第3集 太郎丸遺跡第2地点	
	[熊本]	
	御船町教育委員会	
291	御船町文化財調査報告書第4集 大塚遺跡	
	[大分]	
	佐伯市教育委員会	
292	佐伯市文化財調査報告書第3集 佐伯城下町遺跡 山中家屋敷跡	
293	佐伯市文化財調査報告書第4集 榎牟礼城跡関連遺跡 発掘調査報告書2	
294	佐伯市文化財調査報告書第5集 佐伯城跡測量調査報告書 佐伯市内遺跡試掘確認調査報告書	
	[宮崎]	
	宮崎県埋蔵文化財センター	
295	宮崎県埋蔵文化財センター年報 第18号 平成26(2014)年度	
	[鹿児島]	
	鹿児島国際大学考古学ミュージアム	
296	鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告 第11集	
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
297	埋文だより 第63号	
298	埋文だより 第64号	
299	埋文だより 第65号	
	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター	
300	平成26年度 要覧	
301	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(180) 船迫遺跡・高吉B遺跡	
302	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(181) 前原和田遺跡	
303	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(182) カメコ遺跡	
304	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(1) 中郡遺跡群	
305	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(2) 堀之内遺跡群	
306	かごしまの遺跡 第3号	
307	かごしまの遺跡 第4号	
308	かごしまの遺跡 第5号	

## IV 普及・啓発事業

### 1 展示公開

#### (1) 常設展示「掘り出された北の歴史」

展示にあたっては、国（文化庁）・七飯町・北斗市・今金町・木古内町・余市町・夕張市・長沼町・遠軽町の各教育委員会、市立函館博物館、知内町郷土資料館、芦別市星のふる里百年記念館に、展示品借用についての協力を得た。

また、企画展示との関係から、展示室とホールを併用して展示を行っている。

##### 〔千歳市ママチ遺跡出土土面展示〕

国指定重要文化財の「土面」（国保有、昭和63年6月6日指定）を常設展示している。「土面」は、縄文時代晩期終末のもので、昭和61年に千歳市ママチ遺跡から出土した。土面としては最も北方から出土したものである。

##### 〔遺跡調査と保護活用〕

北海道の遺跡分布、遺跡の調査や整理作業の実際、遺物の分析・保存処理の方法などについて展示・解説している。また、国宝や国指定重要文化財の複製品も展示している。

##### 〔石の道具〕

石は人類が最初に利用した素材の一つである。旧石器時代の石の道具は、破片の接合から高度な技術で製作されたことが明らかになっている。遠軽町（旧白滝村）白滝遺跡群、千歳市柏台1遺跡、今金町ピリカ遺跡（国指定史跡）、木古内町新道4遺跡出土の石器、接合資料などを展示した。

また、縄文時代には用途に応じて、それに適した石材を選び、様々な形の石器が作られた。その使用方法を図と復元模型でわかりやすく示している。

##### 〔木の道具〕

木の道具は、通常の遺跡では腐ってしまい残らないが、実際の生活の中では各所に使われていた。そのため、低湿性遺跡など腐食しにくい状況で出土した木の道具は、当時の人々の生活の様子を大変良く伝えてくれる。

千歳市美々8遺跡低湿部のアイヌ文化期の遺物のほか、ユカンボシC15遺跡の板綴舟、キウス4遺跡の縄文時代後期の脚付き容器などを展示している。展示品は保存処理後の遺物である。

千歳市美々8遺跡低湿部出土品は、平成17年6月9日国指定重要文化財に指定された。その一部を常設展示している。また、美々8遺跡の「美々ムラ」復元模型を置いている。



▲常設展示1

##### 〔金属の道具〕

金属の道具は、人類が新しく手にしたものの一つである。刀・刀子・鍋等は交易品として北海道に入ってきたものが多く、これら道具類を手に入れるための交易が、北海道社会を変容させる一つの要因となった。

金属製品も腐食しやすい材質であり、展示品は保存処理を行っている。

##### 〔土の道具：土と火の造形〕

粘土を成形し火で焼き上げた土器は、人類が最初に手に入れた火にかけられる容器である。土器の使用により、食材の利用範囲が大きく拡大して、縄文時代の生活の安定がもたらされたと考えられている。

土器には自由な造形ができる粘土を使用しているため、時代とともに文様や形が様々に変化しており、時には機能を超越した、変わった形態や美しさをかもし出すものがある。

##### 〔こころの道具〕

「装いとこころ」：身を飾った装身具には、ヒスイ製、コハク製などの各種玉、瑛状耳飾り、土製の耳栓などがあり、当時の人々のおしゃれごころや精神生活の一端をみせてくれる。

「墓と副葬品」：墓の副葬品は、当時の生活用具をセットでみせてくれるとともに、当時の人々の「死」に対する恐れ、悲しみなど、「こころ」の一面をのぞかせてくれる。

「動物とひと」：動物意匠の土器、動物形石製品などは、人と動物とのふれあいを感じさせる。表現された動物たちに、何を感じ、何を求めていたのか、当時の人々の自然と向き合う生活の一端を考えさせられる。



▲常設展示 2

[キウスの縄文村]

千歳市キウス 4 遺跡の発掘調査から、周堤墓、盛土遺構、住居跡などをジオラマで復元した。また、合成樹脂で剥ぎ取った盛土遺構土層断面を展

示している。盛土遺構の出土遺物には、祭祀に使われたと考えられる赤彩の土器、特殊な形の土器や土製品、玉類、土偶などがある。

[ビデオコーナー]

遺跡についてわかりやすく解説した『ビビちゃんとフクロウ博士の遺跡ってなーに』『ビビちゃんとフクロウ博士の発掘体験』『ビビちゃんとフクロウ博士の縄文生活体験』などを常時上映している。

[体験コーナー]

**火起し体験コーナー**：きりもみ式、ひもぎり式、弓ぎり式、まいぎり式による火おこし体験ができる。

**土器コーナー**：土器拓本体験ができる。煮炊きに使った復元土器を展示している。

**石器コーナー**：石器を使ったドングリの皮むき、石器の接合、石器の紙切り体験ができる。石器の材料となる石材見本を展示している。

常設展示点数一覧

展 示 場 所 ・ コ ー ナ ー		遺物 点数	パネル・レプリカなど	合計 点数	
ホール・展示回廊		239	45	284	
常設展示室	受付・導入部分	7	6	13	
	「遺跡調査と保護活用」部分	遺跡調査	5	76	81
		遺物の保存と分析	2	109	111
	「石の道具」部分	旧石器時代の石器	139	12	151
		縄文時代の石器	129	15	144
	「木の道具」部分	縄文時代の木製品	7	17	24
		アイヌ文化期の木製品	24	44	68
	「金属の道具」部分		14	2	16
	「骨の道具」部分		3	3	6
	「土の道具」部分		140	26	166
	「こころの道具」部分	装いとこころ	360	4	364
		動物とひと	9	12	21
「キウスの縄文ムラ」部分		3	2	5	
「新しい時代へ」		17	2	19	
屋外	エントランスひろば	0	1	1	
	中庭	0	1,821	1,821	
合 計		1,098	2,197	3,295	

(2) 企画展示

a 「北の縄文—縄文探訪と縄文工房—」展

会 期：6月28日(土)～10月5日(日)

目 的：道内各地の縄文文化を体感し、土器づくりなどの体験を通して、北海道の縄文文化への関心を高め、より理解を深めることを目的とする。

展示場所：ホール、常設展示室、体験コーナー

展示内容

北海道の縄文文化について、縄文探訪と縄文工房の2つのテーマを通して紹介する。

[縄文探訪：北広島を歩く] (常設展示室・体験コーナー)

北広島市内の代表的な遺跡や、出土した縄文時

代の遺物を紹介する。

①北広島の遺跡と縄文文化

②北広島の発掘調査

③北広島の縄文遺跡を歩く

- ・共栄1遺跡 (縄文時代早・後・晩期)
- ・富ヶ岡E・D遺跡 (北広島団地第1・第2遺跡)  
(縄文時代早・後期)
- ・富ヶ岡遺跡 (縄文時代早・中期)
- ・富ヶ岡3遺跡 (縄文時代早・中・後期、続縄文)
- ・中の沢B遺跡 (縄文時代中・後・晩期)
- ・南の里2・14・15遺跡  
(縄文時代早・中・後・晩期、続縄文)
- ・北の里3遺跡 (縄文時代早・前・後期)



▲「北の縄文—縄文探訪と縄文工房—」展

【縄文工房】（ホール）（体験受付：展示室受付）  
 ・勾玉作りなどの体験実習や、土器、石器に触れるなどを通して縄文文化を体感する。・勾玉作り、ミニ土器づくり、土偶づくり、布編みなどを自由に体験することが出来る。

・本物の土器や石器などに触れることができ、使い方などを考えることが出来る。

・北広島の遺跡から出土した土器、石製品などのミニチュアをつくる体験。

\*体験はすべて無料。入館時に配布するポイント（10ポイント）によって整理する。

その他

縄文探訪については平成26年度以降も恵庭、千歳、江別市などの近隣の市町村を取り上げる予定。

〔展示企画〕 藤井 浩

## b 北海道遺跡百選7

### 八雲町野田生1遺跡と注口土器群

—注口土器群の出土状況から見た縄文時代後期の集落—

会 期：10月25日（土）

～平成27年3月1日（日）

目 的：北海道の代表的な遺跡について、様々な視点からわかりやすく紹介することで、遺跡や埋蔵文化財への関心を高めることを目的とする。

展示場所：常設展示室

#### 展示内容

「遺跡との出会い」をテーマに北海道の代表的な遺跡を探る「北海道遺跡百選」の7回目は、縄文時代後期集落としての八雲町野田生1遺跡について概観する。特に完形の赤彩注口土器に代表される注口土器群について、その出土状況とともに紹介する。



▲「八雲町野田生1遺跡と注口土器群」展

## I 八雲町野田生1遺跡の調査

- 1 遺跡の特徴
- 2 竪穴住居群の特徴
- 3 遺物の出土状況

## II 八雲町野田生1遺跡の注口土器群について

- 1 遺構と出土状況
- 2 注口土器群について

## III 赤彩注口土器について

- 1 遺構と出土状況
- 2 赤彩注口土器について

## IV 常設展示室の注口土器について

- 1 千歳市美々4遺跡出土の注口土器群
- 2 千歳市キウス4遺跡出土の注口土器群

〔展示企画〕 藤井 浩

## c 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター 平成25年度発掘調査成果展

目 的：公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成25年度に行った発掘調査の成果を紹介する。

期 間：3月29日（土）～6月15日（日）

展示場所：ホール、常設展示室

#### 展示内容

出土遺物や写真、解説パネルで遺跡調査の成果を紹介する。

〔遺物とパネル等で紹介〕

遠軽町金山6遺跡：縄文時代中期石器類

千歳市キウス11遺跡：続縄文時代墓坑出土遺物

木古内町大平1遺跡：縄文時代後・晩期土器、漆製品など

木古内町大平4遺跡：縄文時代中期竪穴住居跡出土遺物



▲平成25年度発掘調査成果展



▲世界遺産をめざす北の縄文展

木古内町札苅7遺跡：縄文時代後期竪穴住居跡出土遺物

木古内町新道4遺跡：縄文時代土器、石器、石製品

厚真町上幌内3遺跡：擦文時代土器、棒状礫群

厚真町厚幌1遺跡：擦文時代土器

厚真町イクバンドユクチセ2・3遺跡：縄文時代中・後期土器、石器

せたな町都遺跡：縄文時代後期土器

北斗市館野6遺跡：縄文時代前期土器群

福島町館崎遺跡：縄文時代前・中期土器群

保存処理未公開資料

[パネル・写真で紹介]

千歳市キウス3遺跡、長沼町幌内A遺跡、厚真町上幌内5遺跡、オニキシベ1遺跡、芦別市野花南周堤墓群など

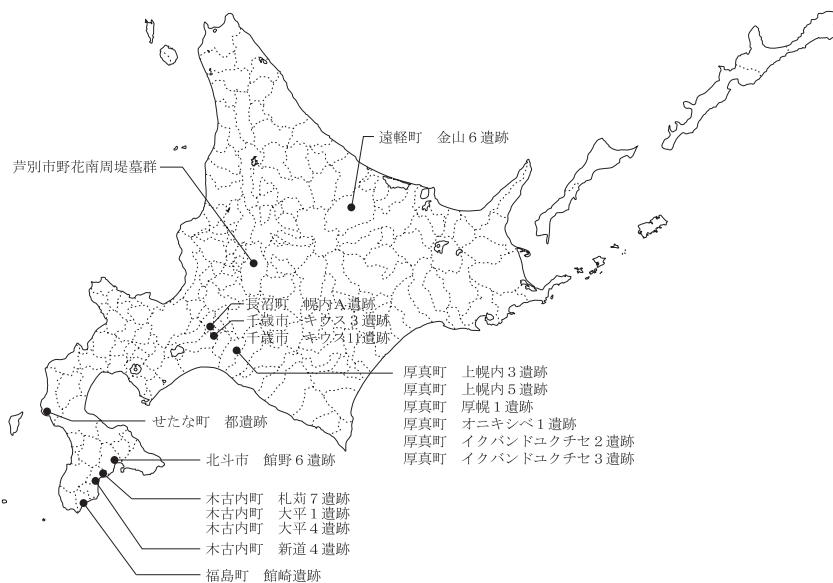
[展示企画] (公財)北海道埋蔵文化財センター調査部

d 世界遺産をめざす北の縄文展

会期：通年(4月1日～平成27年3月31日)

目的：北海道は北東北3県と連携して「北の縄文文化回廊づくり」や遺跡群の世界文化遺産登録に向けての取り組みを行っている。公益財団法人北海道埋蔵文化財センターはこれに連携して、世界遺産登録をめざす北海道・北東北3県の縄文遺跡群について展示を行い、広く道民や道外からの観光客に情報発信をする。これにより、北海道の歴史的風土の理解を図るとともに、世界文化遺産登録推進の取り組みへの関心を高める。

展示場所：アプローチ南側



成果展展示遺跡位置図

## 展示内容

### [常設]

「開催にあたって」「世界遺産登録をめざして」「資産を構成する18遺跡と関係14市町の位置」など。

### [展示遺跡]

北海道：キウス周堤墓群、北黄金貝塚、入江・高砂貝塚、鷺ノ木遺跡、大船遺跡、垣ノ島遺跡

青森県：三内丸山遺跡、小牧野遺跡、是川石器時

代遺跡、長七谷地貝塚、亀ヶ岡石器時代遺跡、田小屋野貝塚、二ツ森貝塚、大平山元Ⅰ遺跡、大森勝山遺跡

岩手県：御所野遺跡

秋田県：大湯環状列石、伊勢堂岱遺跡など

\*展示遺跡・展示物品は随時更新する。また、各道県の動向の紹介、イベントなどの案内を行う。

[展示企画] 倉橋直孝

## 2 資料の特別利用等

### (1) 特別利用

番号	利用者	利用目的	利用期日・期間	利用資料名
1	岩手大学教育学部考古学教室 佐藤由紀男	資料調査	4月24日	恵庭市西島松2遺跡出土資料
2	厚真町教育委員会 松井 昭	資料調査	5月31日	千歳市祝梅川小野遺跡出土資料
3	長野 護	資料調査	9月6日	千歳市美々4遺跡出土資料
4	札幌学院大学 大塚宣明	資料調査	10月14日	千歳市オリイカ2遺跡出土資料
5	清水 香	資料調査	11月5日	千歳市美々8遺跡・千歳市ユカンボシC15遺跡出土資料
6	北海道大学北方文化論講座 高瀬克範	資料調査	11月12日	千歳市キウス4遺跡出土資料
7	北海道大学北方文化論講座 高瀬克範	資料調査	11月19日	千歳市キウス4遺跡出土資料
8	北海道大学北方文化論講座 高瀬克範	資料調査	11月26日	千歳市キウス4遺跡出土資料
9	青森県埋蔵文化財調査センター 茅野嘉雄・浅田智晴	資料調査	12月3日	千歳市オサツ2遺跡・美々8遺跡出土資料
10	北海道大学北方文化論講座 高瀬克範	資料調査	12月3日	千歳市キウス4遺跡出土資料
11	余市町教育委員会 花田直彦・飯浜幹広	資料調査	12月3日	千歳市キウス5遺跡出土資料
12	余市町教育委員会 岩谷維千歌・遠藤むつみ	資料調査	12月5日	千歳市キウス5遺跡出土資料
13	北海道大学北方文化論講座 高瀬克範	資料調査	12月10日	千歳市キウス4遺跡出土資料
14	岩手大学 佐藤由紀男	資料調査	12月11・12日	恵庭市西島松5遺跡・千歳市美々4遺跡・キウス4遺跡出土資料
15	北海道大学北方文化論講座 高瀬克範	資料調査	平成27年1月7日	千歳市キウス4遺跡出土資料
16	北海道大学北方文化論講座 高瀬克範	資料調査	平成27年1月14日	千歳市キウス4遺跡出土資料
17	札幌学院大学 大塚宣明ほか6名	資料調査	平成27年1月18日	千歳市オリイカ2遺跡・千歳市柏台1遺跡・千歳市オサツ16遺跡出土資料
18	北海道大学北方文化論講座 高瀬克範	資料調査	平成27年1月21日	千歳市キウス4遺跡出土資料
19	北海道大学北方文化論講座 高瀬克範	資料調査	平成27年1月28日	千歳市キウス4遺跡出土資料
20	北海道大学北方文化論講座 高瀬克範	資料調査	平成27年2月4日	千歳市キウス4遺跡出土資料
21	國學院大學栃木短期大学 中村耕作	資料調査	平成27年2月24日	千歳市キウス4遺跡・美々4遺跡出土資料
22	国立歴史民俗博物館 上野祥史	資料調査	平成27年3月11日	千歳市ユカンボシC9遺跡出土資料

## (2) 模写品等の刊行等の承認

番号	申請者	使用目的	承認年月日	利用資料名・点数
1	士別市立博物館 館長 池田政幸	テーマ展「発掘された北海道—北海道立埋蔵文化財センター収蔵品展」ポスター・チラシ	4月2日	千歳市ママチ遺跡出土土面写真ほか 写真デジタルデータ計3点
2	苫小牧市美術博物館 館長 荒川忠宏	企画展「美沢川流域の遺跡群」パネルおよびポスター・チラシ	4月10日	千歳市美々4遺跡出土動物形土製品 写真ほか 写真デジタルデータ計11点
3	苫小牧市美術博物館 館長 荒川忠宏	企画展「美沢川流域の遺跡群」パネルおよびポスター・チラシ	4月10日	千歳市美々2遺跡出土後北式土器 写真ほか 写真撮影 計11点
4	久慈琥珀博物館 館長 向 正彰	企画展「悠久の久慈琥珀」 展示	4月16日	知内町湯の里4遺跡琥珀玉出土状況 写真ほか 写真デジタルデータ 計 2点
5	株式会社帝国書院 代表取締役社長 斎藤正義	社会科中学生の歴史『日本の歩みと世界の動き』	4月17日	千歳市キウス9遺跡出土石刃鏃写真 写真デジタルデータ 計1点
6	士別市立博物館 館長 池田政幸	テーマ展「発掘された北海道—北海道立埋蔵文化財センター収蔵品展」パネル	4月16日	千歳市キウス1号周堤墓写真ほか 写真デジタルデータ 計8点
7	一戸町教育委員会 教育長 古館英彦	特別展「縄文遺跡群の世界遺産登録を目指して」展示資料	4月16日	千歳市キウス1号周堤墓写真 写真 デジタルデータ 計1点
8	朝日新聞出版 生活・文化編集部 部長 須田 剛	週間朝日百科『新発見！日本の歴史』49号	4月25日	千歳市柏台1遺跡出土蘭越型細石刃 核と石刃接合資料写真 写真デジ タルデータ 計1点
9	北の縄文道民会議 代表 堀 達也	2014発見・体験・縄文ツ アーのパフレット	4月25日	木古内町札刈7遺跡発掘作業の様子 写真 写真デジタルデータ 計1点
10	特定非営利法人 ジョーモネスクジャパン 理事長 小林達雄	特定非営利法人ジョーモネ スクジャパン会報vol.8	4月28日	遺跡から斜里岳を望む写真ほか 写 真デジタルデータ 計3点
11	北海道胆振総合振興局 保健環境部 環境生活課長 白石奈美路	「北の縄文パネル展」展示 パネル	5月12日	豊浦町高岡1遺跡包含層出土の土器 写真ほか 写真デジタルデータ 計 8点
12	(有)北海道出版企画センター 代表取締役 野澤緯三男	山田哲「旧石器・縄文文化 の代表的な遺跡」『オホ ツク海沿岸の遺跡とアイヌ 文化』	5月16日	「遠軽町白滝遺跡群Ⅱ」口絵16写真 ほか 写真デジタルデータ 計2点
13	北海道環境生活部くらし安全局 文化・スポーツ課 縄文世界遺産推進室長 桑田和子	世界文化遺産登録推進事業	6月12日	礼文町上泊3遺跡出土土器写真 写 真デジタルデータ 計1点
14	千歳市埋蔵文化財センター センター長 高橋 理	『広報ちとせ』平成26年度 7月号	6月24日	千歳市ママチ遺跡A P310遺物写真 写真転載 計1点
15	恵庭市郷土資料館 主任学芸員 長町章弘	「恵庭出土の刀」展ポ スター	7月2日	恵庭市西島松5遺跡P101遺物集合 写真 写真デジタルデータ 計1点
16	株式会社セブンクリエイティブ 代表取締役社長 小林公成	武藤康弘著『はじめての土 偶』	7月3日	千歳市美々4遺跡出土土偶写真 写 真デジタルデータ 計2点
17	恵庭市郷土資料館 館長 菅原伸治	「恵庭出土の刀」展パネル 作成およびカリン巴士囉講 座「恵庭出土の刀」パワ ーポイント	7月11日	恵庭市ユカンボンE7遺跡出土鉄製 品写真ほか 写真デジタルデータ 計119点
18	集英社 新書編集部 梶島良介	集英社新書『縄文人からの 伝言』	7月11日	『恵庭市西島松5遺跡(6)』口絵1写 真 写真デジタルデータ 計1点
19	国立歴史民俗博物館 館長 久留島 浩	総合展示第1展示室リニ ューアル展示	7月16日	柏台1遺跡出土琥珀玉 複製計1点
20	株式会社同成社 代表取締役 山脇洋亮	安齋正人『気候変動と縄文 文化の変化』	7月22日	函館市中野B遺跡(Ⅱ)第3分冊図 版1写真 写真デジタルデータ 計 1点
21	宮古市北上山地民俗資料館 館長 竹下将男	平成26年度企画展写真パ ネル・図録	7月22日	小樽市忍路土場遺跡出土樹皮製容器 写真 写真デジタルデータ 計1点
22	みんなで、ひとまちづくり委員会 佐藤敬太	平成26年度講演会ポ スター・HP・タウン誌など	7月30日	千歳市キウス1号周堤墓写真 写真 デジタルデータ 計1点
23	縄文遺跡群世界遺産登録推進本 部部長 三村申吾	北海道・北東北の縄文遺跡 群PR	8月6日	千歳市キウス1号周堤墓写真 写真 デジタルデータ 計1点
24	胆振総合振興局保健衛生部 環境生活課長 白石奈美路	「北の縄文パネル展」	8月20日	豊浦町高岡1遺跡 包含層出土の土 器ほか 写真デジタルデータ 計8 点
25	富永勝也	日本考古学協会北海道伊達 大会資料集	8月29日	北斗市館野遺跡日-3完掘写真ほか 写真デジタルデータ 計11点

26	遠軽町長 佐々木修一	『日本最大の黒曜石産地 白滝ジオパークガイドブック』	9月4日	白滝遺跡群と北大雪連峰写真ほか 写真デジタルデータ 計4点
27	株式会社平凡社 編集長 日下部行洋	太陽の地図帖28『アイヌ文化を旅する』	9月4日	恵庭市西島松5遺跡P101副葬品写真 写真デジタルデータ 計1点
28	藤原秀樹	日本考古学協会北海道伊達大会発表	9月16日	函館市中野B遺跡P-40写真ほか 写真デジタルデータ 計46点
29	中村 大	『Online Resource For Japanese Arcaeology And Cultural Heritage』	9月17日	苫小牧市美沢1遺跡JX-3写真ほか 写真転載 計4点
30	宮古市北上山地民俗資料館 館長 竹下將男	『広報みやこ』11月号	10月15日	小樽市忍路土場遺跡出土樹皮製容器 写真 写真デジタルデータ 計1点
31	(有)シータス 水口博也	書籍『シャチ生態ヴィジュアル百科』	10月31日	函館市桔梗2遺跡出土シャチ形土製品 写真 写真デジタルデータ 計1点
32	胆振総合振興局保健衛生部 環境生活課長 白石奈美路	「北の縄文パネル展」	11月5日	豊浦町高岡1遺跡 包含層出土の土器 ほか 写真デジタルデータ 計7点
33	佐倉市教育委員会 教育長 茅野達也	シンポジウムポスター・チラシ	11月10日	千歳市キウス4遺跡盛土断面写真ほか 写真デジタルデータ 計3点
34	坂口 隆	『考古学雑誌』掲載論文	11月10日	恵庭市西仁摩松5遺跡P431出土土器 写真ほか 写真掲載計2点
35	(株)新泉社 代表取締役 石垣雅設	シリーズ「遺跡を学ぶ」098 『カリカリウス遺跡』	11月25日	根室市穂香堅穴群H-6完掘写真 写真デジタルデータ 計1点
36	北海道開拓記念館 館長 石森秀三	「北海道博物館」の新展示 「総合展示」の第1テーマ 「北海道120万年物語」に おける解説パネル	12月18日	知内町湯の里4遺跡旧石器文化の墓 ほか 写真デジタルデータ 計7点
37	千歳市埋蔵文化財センター センター長 高橋 理	平成26年度企画展パネル	12月25日	千歳市柏台1遺跡調査状況写真ほか 写真デジタルデータ 計10点
38	株式会社 雄山閣 宮田哲男	『季刊考古学』130号 青野友哉氏 構成口絵「北海道の縄文墓制」	12月19日	八雲町野田生1遺跡赤彩土器出土状況 写真ほか 写真デジタルデータ 計2点
39	北の縄文道民会議 代表 堀 達也	赤れんが北の縄文世界展の 展示解説	12月24日	木古内町新道4遺跡出土土偶写真ほか 写真デジタルデータ 計8点
40	北海道環境生活部くらし安全局 文化・スポーツ課 縄文世界遺産推進室長 桑田和子	世界文化遺産登録推進事業	平成27年1月14日	八雲町野田生1遺跡出土赤彩土器 写真ほか 写真デジタルデータ 計2点
41	朝日新聞出版書籍編集部 部長 首藤由之	『日本発掘!』(朝日選書)	平成27年1月16日	遠軽町上白滝8遺跡調査状況写真ほか 写真デジタルデータ 計2点
42	北海道環境生活部くらし安全局 文化・スポーツ課 縄文世界遺産推進室長 桑田和子	世界文化遺産登録推進事業	平成27年1月26日	千歳市美々4遺跡出土の動物形土製品 写真デジタルデータ 計1点
43	清水 香	『物質文化』掲載論文	平成27年2月10日	千歳市美々8遺跡出土漆器椀写真 写真利用 計1点
44	東京書籍株式会社北海道支社 支社長 高橋弘明	『ビジュアルワイド社会科学資料集6年』	平成27年2月13日	千歳市美々4遺跡周堤墓写真ほか 写真デジタルデータ 計3点
45	株式会社山川出版社 代表取締役 野澤伸平	『アイヌの歴史』(仮称)	平成27年2月26日	千歳市ウサクマイN遺跡オホーツク式土器の出土状況写真ほか 写真デジタルデータ 計2点
46	北海道大学埋蔵文化財調査室 高倉 純	『考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究5』	平成27年3月3日	『白滝遺跡群Ⅶ』口絵7-2写真 写真転載 計1点
47	北海道テレビ放送 営業局国際メディア事業部 ディレクター 遠藤里織	H T B 「LOVE HOKKAIDO」 (テレビ番組)	平成27年3月12日	知内町湯の里4遺跡作業風景写真ほか 写真デジタルデータ 計3点
48	株式会社同成社 代表取締役 山脇洋亮	斎藤裕彦『富沢遺跡』	平成27年3月12日	千歳市柏台1遺跡埋没林写真 写真 デジタルデータ 計1点
49	(株)ニューサイエンス社 代表取締役 福田久子	『考古調査ハンドブック12 弥生土器』	平成27年3月16日	北斗市茂別遺跡出土土器集合写真 写真デジタルデータ 計1点
50	インテリジェントリンク 代表取締役社長 森影 依	北海道庁ウェブサイト「北海道歴史・文化発信ポータルサイト」	平成27年3月17日	千歳市美々4遺跡出土動物形土製品 写真ほか 写真デジタルデータ 計2点
51	株式会社亜璃西社 代表取締役 和田由美	『北海道の古代・中世がわかる本』	平成27年3月19日	千歳市柏台1遺跡樹木の痕跡写真ほか 写真デジタルデータ 計22点
52	北海道開拓記念館 館長 石森秀三	北海道博物館総合展示第1 テーマ解説パネル	平成27年3月26日	木古内町新道4遺跡出土土偶写真 写真デジタルデータ 計1点

### (3) 資料の貸出承認

番号	申請者	利用目的	使用期間	利用資料名・点数
1	江別市立対雁小学校 校長 菊地秀夫	対雁小学校6年生社会科での授業教材	4月13日～20日	江別市対雁2遺跡出土土器8点、江別市対雁2遺跡出土石器32点
2	士別市立博物館 館長 池田政幸	士別市立博物館テーマ展「発掘された北海道—北海道立埋蔵文化財センター収蔵品展」での展示	4月10日～6月30日	千歳市キウス4遺跡盛土遺構出土異形土器ほか106点
3	苫小牧市美術博物館 館長 荒川忠宏	平成26年度企画展「美沢川流域の遺跡群—美々・美沢」に展示	4月24日～6月14日	千歳市美々7遺跡出土土器ほか154点
4	創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会 会長 上田文雄	札幌国際芸術祭2014における展示および体験学習	7月18日～9月28日	江別市対雁2遺跡出土石鏃、石斧（体験学習用石器セット）
5	北の縄文道民会議 代表 堀 達也	赤れんが北の縄文世界展示	平成27年1月26日～2月20日	千歳市ママチ遺跡出土土面（複製）1点、木古内町新道4遺跡出土土偶（複製を含む2点）
6	千歳市埋蔵文化財センター センター長 高橋 理	千歳市埋蔵文化財センター「平成26年度企画展大氷河期のちとせ」出展	平成27年1月10日～3月23日	千歳市柏台1遺跡出土石器等150点
7	独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館 館長 三輪嘉六	九州国立博物館文化交流展示「海の道、アジアの路」	平成27年4月1日～平成28年3月31日	千歳市オサツ2遺跡、キウス4遺跡、キウス5遺跡、ママチ遺跡出土土器13点
8	国立科学博物館 館長 林 良博	国立科学博物館常設展示	平成27年4月1日～平成28年3月31日	千歳市柏台1遺跡出土顔料等9点



▲ガラス玉づくり入門



▲入門「縄文文化と世界遺産」(2)



▲入門「縄文文化と世界遺産」(1)



▲石器づくり入門

### 3 講座等の開催

#### (1) 一般道民対象の講座

##### a 「ものづくりの考古学」教室 1. ガラス玉づくり入門

日 時：6月14日(土) 13:30~15:40  
講 師：装飾タイル作家 宮崎幸子 氏  
参加者：15名(うち道民カレッジ生7名)  
内 容：北海道の遺跡から出土する様々なガラス玉について、その歴史を学ぶとともに、作り方についての説明とガラス玉作成体験学習を行った。

##### b 「はじめての考古学」教室 1. 入門「縄文文化と世界遺産」(1)

日 時：7月5日(土) 13:30~15:40  
講 師：第1調査部第4調査課 主査 立田 理  
参加者：41名(うち道民カレッジ生26名)  
内 容：土器型式など考古学の基本的事項の説明の後、円筒土器文化の土器や竪穴住居についてわかりやすく解説した。

##### c 「はじめての考古学」教室 2. 入門「縄文文化と世界遺産」(2)

日 時：8月9日(土) 13:30~15:10  
講 師：第1調査部普及活用課 主査 藤井 浩  
参加者：20名(うち道民カレッジ生9名)  
内 容：世界遺産登録の現状について詳しく説明した後、周堤墓や窪みで残る竪穴住居群についてわかりやすく解説した。

##### d 「ものづくりの考古学」教室 2. 石器づくり入門

日 時：11月15日(土) 13:30~15:30  
講 師：第1調査部第3調査課 主査 直江康雄  
参加者：15名(うち道民カレッジ生7名)  
内 容：手持ちのナイフを例として石器づくりの基本原理や刃部の作り方など、石器づくりの概要、「刃つぶし加工」と「押圧剥離」の2種類の加工方法を解説した。黒曜石を素材にして、刃つぶし加工によるナイフづくり、押圧剥離による石器づくりの実習を行った。



▲埋文センター発掘物語



▲まいぶん遺跡探検隊（第1次）



▲親子ガラス玉づくり教室



▲まいぶん遺跡探検隊（第3次）

e 「埋文センター発掘物語」Vol. 1

—小樽市忍路土場遺跡—

日 時：11月29日（土） 13：30～15：30

講 師：第2調査部長 三浦正人

参加者：86名（うち道民カレッジ生21名）

内 容：小樽市忍路土場遺跡の発掘調査は北海道の低湿地遺跡調査におけるさきがけとなった。30年ほど経過した現在では全国で低湿地遺跡が掘られ、多くの知見が得られてきている。今回は、調査報告書では十分に伝えられていないことがらも含めて、スライドで解説した。

(2) 児童生徒学生対象の体験型講座

a 「親子ガラス玉づくり教室」

日 時：6月21日（土） 13：30～15：30

講 師：装飾タイル作家 宮崎幸子 氏

参加者：11名（5家族）

内 容：親子（児童・生徒とその保護者）を対象としたガラス玉づくりで、内容は一般道民対象の講座とほぼ同内容である。

b 「夏休み自由研究教室」

まいぶん遺跡探検隊（第1次）

日 時：7月26日（土） 13：30～16：00

講 師：第1調査部普及活用課 主査 藤井 浩

参加者：7名（うち中学生以下4名）

内 容：「縄文ネックレスをつくろう」をテーマとして、縄文時代の土器・石器やネックレスに触れた後で、ネックレスづくりを行った。勾玉を作成した後で、管玉を作成した。

c 「夏休み自由研究教室」

まいぶん遺跡探検隊（第2次）

日 時：8月2日（土） 13：30～16：00

講 師：第1調査部普及活用課 主査 藤井 浩

参加者：11名（うち中学生以下6名）

内 容：「手形・足形付土製品をつくろう」をテーマとして、縄文時代の土器に触れた後、土器の縄目模様づくり体験を行った。そして、粘土に手形をつけ、自分で作った原体で文様を付けた。



▲白糠町出前講座



▲木古内町出前講座



▲厚岸町出前講座



▲置戸町出前講座

d 「冬の縄文工房」

期 間：平成27年1月4日(日)～3月1日(日)  
 会 場：常設展示室前縄文生活体験ひろば  
 内 容：縄文時代の道具づくり体験を通して当時の人々の生活の様子を学ぶ。道具や材料を自分で選び、レシピを参考に自由に体験できる。

e 「冬休み自由研究教室」

まいぶん遺跡探検隊 (第3次)

日 時：平成27年1月10日(土) 13:30～16:00  
 講 師：第1調査部普及活用課 主査 藤井 浩  
 参加者：8名(うち中学生以下4名)  
 内 容：「縄文火おこしにはまる冬休み 火おこしマスターに挑戦!」と題し、バックヤードツアー、展示室探検ラリー、遺物水洗の後に、縄文時代の火おこしに挑戦した。道具づくりから火をおこすまでを体験した。

f 「冬休み自由研究教室」

まいぶん遺跡探検隊 (第4次)

日 時：平成27年1月17日(土) 13:30～16:00  
 講 師：第1調査部普及活用課 主査 藤井 浩  
 参加者：9名(うち中学生以下4名)  
 内 容：第4次は「クイズで楽しむ考古学教室 土器博士・石器博士になろう!」と題して、展示室マップ作り、展示室探検クイズ、拓本体験、石斧作り、石器を使った切抜き体験を行った。

(3) 児童生徒対象の出前講座

a 事業目的

完全学校週5日制に対応して、土曜日や日曜日の休日に、市町村教育委員会との連携の下で、子供たちにとってわかりやすく地域の歴史や文化を説明するとともに、それらを大切にすることを養い、体験学習を通して豊かな人間性や多様な個性を育むことを目的とする。

これまで、道立センター内で行ってきた考古学教室を、全道の市町村に出向いて地元教育委員会と連携を図って実施することにより、市町村独自の事業実施の契機となるよう努めている。



▲教育連携講座 江別市立上江別小学校体験学習



▲秋季講演会



▲夏季講演会



▲平成25年度発掘調査報告会

## b 事業内容

### ①地域の遺跡を学ぶ—実物に触れてみよう—

地元市町村出土の遺物や北海道立埋蔵文化財センター保管の土器・石器類に触れてもらいながら、地元市町村の埋蔵文化財についての説明を行う。また、埋蔵文化財センター紹介のビデオ『遺跡ってなーに』を鑑賞する。

### ②体験学習

子供たちの歴史・文化に対する関心を高めるた

めに、縄文時代等にアクセサリーとして使用されていた「勾玉」を、滑石を材料にして、製作する。また、時間の許す限り、石器（黒曜石破片）での紙切り、火起こしなどの体験を行う。

下の表のとおり7か所で実施した。

### (4) 教育連携講座

児童会、小学校、中学校、大学、教育委員会等を対象とする体験型教育連携講座を、37ページの表の通り11回実施した。

### 児童生徒対象の出前講座

	市町村	実施場所	実施日	担当	備考	参加人数
1	白糠町	白糠町立庶路小学校	5月21日(水)	鎌田	6年生授業	24名
2	浦幌町	浦幌町立博物館	7月20日(日)	鎌田	博物館講座(歴史編)「こども考古学教室」	16名
3	根室市	根室市立厚床小学校	9月19日(金)	倉橋	5・6年生授業	11名
4	厚岸町	厚岸町立真龍小学校	9月20日(土)	倉橋	平成26年度海事記念館こどもクラブ事業「勾玉づくり」	28名
5	上川町	上川町かみんぐホール	9月20日(土)	藤井	平成26年度公民館講座「考古学講座」	7名
6	木古内町	木古内町立中央公民館	10月4日(土)	倉橋	平成26年度木古内無名塾として実施	19名
7	置戸町	置戸町中央公民館	10月25日(土)	鎌田	第4回ふるさと少年クラブ「考古学学習～勾玉を作ろう～」	15名
計						120名



▲津別町出前講座（北海道文化財保護協会協力）



▲北見市出前講座（北海道文化財保護協会協力）

火起こし・勾玉作り・ミニチュア土器づくり・拓本体験学習、収蔵庫・展示収蔵庫・展示室などの見学、展示室探検クイズラリーなどを内容とする。

また、北海道教育委員会からの依頼により、平成25年度から「道立埋蔵文化財センター活用学習のための指導者研修」（夏・冬季休業期間分、教職員対象）を実施している。

## (5) 一般道民対象の講演会

### a 夏季講演会

「遺跡の年代はどうしてわかるの？  
炭素を使って年代を測ろう」

日 時：7月12日（土） 13：30～15：30

講 師：国立歴史民俗博物館准教授

工藤雄一郎 氏

参加者：66名（うち道民カレッジ生23名）

内 容：放射性炭素年代測定の話を中心に、型式学と層位学の話や、遺物の年代測定からわかった最新の事例などを紹介していただいた。

企 画：藤井 浩

### b 秋季講演会

「北海道から世界へ発信  
考古学と形質人類学のコラボレーション」

日 時：10月18日（土） 13：30～15：30

講 師：札幌医科大学教授 松村博文 氏

参加者：92名（うち道民カレッジ生11名）

内 容：古人骨の鑑定などを通じて、遺跡調査とも関わりの深い講師から、形質人類学と考古学とのコラボレーションの現状や明らかになったことなどを紹介していただいた。

企 画：倉橋直孝

## (6) 近隣市町村等対象の出前講座

近隣市町村教育委員会・学校等から出前講座の依頼があった場合には、その都度検討して、対応できる場合には実施している。今年度は下の表のとおり4か所で実施した。

## (7) 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター 平成25年度発掘調査報告会

日 時：4月19日（土） 13：30～16：30

参加者：93名（うち道民カレッジ生23名）

内 容：平成25年度に（公財）北海道埋蔵文化財センターが調査を行った遺跡のうち①～⑤の発掘成果の報告と、特別展示「（公財）北海道埋蔵文化財センター平成25年度発掘調査成果展」会場での報告者による展示解説を行った。

①千歳市キウス3遺跡・キウス11遺跡 菊池慈人

②木古内町大平遺跡・大平4遺跡・札苅7遺跡

奥山さとみ

③木古内町新道4遺跡

酒井秀治

④厚真町上幌内3遺跡・厚幌1遺跡

阿部明義

## 近隣市町村等対象の出前講座

	市町村	実施場所	実施日	担当	備考	参加人数
1	当別町	当別町立当別中学校	6月11日（水）	鎌田	美術部の活動	14名
2	札幌市	札幌市はちけん地区センター	7月31日（木）	藤井	「勾玉づくり」	20名
3	江別市	江別市役所隣接地・市民会館	8月30日（土）	藤井	江別青年会議所主催「まるごと江別2014」	99名
4	札幌市	札幌市立平岡公園小学校	10月4日（土）	藤井	ふれあい空間2014「勾玉をつくろう」	40名
			計			173名



▲札幌市立平岡公園小学校出前講座



▲まちを好きになる市民大学「歴史遺産特講」

- ⑤厚真町イクバンドユクチセ2遺跡  
 ・イクバンドユクチセ3遺跡 広田良成  
 企画：(公財)北海道埋蔵文化財センター調査部

## 4 共催・協力

- (1) **きたひろしまの考古展**  
 —北海道史のなかの北広島—  
 期間：平成27年2月7日(土)～5月10日(日)  
 会場：北広島市エコミュージアムセンター知新の駅  
 内容：共催事業として展示協力し、ミュージアムトークに講師を派遣した。

- (2) **北海道文化財保護協会**  
**「子どもの文化財愛護推進事業」**  
 北海道文化財保護協会の「子どもの文化財愛護推進事業」に協力し、34ページの表のとおり2か所で実施した。

- (3) **講師派遣**  
 教育委員会・大学の依頼により34ページの表のとおり13か所に講師を派遣した。

- (4) **職場体験**  
 江別市教育委員会の依頼によりキャリア教育(中学生の職場体験)を37ページの表のとおり4件受け入れた。

- (5) **インターンシップ**  
 北海道教育委員会の依頼によりインターンシップを37ページの表のとおり3件受け入れた。

- (6) **博物館実習**

各大学の依頼により博物館実習の学生を37ページの表のとおり4件受け入れた。

## 5 周辺施設・大学との連携

江別市から札幌市北東部に所在する各文化施設や大学と、以下の連携を行っている。各連携参加状況等については35ページの表のとおり。

### (1) 文京台地区道立教育3施設連携

江別市文京台地区にある北海道立図書館、北海道立教育研究所、北海道立埋蔵文化財センターが、今後さらに地域に根ざし、開かれた「施設」を目指すため、平成15年から連携事業を行っている。今年度も、7月以降に実施する事業を紹介するリーフレットを合同で作成し、文京台第1自治会(約280戸)、文京台第2自治会(約900戸)、文京台東町自治会(約490戸)の計約1670戸に145部回覧した。

### (2) 発見！ 体験！ スタンプラリー！ 夏休み探検隊♪

日時：7月19日(土)～8月19日(火)  
 場所：北海道開拓の村・自然ふれあい交流館・北海道立図書館・北海道立埋蔵文化財センター  
 内容：各施設でスタンプをもらい、全てのスタンプが揃ったら記念品が貰える。記念品の交換場所は北海道立埋蔵文化財センターとした。全体の参加者は1,609人、うち223人に記念品を渡した。期間中のセンター入館者は1,337人だった。

### (3) かるちやるnet

新札幌から江別市南西には社会教育的文化施設が集中し、地域に暮らす人たちにとって恵まれた



▲北星学園大学講師派遣



▲発見・体験 文化の秋

環境にある。各文化施設は地域文化の向上や知的財産の継承など重要な役目を担っているが、財政の悪化により運営・事業の見直しを迫られ、取り巻く情勢は厳しさを増している。このような状況を踏まえ、各施設が協力・連携を強化し、意見交換・連携事業・広報事業などの実施を協議する場

として結成された。

平成21年に北海道がイオン北海道(株)との包括的連携協定を締結する際に北海道開拓記念館が企業側に提案した「道の教育・文化施設の広報活動への協力・協働事業」を基礎とする。

#### 北海道文化財保護協会協力の出前講座

	市町村	実施場所	実施日	担当	備考	参加人数
1	津別町	津別町中央公民館	11月8日(土)	倉橋	北海道文化財保護協会幹事山田雅也氏の講演「昔の冬のくらしと遊び」と千歳市キウス4遺跡出土勾玉の観察と滑石を利用した勾玉づくり	13名
2	北見市	北見市立端野図書館	11月9日(日)			23名
計						36名

#### 講師派遣

	市町村	実施場所	実施日	担当	備考	受講者数
1	札幌市	北海道教育大学札幌校	6月23日(月)	倉橋	「北海道の文化財と地域教育」	144名
2	札幌市	北海道教育大学札幌校	6月28日(土)	倉橋	「あいの里土曜講座」	40名
3	札幌市	札幌市資料館	7月18日(金)	藤井	札幌国際芸術祭2014「石器体験講座(1)」	8名
4	札幌市	札幌市資料館	8月23日(土)	藤井	札幌国際芸術祭2014「石器体験講座(2)」	20名
5	札幌市	札幌市資料館	9月15日(月)	藤井	札幌国際芸術祭2014「石器体験講座(3)」	30名
6	札幌市	札幌市資料館	9月28日(日)	藤井	札幌国際芸術祭2014「石器体験講座(4)」	46名
7	北広島市	エコミュージアムセンター知新の駅	10月11日(土)	藤井	まちを好きになる市民大学「歴史遺産特講ものから学ぶ」	6名
8	北広島市	エコミュージアムセンター知新の駅	10月25日(土)	藤井	まちを好きになる市民大学「歴史遺産特講遺跡から学ぶ」	8名
9	北広島市	エコミュージアムセンター知新の駅	11月1日(土)	藤井	まちを好きになる市民大学「エコミュージアム資料論」	18名
10	北広島市	エコミュージアムセンター知新の駅	11月22日(土)	藤井	まちを好きになる市民大学「歴史遺産報告会」	9名
11	札幌市	北星学園大学	12月2日(火)	藤井	「アセンブリⅡ」	66名
12	江別市	札幌学院大学	12月24日(水)	倉橋	「人文地理学概説」	111名
13	北広島市	エコミュージアムセンター知新の駅	平成27年2月7日(土)	藤井	きたひろしまの考古展「ミュージアムトーク」	43名
						549名

**a 「発見・体験 文化の秋  
一遊ぼう！学ぼう！あつべつ・えべつー」**

日 時：9月28日（日） 10：00～20：00  
場 所：サンピアザ光の広場  
内 容：各施設の紹介パネルを展示して、広報資料を配布した。

体験・展示コーナー・ワークショップでは、昔の遊び体験、触れる化石、大型仕掛け絵本などを常設した。時間限定ワークショップとしては、宇宙空間シミュレーション、砂絵、蓄音機演奏、紙漉体験などを行った。

また、クイズラリーやアンケートを実施し、クイズ回答者にはもれなく記念品をプレゼントした。

**b かるちやるガーデン**

日 時：11月30日（日）  
10：00～17：00（第1会場）  
10：00～15：00（第2会場）  
場 所：札幌市中央区北5条西5丁目7  
sapporo55ビル  
第1会場；紀伊國屋書店札幌本店  
インナーガーデン（1階）  
第2会場；北海道教育大学サテライト教室（4階）

内 容：北海道教育大学学校・地域教育支援センターとかるちやるnetが協働して博学連携のもと実施した文化施設PR・普及イベント。

多数の来訪者が期待される札幌市中心部のsapporo55ビルを会場として、1階の紀伊國屋書店前のインナーガーデンで各施設の概要PR・詳細な情報提供を行い、4階の北海道教育大学サテライト教室では、①稲わらでつくるプチしめ縄②砂絵をつくろう！③紙トンボをつくろう！④化石のレプリカをつくろう！⑤絵本をたのしもう！⑥体験！デジタル宇宙シアターなどの体験型広報ワークショップを行った。

**(4) のっぽろ11ネット**

今年度は活動していない。

**6 協賛事業への取り組み**

**教員のための博物館の日in札幌**

日 時：8月12日（火） 9：30～16：30  
会 場：北海道開拓の村ビジターセンター  
内 容：博物館ひろばにおいて北海道立埋蔵文化財センターの普及啓発事業についての紹介パネルを展示し、広報資料を配布した。

**周辺施設との連携参加一覧**

名 称	文京台地区 道立教育3施設連携	発見！ 体験！ スタンプラリー！ 夏休み探検隊♪	かるちやるnet	のっぽろ11ネット
江別市郷土資料館			○	
江別市スポーツ振興財団				○
野幌自治会				○
北海道情報大学				○
野幌中学校				○
江別市セラミックアートセンター			○	○
野幌総合運動公園事務所				○
酪農学園大学				○
北海道立図書館	○	○	○	
北海道立教育研究所	○		○	
札幌学院大学				○
北翔大学				○
北海道立埋蔵文化財センター	○	○	○	○
自然ふれあい交流館		○	○	
道立自然公園野幌森林公園			○	
北海道開拓記念館		○	○	
北海道開拓の村		○	○	○
サンピアザ水族館			○	
札幌市青少年科学館			○	

## 7 利用状況

今年度のセンターの利用者数は、前年度より20.08%減少した。前年度比80%以下の月は、5月が71.16%、8月が71.37%、9月が66.43%、10月が65.34%、1月が68.49%、2月が54%、3月が61.25%となっている。これらの月の天候不順の影響が考えられる。当センターの利用者は高齢者や児童のリピーターの比率が高いため、高齢化による外出頻度の減少、児童の時間的ゆとりの減少による影響も大きい。また、今年度は自然ふれあい交流館から当センターを経て北海道開拓記念館へ至る遊歩道を歩く人の数も激減している。北海道開拓記念館が北海道博物館としてリニューアルオープンするために閉館していたことも要因の一つと考えられる。なお、近隣の札幌市厚別区から江別市に分布する文化施設でも大幅に利用者数が減少している。

### (1) 入館者数一覧

#### 月別入館者数

	開館日数	大人(男性)	大人(女性)	子 供	合 計
4月	26	509	454	187	1,150
5月	27	378	274	315	967
6月	25	447	444	316	1,207
7月	29	550	506	240	1,296
8月	27	359	355	577	1,291
9月	26	348	241	236	825
10月	28	400	310	193	903
11月	26	337	255	94	686
12月	18	174	98	72	344
1月	24	141	171	101	413
2月	24	139	108	36	283
3月	21	182	98	101	381
合計	301	3,964	3,314	2,468	9,746

#### 平成11～26年度までの月別入館者数

	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	合計
4月		758	656	545	538	831	595	830	669	904	1,192	799	920	1,244	1,201	1,150	12,832
5月		709	453	656	1,081	964	716	1,440	1,228	1,403	1,978	1,755	1,223	1,127	1,359	967	17,059
6月		652	621	808	1,299	1,054	858	768	1,099	1,150	934	1,597	1,277	1,143	1,360	1,207	15,827
7月		527	303	633	922	828	1,124	1,138	1,425	1,126	1,537	1,117	1,278	1,243	1,590	1,296	16,087
8月		673	388	662	789	747	851	1,238	1,517	1,267	1,370	982	1,230	1,727	1,809	1,291	16,541
9月		544	374	631	762	1,020	727	790	907	768	1,169	995	1,110	1,018	1,242	825	12,882
10月		650	302	649	991	1,027	773	945	939	1,267	1,120	1,214	839	1,019	1,382	903	14,020
11月	1,988	467	659	445	836	669	618	669	627	653	745	794	539	736	714	686	11,845
12月	687	286	326	669	505	330	318	232	536	488	577	370	423	426	411	344	6,928
1月	593	218	411	287	229	189	240	462	633	488	516	344	379	551	603	413	6,556
2月	366	129	240	212	270	187	189	226	329	450	374	268	286	405	524	283	4,783
3月	469	221	362	297	331	296	366	329	528	549	472	511	696	654	622	381	7,084
合計	4,103	5,834	5,095	6,494	8,553	8,142	7,375	9,067	10,437	10,513	11,984	10,746	10,200	11,293	12,817	9,746	142,399

は最多（平成11年度を除く）

#### 特別展示期間中の入館者

展 示 タ イ ト ル	期 間	入館者数
(公財)北海道埋蔵文化財センター平成25年度発掘調査成果展	3月29日(土)～6月15日(日)	2,778
「北の縄文—縄文探訪と縄文工房—」展	6月28日(土)～10月5日(日)	3,723
北海道遺跡百選7「八雲町野田生1遺跡と注口土器群」展	10月25日(土)～平成27年3月1日(日)	1,878
特別展示期間中の入館者数合計		8,379
世界遺産をめざす北の縄文展	4月1日(火)～平成27年3月31日(火)	9,746

#### 一般道民対象の講座

事 業 名	実 施 日	参加人数
「ものづくりの考古学」教室 1. ガラス玉づくり入門	6月14日(土)	15
「はじめての考古学」教室 1. 入門「縄文文化と世界遺産」(1)	7月5日(土)	41
「はじめての考古学」教室 2. 入門「縄文文化と世界遺産」(2)	8月9日(土)	20
「ものづくりの考古学」教室 1. 石器づくり入門	11月15日(土)	15
「埋文センター発掘物語」	11月29日(土)	86
計		177

### 児童生徒学生対象の体験型講座

	年	月	日	曜	事業名	参加人数
1	平成26年	6	21	土	「親子ガラス玉づくり教室」	11
2		7	26	土	「夏休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊（第1次）	7
3		8	2	土	「夏休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊（第2次）	11
4	平成27年	1	10	土	「冬休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊（第3次）	8
5		1	17	土	「冬休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊（第4次）	9
計						46

### 教育連携講座

	年	月	日	曜	事業名	参加人数
1	平成26年	4	30	水	札幌市立小野幌小学校体験学習（施設見学・火起こし）	34
2		7	1	月	北翔大学藤川先生講義利用（施設見学・勾玉作り）	7
3		7	13	日	北翔大学短期大学部菊地先生講義利用（施設見学・勾玉作り）	34
4		7	24	木	札幌学院大学国際交流センター留学生講義利用（施設見学・勾玉作り）	57
5		7	30	水	江別市教育研究所夏季セミナー（講義・施設見学・バックヤードツアー・勾玉作り）	28
6		8	2	土	平成26年度北海道立埋蔵文化財センター活用学習のための指導者研修（夏季休業期間分・教職員対象）（施設見学・バックヤードツアー・まいぶん遺跡探検隊参加）	1
7		8	27	水	江別市立上江別小学校体験学習（火起こし・ミニチュア土器・拓本・展示室クイズラリー）	146
8		9	17	水	江別市立江別小学校体験学習（施設見学・勾玉作り）	31
9		12	14	日	北翔大学短期大学部菊地先生留学生講義利用（施設見学・勾玉作り）	4
10	平成27年	1	10	土	平成26年度北海道立埋蔵文化財センター活用学習のための指導者研修（冬季休業期間分・教職員対象）（施設見学・バックヤードツアー・まいぶん遺跡探検隊参加）	1
11		1	17	土	平成26年度北海道立埋蔵文化財センター活用学習のための指導者研修（冬季休業期間分・教職員対象）（施設見学・バックヤードツアー・まいぶん遺跡探検隊参加）	2
計						345

### 講演会

	年	月	日	曜	事業名	参加人数
1	平成26年	7	12	土	夏季講演会「遺跡の年代はどうしてわかるの？炭素を使って年代を測ろう」	66
2		10	18	土	秋季講演会「北海道から世界へ発信 考古学と形質人類学のコラボレーション」	92
計						158

### 報告会

	年	月	日	曜	事業名	参加人数
1	平成26年	4	19	土	公益財団法人北海道埋蔵文化財センター平成25年度発掘調査報告会	93
計						93

### 職場体験学習

	学校名	受入期間	備考	受入人数
1	江別市立江別第三中学校	8月20日(水)～22日(金)	受付・展示・図書に関する作業、体験学習での教材づくり	4
2	江別市立野幌中学校	10月1日(水)～3日(金)		6
3	江別市立江別第一中学校	10月28日(火)～30日(木)		6
4	江別市立江別第二中学校	11月5日(水)～7日(金)		3
計				19

### インターンシップ

	学校名	受入期間	備考	受入人数
1	早稲田大学	8月22日(金)	施設見学・バックヤードツアー	1
2	札幌市立大学	9月16日(火)		1
3	北海道札幌手稲高等学校	10月23日(木)		1
計				3

### 博物館実習

	学校名	受入期間	備考	受入人数
1	札幌学院大学	7月22日(火)～26日(土)・29日(火)～31日(木)	受付・展示・図書に関する作業、体験学習での教材づくり、教育連携講座運営補助	4
2	北翔大学			1
3	札幌大学			1
4	高知大学			1
計				7

## (2) 団体利用者対応

施設見学のほか、学校や教育機関、児童関係、高齢者関係、近隣住民の団体を対象として、勾玉作りや火起こし、ミニチュア土器作り、砂絵などの体験学習を20回行った。また、大学の学外授業を25回行った。団体利用者数は1,735人である。

### 小学校

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数	
2	平成26年	5	1	木	江別市立文京台小学校体験学習（勾玉作り）	23	
3		5	8	木	札幌市立小野幌小学校体験学習（施設見学・火起こし）	35	
4		5	13	火	札幌市立小野幌小学校体験学習（施設見学・火起こし）	34	
5		6	27	金	江別市立対雁小学校施設見学	94	
7		8	29	金	岩見沢市立幌向小学校体験学習（展示室探検ラリー・勾玉作り）	60	
9		9	30	火	恵庭市立恵み野小学校体験学習（施設見学・ミニチュア土器作り）	56	
10		10	2	木	石狩市厚田区3校合同社会見学（施設見学・展示室探検ラリー）*厚田小・望来小・聚富小	38	
11		10	15	水	江別市立文京台小学校施設見学	20	
12		12	9	火	江別市立文京台小学校2年生バリアフリー授業（バリアフリー授業・展示室探検ラリー）	38	
13		平成27年	3	10	火	江別市立文京台小学校体験学習（施設見学・勾玉作り）	33
計						431	

### 中学校

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	平成26年	7	23	水	北海道教育大学附属札幌中学校ふじのめ学級施設見学	7
2		9	10	水	北海道真駒内養護学校研修旅行（展示見学・ミニチュア土器作り体験）	31
計						38

### 大学

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数	
1	平成26年	4	22	火	北翔大学本間先生講義利用（施設見学）	10	
2		5	7	水	札幌学院大学大塚先生講義利用（展示室・作業棟見学）	47	
3		6	6	金	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（土曜講座準備）	4	
4		6	13	金	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（土曜講座準備）	3	
5		6	19	木	札幌学院大学大塚先生講義利用（展示室・作業棟見学）	10	
6		6	20	金	北海道教育大学今先生講義利用（土曜講座準備）	3	
7		6	20	金	札幌学院大学大塚先生講義利用（作業棟見学・展示室見学・講義）	15	
8		7	2	火	札幌学院大学大塚先生講義利用（施設見学）	33	
9		7	6	日	北翔大学短期大学部菊地先生講義利用（施設見学・勾玉作り）	12	
10		7	11	金	札幌学院大学杉本先生講義利用（施設見学）	12	
11		7	12	土	札幌大学田村先生講義利用（夏季講演会聴講・施設見学）	23	
12		7	13	日	北翔大学短期大学部菊地先生講義利用（施設見学・勾玉作り）	19	
13		10	8	水	札幌大学川名先生講義利用（施設見学）	6	
14		10	9	木	札幌学院大学大塚先生講義利用（作業棟見学・展示室見学）	13	
15		10	10	金	札幌学院大学大塚先生講義利用（作業棟見学・展示室見学）	14	
16		10	18	土	北翔大学本間先生講義利用（施設見学）	16	
17		11	4	火	北翔大学小杉先生講義利用（施設見学）	20	
18		11	14	金	札幌学院大学大塚先生講義利用（勾玉作り）	17	
19		11	15	土	札幌国際大学山田先生講義利用（石器作り見学・施設見学・バックヤードツアー）	13	
20		11	29	土	北海学園大学手塚先生講義利用（施設見学）	20	
21		12	1	月	北翔大学園部先生講義利用（施設見学）	5	
22		12	9	火	北翔大学小杉先生講義利用（勾玉作り・バックヤードツアー）	19	
23		平成27年	1	28	水	札幌市立大学福岡先生講義利用（施設見学）	10
24			1	29	木	札幌学院大学国際交流センター文化体験プログラム（施設見学・勾玉作り）	74
25			3	10	火	北海学園大学福田先生講義利用（施設見学）	4
計						422	

### 教育機関

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	平成26年	5	10	土	長沼町教育委員会縄文文化と郷土史跡めぐり勾玉づくり体験	20
2		7	11	金	平取町教育委員会教育委員施設見学	6
3		7	20	日	平取町立二風谷アイヌ文化博物館・平取町二風谷アイヌ語教室共催「博物館めぐりバス遠足」施設見学	40
4		9	9	火	縄文遺跡群世界遺産登録世界会議委員施設視察	20
5		9	10	水	長沼町社会科サークル施設見学	3
6		9	23	火	北広島市民大学施設見学	22
7		9	23	火	石狩市教育委員会施設見学	9
8		9	24	水	江別市少年育成委員連絡協議会視察（施設見学・勾玉作り）	22
9		9	27	土	北海道大学総合博物館バラタクソノミスト養成講座木製品（中級）受講者施設見学	4
10		10	4	土	江別市郷土資料館子ども学芸員カレッジ（展示室探検ラリー・勾玉作り）	14
11		12	11	木	北海道立教育研究所長期研修者施設見学	8
計						168

### 児童関係の団体

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	平成26年	5	10	土	サンサンキッズ縄文生活体験ひろば体験	4
2		5	17	土	森の子児童クラブ縄文生活体験ひろば体験	7
3		8	6	水	江別市立大麻西小学校ミニ児童館施設見学・縄文工房体験	18
4		8	6	水	ベストフレンズ施設見学・縄文工房体験	26
5	平成27年	1	7	水	サンサンキッズ勾玉作り体験	37
計						92

### 高齢者関係の団体

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	平成26年	4	22	火	デイサービスセンタールートピア平和勾玉づくり体験	10
2		4	24	木	デイサービスセンタールートピア平和勾玉作り・砂絵体験	8
3		4	25	金	デイサービスセンタールートピア平和勾玉作り・砂絵体験	10
4		5	2	金	デイサービスつばさ施設見学	8
5		5	22	土	社会福祉法人北叡会あての社デイサービスセンターあて施設見学	19
6		5	27	火	江別ケアパークそよ風施設見学	23
7		6	11	水	澄川喜楽会（老人クラブ）施設見学	23
8		6	17	火	白石ケアセンターそよ風施設見学	27
9		6	29	日	デイサービス結いの家文京台施設見学	9
10		7	6	日	デイサービス結いの家文京台施設見学	9
11		7	13	日	社会福祉法人はるにれの里地域活動支援センター彩施設見学	14
12		7	13	日	デイサービス結いの家文京台施設見学	10
13		7	17	木	白石ケアセンターそよ風砂絵体験	13
14		7	17	木	とようら大学施設見学	25
15		7	24	木	デイサービスふくろうの森施設見学	9
16		8	13	水	デイサービスがまの穂施設見学	13
17		8	27	水	デイサービス結いの家文京台砂絵体験	17
18		9	12	金	みちのいえ（デイサービス）施設見学	6
19		9	13	土	聖陵デイサービスセンター施設見学・勾玉作り体験	13
20		9	16	火	栄通デイサービスセンター施設見学	5
21		10	3	金	聖陵デイサービスセンター施設見学・勾玉作り体験	13
22		10	8	水	聖陵デイサービスセンター勾玉作り体験・施設見学	14
23		12	2	火	ツクイ江別弥生デイサービス施設見学	6
24		12	3	水	ツクイ江別弥生デイサービス施設見学	3
25		12	5	金	ツクイ江別弥生デイサービス施設見学	4
計						311

### 近隣住民の団体

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	平成26年	6	19	木	江別市朗読の会「まちなか」勾玉づくり体験	53
2		8	31	日	札幌市篠路地区青少年育成委員会施設見学	20
3		10	21	火	札幌地区中町内会施設見学	32
4		10	21	火	北海道銀行大麻支店施設見学（江別市立大麻中学校生徒職場体験の一環として）	4
5		10	23	木	手稲区すすかけクラブ施設見学	16
6		10	28	火	札幌元町歩こう会施設見学	10
7		11	21	金	江別市視覚障害者福祉協会勾玉作り体験	20
計						155

### その他の団体

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	平成26年	4	13	日	千歳市ミヤコ様ほか施設見学	4
2		6	7	土	北海道文化財保護協会施設見学	38
3		6	28	土	シーピーツアーズ「北の縄文周堤墓をめぐる日帰り」施設見学	11
4		8	30	土	北海道考古学会遺跡見学会施設見学（展示室見学・作業棟見学）	25
5		9	13	土	函北・東考古学OB会施設見学	13
6		9	26	金	美利河旧石器ボランテアアの会施設見学	7
7		10	18	土	大人塾施設見学	20
計						118

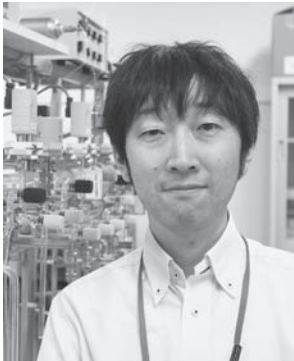
91	団体利用者計					1,735
----	--------	--	--	--	--	-------

## 8 講演会要旨

### (1) 夏季講演会

#### 「遺跡の年代はどうしてわかるの？ 炭素を使って年代を測ろう」

講師：工藤雄一郎 氏（国立歴史民俗博物館）



#### ■本日の話題：年代

こんにちは。千葉の佐倉から来ました、国立歴史民俗博物館の工藤と申します。ご紹介いただきましたように、専門は年代測定です。旧石器時代と縄文時代が中心です。

ここでは、そもそも考古学では遺跡、遺物の時期や年代をどうやって決めているのかからお話をさせていただきたいと思います。それから炭素14年代測定法の原理のお話、最後に年代測定からわかったトピックを2つご紹介したいと思います。

#### ■考古学と「年代」

我々考古学者にとってまず一番重要な仕事は、遺跡から出てきた様々な資料を並べて、年代をおさえることです。層位学的方法、型式学的方法、そして今日の話題の理化学的方法、この3つの方法を駆使しながら、遺物あるいは遺跡そのものの時期を決めていきます。

考古学ではよく2つの意味で年代という言葉を使います。例えば縄文土器と弥生土器を比べると、あるものに比べて新しいか古いかを決める年代のことを「相対年代」と呼んでいます。それに対して具体的に数字で示すことを「絶対年代」と言います。もっと身近な例を出してみます。みなさんよくご存じの王さんと長嶋さんですが、2人の関係を相対年代で表すと、王さんは長嶋さんより若い、長嶋さんは王さんより歳をとっている、という記述のしかたになります。絶対年代で示すと、王さんは1940年生まれで74歳、長嶋さんは1936年生まれ78歳、という具体的な数字で示すことになります。

考古学では相対年代と絶対年代をうまく使いながらものの新旧を明らかにしていきます。年代学を考古学において初めて完成したのは、スウェーデンの考古学者のオスカー・モンテリウスで、考

古学において相対的な年代を決めるためには、層位学的方法、型式学的方法、一括遺物、という3つの方法があると述べています。彼が定義したこの3つの年代学が、その後の考古学の基礎になっています。

#### ■層位学的方法

層位学的方法は本来地質学的方法で、新しい地層は古い地層より上のほうに堆積していくという「地層累重の法則」に従ってものの新旧を分けていく方法です。例えば、下のほうから三葉虫の化石が出てくる層があって、それより上にはアンモナイトが出てくる層があったとします。新しい地層は古い地層の上に堆積していくわけですから、三葉虫が古い時期のものでアンモナイトが新しい時期のものであるということは一目瞭然なわけですね。こうして、ある特徴的な資料が出土した地層と、その上下関係から年代の新旧を決めていきます。層位学を駆使していくと、考古遺物の相対的な新旧関係を把握することができます。

こういった層位学的方法は日本でも古くから始まっています。ニール・ゴードン・マンローというイギリスのお医者さんで、アイヌの研究もなさっている有名な考古学者、人類学者が、1905年に横浜市之三ツ沢貝塚を発掘調査しました。そのときにマンロー先生は、「層序の区分は、それぞれ異なる時代に堆積した証拠であり、遺物・土器は各層ごとに区別されなければならない」と述べて、日本で初めて科学的、層位学的方法な発掘調査をしました。その後1930年代ぐらに入ると層位学的方法な発掘方法が普及しました。これを「分層発掘」と呼んでいます。

みなさんの身近なところにも地層累重の法則があります。例えば新聞の山を毎日積み上げていきますと、普通は下のものほど古い、上のものほど新しい、という関係になっているはずですが、ぜひ家に帰ったら確かめてみてください。

#### ■型式学的方法

考古学で相対的な年代を決めていく方法に、型式学的方法があります。例えば、スーツの襟は外側に折っていますが、学ランの襟は立っています。学ランは詰め襟といって上までボタンで留められますが、実はこの詰め襟のほうが服の型式としては古く、詰め襟の形から襟を折り返す形に変化し

たこととなります。ほかにもスーツの襟の左側にボタンの穴の痕跡があります。元々は一番上でボタンを留めるための穴ですが、もう機能的な意味を失って装飾的なものになっている。こうした形の変化から時間差を読み解いていく方法が型式学的方法です。考古学では遺物に見られる特徴をつぶさに観察して、変化の方向性を推測するわけです。その方向性に従って時系列に並べていくと新旧関係が見えてくる。これを型式学的変遷といいます。

残念ながら北海道にはないのですが、古墳時代に円筒埴輪というものがあります。これは元々、器台といって壺を置く台でした。それがだんだんと古墳の副葬品としての役割が変わってきて、器台から特殊器台に変化します。文様も複雑化して、穴はおそらく痕跡的に表現されています。さらに時間が経つと特殊器台形埴輪というものになり、器台だった特徴も失って装飾的になってきます。最後には円筒形埴輪という非常に単純化したものに変化しています。これは、実用的なものから非実用的・装飾的なものへと、型式学的に変化しているわけです。

もう1つの例を考えてみましょう。弥生時代の銅鐸は、紀元前350年ごろから紀元後200年後ごろまで、約550年間ほど使い続けられた青銅器です。銅鐸の変遷をみていくと、一番古いものは朝鮮式小銅鐸というものです。それがだんだん変化して、一番新しい銅鐸は1メートルぐらいある大変大きなものです。銅鐸は本来、実用的な鐘を鳴らす道具ですが、弥生時代に日本に入ってきて、稲作の祭りに使う道具として変化していくなかで大型化し、より装飾的なものへと変化していきました。

私の専門のひとつが縄文時代ですが、縄文土器の編年は細分化されています。縄文時代の遺跡には多くの貝塚があります。貝塚はどんどん貝を捨てていくので、土や火山灰がじっくり堆積していくのとは比べものにならない速さで積み重なっていきます。堆積のスピードが非常に早いということは、細かく時間を分けられるということです。縄文人はこの貝層の中に土器を捨てていますので、層位的に明確に細かい時期をとらえることができるわけです。もうひとつ、縄文時代は竪穴住居がたくさんあります。竪穴住居が2つ重なって合っている場合、古い住居は新しい住居に切られている場合があります。新しい住居を建てる時

に、古い住居の端を壊して溝を掘っているような例です。同じような形式の住居で時間的に近接するのですが、切られた住居から出てくるもののほうが古いことがわかります。縄文時代中期の遺跡では住居の中に炉をつくる例が多くみられるのですが、ここに炉体土器という土器を使うことがあります。切り合い関係をもつ2つの竪穴住居それぞれに炉体土器が残されていたら、新旧関係は明白です。つまり層位学では単純に地層の上下で分けるだけではなく、平面的な切り合い関係も見ていきます。このように、文様の型式学的な変化、層位的な証拠、切り合い関係などを相互に検証していくという緻密な作業によって、縄文土器の細かい編年が完成していくわけです。

### ■年代測定はどうして必要？

ここまでの話で、そんなに細かく新旧が分かるなら年代測定なんていらぬのではと思われた方もいるかも知れません。しかしながら、年代測定を用いないと分からない場合も数多くあります。例を挙げて考えていきたいと思います。

例えば有名なエジプトのスフィンクスと青森県の三内丸山遺跡は、どちらが古いのでしょうか。実は三内丸山遺跡のほうが古いのです。

また、例えば福岡県の橋本一丁田遺跡から出てきた弥生時代早期の山ノ寺式土器と、北海道の添山遺跡の聖山式土器という縄文時代晩期の終わりの土器、どちらのほうが古いのでしょうか。

みなさん縄文時代晩期のほうが古いと思われたようですが、実は違います。山ノ寺式土器が2,900年前くらいで、聖山式土器が2,700年前から2,600年前くらいです。

地理的に離れている場所の年代の比較は、相対編年だけではなかなか分からない難しい問題なのです。

違う例を挙げたいと思います。意外と難しいのは低地の遺跡です。水場遺構やクルミ塚などは縄文人の食料や水利用を知る上でとても重要な証拠ですが、こういった食料となった種実や遺構構築材は、時期を示す明確な特徴がありません。出土した地層に時期を示す土器片がなければ時期を特定するのは厳しいと言えます。

また、混入、攪乱という問題があります。縄文時代の遺跡から炭化米が出てきたが年代を測って見たら新しいものでした、という例がよくありま

す。小さい種実は上の地層から下へ落ち込んでしまふことがあります。これを「攪乱によるコンタミネーション（混入）」と言います。先ほどの地層累重の法則の例でみると、例えば新聞の山から3日ぐらい前の新聞を抜き出して適当に戻したら、順序が入れ替ってしまいます。私も調査した新潟県の真人原遺跡では、近くにある大きなキリの木から根っこが発掘調査の範囲に入ってきました。根っこが枯ればそこに穴が開いて石器が落ちたり、あるいはモグラによって穴が開けられて遺物が移動したりということが起こるかもしれません。畑の耕作による影響もあるかもしれません。こういった人為的、生物的な攪乱が、遺跡で起こってしまうことがあるわけです。

型式学的方法、層位学的方法にはもう一つ弱点があります。例えば、型式学的方法を使ってある2つの土器の新旧関係がわかったとします。しかし、これがどのくらいの時間で変化したのか、土器だけを見てもわかりません。型式学的方法は基本的に均等に時間を区分していくことができないため、実際に経過した時間とその差を明らかにするのはほとんど不可能に近いのです。やはり考古学には、相対年代だけではなく絶対年代も必要だということがご理解いただけたでしょうか。

## ■炭素14年代測定法

2つめの今日の話「炭素14年代測定法」について説明をしていきたいと思います。理化学的な年代測定法とは、相対年代ではなく、試料に対して絶対年代を与える測定法になります。一般的に使われているのは、放射性核種の放射壊変とその半減期という特徴を利用して年代を測る方法です。私が主にやっているのは炭素14年代測定法で、<sup>14</sup>C年代測定法と言ったりします。

これ以外にも理化学的な測定法として年輪年代法があります。これは樹木の年輪の変動パターンを調べる方法です。年輪には幅が広くて成長の早いところと幅が短くて成長の遅いところがありますが、これは気候や気温などの変動と関係しています。例えばスギの異なる木同士で全く同じ変動パターンが見つかれば、その箇所は同じ時期のものと考えられます。年輪年代法は非常に優れた方法ですが、100年以上の年輪幅がないとパターンのマッチングができないことや、日本だとスギや

ヒノキなどの針葉樹にしか適用できないという問題点があります。

<sup>14</sup>C年代測定法は、アメリカの物理学者ウィラー・リビー博士が発明した年代測定法です。リビー先生は1940年代、主に原爆の製造に関わる研究をされた方ですが、炭素にも放射線を出すものがあること、その炭素から出てくる放射線の量を調べれば年代がわかることに気がつきました。そして1947年、放射性炭素、炭素14の検出に初めて成功します。それを基に1950年頃に<sup>14</sup>C年代測定法を開発しました。1960年にはノーベル化学賞を受賞しています。

炭素14の「14」とは何かと思われた方もいらっしゃるかも知れません。原子の重さは原子核を構成する中性子と陽子の数で決まります。中性子1個と陽子1個はほとんど同じ重さをしています。物理の世界ではこの中性子と陽子の数の和のことを質量と言います。普通の炭素は、中性子が6個で陽子が6個で合計が12なので、質量が12となります。

ところが、原子の中には同じ炭素だけれども重さが違うものがあります。これを同位体と呼んでいます。炭素には3種類の同位体があります。電子の数は変わりませんが、中性子の数だけ違います。普通は炭素の12ですが、中性子の数が1個多い炭素の13と、2個多い炭素の14があります。年代測定に使うのはこの炭素14という、普通の炭素原子よりも2つぶん中性子の数が多いものになります。自然界には、炭素12が98.89%、炭素13は1%、炭素14に関しては1兆分の1という非常に少ない量しかありません。これはトラックに満載された砂の中に一粒あるかないかくらいの僅かな微量です。炭素12と13は比較的安定して壊れないため安定同位体と呼んでいます。炭素14は不安定なため安定を取り戻そうと放射線を出して別の原子に変わっていきます。このため放射性元素、放射性同位体と呼んでいます。物理の世界ではこの変化を放射壊変と呼んでいます。放射性元素というと原発事故や原爆を連想して何やら危険な感じがすると思われるかもしれませんが。私の師匠にあたる中村俊夫先生はこんなことを言っていました。「私は、身体に約950兆個の放射性炭素14を持っています。そのうちの4,000個が毎秒ごとに壊れて別の元素に変わっています」。自然界にある放射性炭素は非常に微量なエネルギーしか持ってい

ないため、人体への影響は全くありません。炭素14はそのくらい普通でありふれているものだというのを、ぜひ知っていただけたらと思います。

原発事故の後ニュースや新聞などで、ヨウ素131、セシウム137などをよく耳にしたと思います。これも放射性元素です。セシウム137は不安定ですが、ベータ線やガンマ線を放出して、バリウム137という安定した原子に変わります。また、半減期という言葉聞いたことがあるかと思いますが。半減期とは、放射性元素が放射壊変して安定した物質に変わっていくのにどれくらいの時間がかかるか、という目安となる時間です。単純に言うと、原発事故の時に100個のヨウ素131ができたとします。それが8日後には50個に減り、さらに8日経って16日経つと25個になります。同じようにセシウムは半分になるのに約30年かかることが分かっていますので、原発事故の時100個放出されたとしたら、50個まで減る期間として30年、25個まで減るのには60年かかるということです。つまりセシウムやヨウ素の同位体の数を数えたら、事故が何年前に起こったのかを後々計算できるはずで

す。この半減期という放射性元素の性質を使って年代測定をする方法の一つが炭素14年代測定法です。リビー先生は、暦の年代がわかっている試料から出てくる放射線の数を数えてみれば良いと考えました。例えば、現代の木炭1グラムから1分間に出るベータ線をカウントしたら、15個ぐらいだったとします。5,000年ぐらい前のエジプト古王朝のミイラ1グラムをカウントしたら、8個だったとします。現代のものと比較して、5,000年前のものは半分しかベータ線がない、含まれている放射性炭素が既に半分になっているということです。リビー先生はこのような計算をして、炭素14の半減期は5,568年であるという数字を割り出しました。その後正確には5,730年という数字に変わっていきました。半減期が決まれば、全く時期が分からない未知の試料でも計算できるというわけです。これが放射性同位体を使った理化学的な年代測定法の原理になります。

かつては試料から出てくるベータ線の数をカウントしていたのですが、最近では、炭素に含まれる同位体の量を直接数えてしまう方法が開発されており、これを質量分析と言います。名古屋大学にある加速器質量分析計はそのための大型機械で、

非常に精度がよく、一度に数多くの試料を測ることが出来ます。

ところで、炭素14はいつ作られていつから減り始めるのでしょうか。炭素14は大気中で作られています。宇宙から宇宙線という強力なエネルギーが日々降り注いでいます。それが大気圏に入ってきて窒素にぶつかり、原子核の中の中性を1個吹き飛ばして炭素14に変化します。炭素原子そのままだと不安定なので、すぐに酸素と反応して二酸化炭素になり、ジェット気流に乗って大気中に拡散していきます。そして、二酸化炭素ですから、光合成によって植物に取り込まれるわけです。その植物を動物が食べ、人が食べ、生きている間生物の体の中には一定量の炭素14がぐるぐると食物連鎖の中で供給されていくわけです。ところが生物の活動が終わってしまうと、あとは炭素14が減っていく一方なわけです。生物の活動停止が炭素14時計の目盛りのスタートになります。半分になるのに5,568年、4分の1になるのに11,000年ぐらい、16分の1になるのに22,000年ぐらいかかるわけです。

この炭素14年代測定法なら、炭素を含んでいれば大体のものは測れますので、遺跡から出てくる試料を扱ううえで非常に都合がよいということになります。例えば骨、木材、種実、植物、貝などを、この年代測定法によって測ることが出来ます。最近では土器についているおこげが測定の対象となっています。発掘して調べると内面にべったりと当時の食料がこびりついた土器が出てくることがあります。そういう微量なおこげも当時の動物・植物の痕跡ですから、年代測定の対象になります。あと考古資料ではありませんが古文書も測れます。古文書は紙でできていますので、紙を作ったときの年代を示すわけです。例えば「これは中世の文書ですごいですよ、一千万でどうですか」と言われて年代を測ったら、実は現代のもので偽物でした、ということも分かってしまうので、真贋鑑定にも使えたりします。

## ■年代測定からわかったこと

最後に、年代測定からわかった2つのトピックをご紹介します。1つは縄文時代の始まりについての最新の年代観、もう1つは私が最近興味を持っている日本の漆文化の起源についてです。

## ■縄文時代の始まりはいつ？

縄文時代の始まりは、かつては今から10,000年前と言われていましたが、最近では16,000年前と言われるようになりました。年代測定の精度の向上などによって年代観が変わってきています。

考古学では旧石器時代にはなかった新しい道具の出現を画期として、旧石器時代と縄文時代とを区分しています。土器や弓矢の出現は非常に重要な出来事です。ちょうど10,000年前～12,000年前の寒冷な氷期から温暖な後氷期へと動植物が変化して、旧石器時代人が新しい環境に適応していく中で土器や矢を発明し、縄文時代が始まっていくと我々考古学者は考えていたわけです。特に日本考古学では土器の出現をもって縄文時代の始まりとしています。これを歴史的に位置づけたのが小林達雄先生で、土器の出現こそが縄文時代開幕の原点として最も重要だと定義しています。土器の出現は、ただの容器としてではなく、煮炊きの土器として出現したことが重要だとされています。煮ることによって旧石器時代人が利用できなかった新しい食料の開発が進み、食料事情が安定して縄文文化の発展につながったと考えられています。

1990年代ごろまでは、氷期が終わって新しい環境になって土器が出てきたと考えてきました。しかし、1999年4月17日に「縄文の起源は4,500年古く。青森で16,500年前の土器」という新聞報道がありました。新しい分析方法を使って年代測定をした結果これまでよりも大幅に古い年代が得られ、年代観が大きく変わっていくきっかけになったわけです。

1998年、國學院大學の谷口康浩先生が中心になって、青森県大平山元I遺跡の発掘調査を行いました。そこで当時、考古学の編年的に最古段階と考えられていた土器と、旧石器時代的な特徴を持つ石器が一緒になって発掘されました。それについて当時最新の名古屋大学の加速器質料分析計を使って、中村先生と辻誠一郎先生2人が中心になって、土器に付着したおこげを測ろうという研究が行われました。そして大平山元I遺跡の土器のおこげは、一番古く見積もって16,500年前になるという研究が発表されました。これは当時、世界最古の土器の年代で、非常に注目を集めて大論争が起きました。これまで、土器が出現したころはもう暖かくなっていて、豊かな森の資源を利用するために土器を発明したんだと考えられていま

した。しかし最古の土器が使われたころの北東北は、まだ旧石器時代的な針葉樹中心の環境が広がっていて、堅果類が多く実るような縄文的な環境では決してなかったと思われます。小林達雄先生が土器出現の歴史的な意義を説明していた中では、植物性食料の利用が重要視されていたわけですが、環境が変わったから土器を発明したわけではなさそうということが明確にみえてきました。年代が古くなるとその歴史的な意義をどう評価するのも変わってきてしまいます。正確な年代を押さえることはやはり非常に重要だということが、こういった事例からもわかります。

## ■日本の漆文化の起源は？

もう1つのトピック、漆器の話をしたと思います。漆器は英語でジャパンと呼ばれるほど、日本の伝統的な工芸品の1つです。縄文時代には非常に高度な漆文化が既にあり、数多くの素晴らしい漆製品が見つかっています。漆文化の始まりを推定することは、考古学の中では非常に重要な課題の一つです。

昔から植物学者は、日本のウルシは外来種であると、また野生種ではなくて栽培種だろうと考えています。野生のウルシは中国の長江の中流域から上流域、比較的内地のほうに生えています。縄文時代あるいはそれよりも古い段階にウルシが日本に入ってきたのだとすれば、まず最古の漆製品を見つければ、漆文化がいつから日本にあったのかを考える重要な証拠になります。それから、植物としてウルシがいつから日本にあるのかも探さなければいけません。ウルシの木材そのもの、花粉、種実が証拠になります。

縄文時代前期の漆塗り製品には、島根県の夫手遺跡から出た最古の漆液容器や、鳥浜貝塚から見つかった漆の彩文土器、一木造りのツバキ属でできた櫛などがあります。山形県押出遺跡の漆彩文土器は特に優れた漆器です。青森県向田18遺跡の漆塗りの土器は、取手のところに巻貝を埋め込んで漆で固めた痕跡があります。これは後々の螺鈿の技法にも通じるテクニックです。焼き付け漆というテクニックも既に7,000年前～6,000年前にはあることがわかっています。

中国ではどうでしょうか。中国最古の漆製品は現在のところ、跨湖橋遺跡で見つかった河姆渡文化期の木弓だと考えられています。7,500年前～

7,400年前ぐらいのものです。有名な河姆渡文化の木胎漆器は7,000年前ぐらいです。縄文前期の漆も7,000年前ぐらいに遡りますから、中国の漆器は縄文前期の年代と大差ないことが分かります。

問題の資料が、北海道の函館市で見つかった垣ノ島B遺跡のお墓です。漆塗りの編み物状の製品を身に着けた人が埋葬されたお墓が見つっています。年代測定では9,000年前、今現在では最古と考えられている資料です。ただし、漆そのものではなくて漆混じりの土壌を測っているので、その汚染物の影響で古くなっているという意見もあります。9,000年前のものと考えると、中国よりも2,000年くらい古い時期から北海道で漆文化が始まっていることになり、大きな問題となっている資料です。中国の最古の漆製品は7,400年前～7,500年前ぐらいですが、縄文の漆文化は縄文時代前期7,000年前ぐらいから発達して、縄文時代晩期の亀ヶ岡文化のころで終わってしまいます。垣ノ島B遺跡だけ9,000年前と突出して、ここに2,000年近い空間があいているということを知っておいてください。

最近はウルシの木そのものを見つけるという研究が進んでいます。木材の樹種同定という方法を使います。これまでウルシとその近縁種を見分けるのが難しかったのですが、鈴木三男先生と能城修一さんが研究をされた結果、2004年ぐらいによりやくウルシの木が同定できるようになりました。また吉川昌仲さんが研究されて、花粉でも見分けられるようになってきています。能城さんらがこれまで見つかったウルシの木材を整理した分布図をみると、1点だけ縄文時代草創期のものがあります。これは鳥浜貝塚から出土したもので、調査自体は1980年代ごろに行われましたが年代測定は行われていませんでした。2011年になって当時の試料を年代測定した結果、12,600年前、まさに縄文時代草創期の年代が出てきました。これはたいへんな問題です。縄文時代の草創期には、漆の文化は日本列島では見つからないのですが、ウルシの木自体はすでに日本列島にあるということになります。

地球の気候変動の歴史を見ると、最終氷期の終わりごろに一旦温暖になったあと再び寒冷化し、11,000年前ごろから後氷期という、現在と変わらない温暖な時代が始まります。縄文時代の始まりはまだ寒冷な時期だったということはわかっ

ています。鳥浜貝塚から見つかったウルシの木は、後氷期に入る前の最終氷期の一番終わりごろ既に日本にあったということになります。

考古学的な証拠についても縄文時代草創期、あるいは旧石器時代にまで遡って探していかなければいけません。こうした時期の中国とのつながりを示すような証拠は見つけることができません。一方で、もともとウルシが日本にあったと考えることもできるのですが、鳥浜貝塚よりも古い時期のウルシの化石の証拠はまだ見つかっていません。現在の日本では野生状態でウルシが生えていないのは明らかですから、ウルシの起源については、年代測定が進歩した現在、さらにまだ多くの謎に包まれているという状況です。

ここで、考えられそうな仮説を3つ考えてみました。

1つは日本にもともとウルシがあって、漆文化は縄文時代早期ごろ日本で独自に生まれたという日本起源説です。植物学的には否定されています。

2つ目は、ウルシは外来だが、もっと古い時期に、例えば旧石器時代人がウルシを持ち込んだ、という説も考えられます。旧石器時代の漆器は見つかっていませんが、例えば接着剤として使われていて、縄文早期または前期ごろに漆器の文化が始まったと考えることができるかもしれません。

3つ目は、9,000年前と考えられる垣ノ島B遺跡の年代が間違っていたという説です。ただそうするとウルシの木自体は12,600年前にあるわけですから、5,000年くらい間が空いてしまいます。ウルシの木が見つまっていることと、漆文化の開始にギャップがあることがどう説明できるのか、この点も、今後の課題として解明していかなければなりません。

## ■結び

今日は、遺跡の年代はどうしてわかるのか、というテーマでお話をさせていただきました。考古学にとってまず重要なのは相対的に年代を決めることですが、それだけではわからないこともいろいろあるということはみなさんご理解いただけたと思います。非常に重要な資料、年代を測らなければわからない資料に関しては、炭素で年代を測ることで、新しい考古学的事実が見えてくるといことをご紹介して、本日の講演を終わらせていただきたいと思います。

## (2) 秋季講演会

### 『北海道から世界へ発信 考古学と形質人類学のコラボレーション』

講師：松村 博文 氏

(札幌医科大学保健医療学部教授)

#### ■はじめに



これまでの日本人の起源論は、日本列島と周辺で留まっているものが多かった。アジア全体から見て、縄文人はどこから来たのか。どのように位置づけられるか、という視点で私が研究してきたことを解説する。

#### ■「日本人二重構造論」

10年ほど前に他界した元東京大学教授の埴原和郎先生は、私が修士課程の時の指導教官で、学恩を多く継受した。その埴原先生が日本人の起源について提案したのは、「日本人二重構造論」である。日本人の起源論には、遺伝的に連続しているという「連続説」や大陸から渡来した人たちと置き換わってしまったという「置換説」などがあるが、どのように縄文人から弥生人に移り変わり、人々が交代していったのかを示したのが、この二重構造論になる。このモデルによると「連続説」も「置換説」も日本列島全体で見ると、どちらも正しいといえる(図1)。

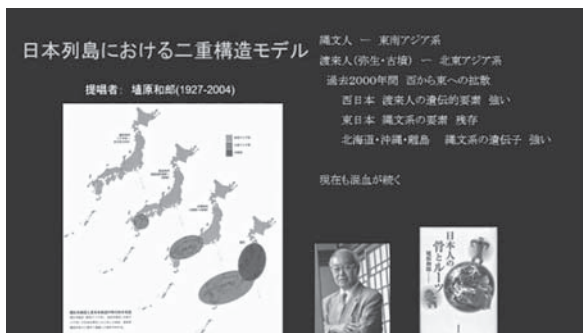


図1

#### ■縄文人と弥生人

まず、最初に日本列島全体に縄文人が住んでいた。その多くは、東南アジアの形質をもつ人たちだった。そこへ、弥生時代になって、北東アジア

を起源とする大陸からの稲作民が入ってきて、過去2,000年間(弥生、古墳、奈良、歴史時代)を通じて、渡来人は、西日本から九州、沖縄、西日本から東日本へと拡がっていった。

#### ■縄文人と弥生人の骨格

縄文人と弥生人の骨格はかなり違う。渡来人に起源をもつ弥生人は一重まぶた、体毛が少ない、顔が長く、扁平。とくに眉間のあたりが真っ平らになっている。また、頬骨が前方に張り出していて、歯が大きいという特徴がある。それと比較して、縄文人は、体毛が濃く、鼻が高く、大きい。二重瞼で、はっきりした顔立ち。顔が上下に短く、弥生人に比べて平均2cmまではいかないが、1cm強は短く、幅が広い。また、眉間がひどく盛り上がっていて、鼻の付け根がぐっと落ち込むかと思うと、鼻先はぐっと反り上がっている。低くて、彫が深く、立体的な顔立ちといえる。これらの出土人骨から復顔すると下のようになる(図2)。

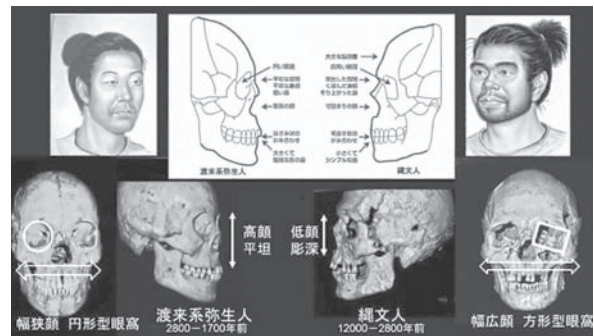


図2

#### ■「縄文vs. 弥生」

今から5、6年前に東京上野の国立科学博物館で行われた「縄文vs. 弥生」という特別展図録用に撮影された写真(図3)。

左上が縄文系を代表した顔立ち。右上が弥生系を代表した顔立ちのモデルさんが選ばれている。

左下が礼文島縄文後期のお墓。貝製品をたくさん身につけ、屈葬で埋葬されていた。右は、弥生人骨がまとまって見つかった山口県土井ヶ浜遺跡の様子。



図 3

左から約4,000年前の縄文時代中期コタン温泉遺跡、約2,000年前の続縄文時代南有珠7遺跡、約400年前の近世アイヌ文化期有珠ポンマ遺跡の人骨が並んでいる(図4)。鼻周辺の立体的な特徴、眼窩が長方形のように角ばっている、顔が低い。これらの特徴が縄文人からアイヌ文化期の人までだいたい受け継がれている。



図 4

### ■最近のミトコンドリアDNA分析

さらに、最近のミトコンドリアDNA分析結果によると、縄文人のDNAをひくものが多いが、3割程度、オホーツク文化期の人たちのDNAをひくものもみつまっている。

### ■出土歯の分析

20年から30年前、私が大学院の頃は、歯を研究対象にしていた。歯の出土資料を観察、計測して、比較、分析をする手法が主だったためだ。

そのような手法でも、縄文人と弥生人の差ははっきりわかるものだった(図5)。

左が縄文人のもの。一見して歯が小さいことがわかる。右の渡来系の弥生人は、歯が大きく、シャベル型切歯といって、前歯の切歯の裏側が深くえぐれてくぼんでいる特徴がある。歯が大きい、小さいということは、寒冷地適応に起因している。

シベリアなどの寒冷地において、約20,000年前の最終氷期の頃は、かたい動物の肉を噛む力が求められた。また、皮の加工においても歯を利用することがあったと考えられている。そのため、強く、しっかりとした歯を維持してきたのであろう。

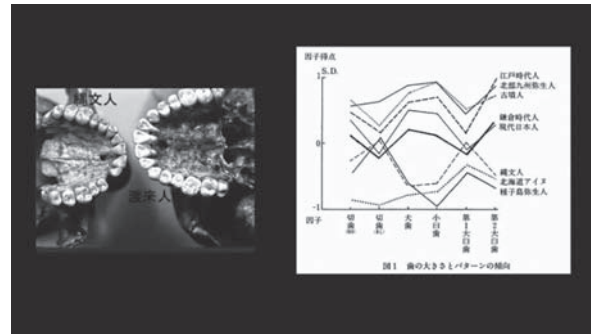


図 5

### ■日本列島における地域差

日本列島の人々には、地域的な形態のバリエーションがかなりある。

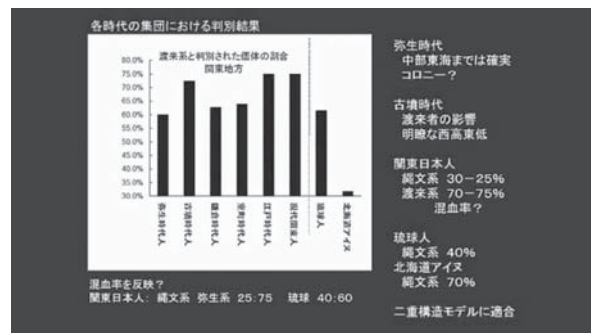


図 6

図6は、関東地方の人々にどれくらいのバリエーションがみられるか、歯の計測値から調べてみたもの。例えば古墳時代人は、上流階級の墳墓から出土した人々が多いためか、70%くらいのひとが渡来人型の特徴を持っている。鎌倉時代のデータは一般庶民のものと考えられているが、60%くらいが渡来系弥生人の特徴、40%くらいが縄文人的である。以後渡来系の人々との混血も少しずつ増していったと考えられ、江戸時代になると、縄文人的特徴をもつ人々が30%くらい。渡来系弥生人的な人々が70%くらいの割合になる。近畿地方では、90%以上の人々に、渡来系弥生人の特徴が強くみられる。両系譜の人々は無論混血しているので、パーセンテージはあくまでもどちらの特徴が強いかを示すものにすぎないが、裏をかえ

せば混血率を反映している可能性がある。

### ■アジア全体からみたひとの動き

それでは、このような構造がアジア全体で見たときに、両者がどういう系譜に属するのが問題になる。これらを突き詰めていくと、縄文人の起源、弥生人の起源もみえてこよう。その解明に向け、アジア、オセアニアの人類拡散にかかわる研究を行っている。

### ■言語の拡散

図7左は、言語の拡散を示したもの。現在の中国では、華語が中心。その周辺にいろいろな言語がある。タイ語とかベトナム語、ラオス語、ミエン語、チベット語など、オーストロネシア語族とオーストロアジア語族に含まれる。おそらく長江から黄河流域から広がっていったのではないかと考えられている。もう少し北には、アルタイ語族、これには朝鮮語や日本語につながっていく言語集団。ベルウッドなど言語考古学者が中心となり、稲作民の拡散とそれに伴う言語の拡散がほぼ同時期であろうと推測している。

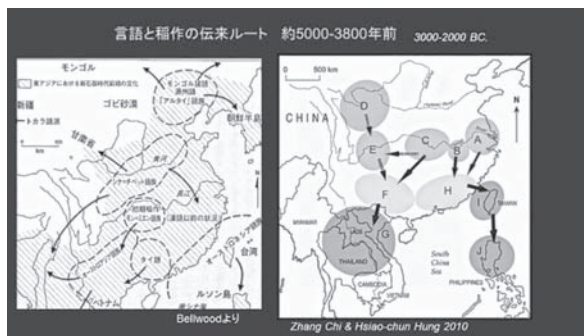


図7

### ■農耕の伝播

イネの伝来はどのようになっているか。図7右は、今から5,000~3,800年前くらいの稲作、もしくは農耕の伝播ルートを示したもの。北京大学考古学院のザン・チー教授と、オーストラリア国立大学のシャオ・チュン研究員らの研究による。水田稲作の起源は、揚子江(長江)流域のA、Bの地域。ここを起点にして、イネは、中国南部、台湾、雲南、インドシナ半島へと広がっていった。今のところみつまっている一番古い栽培種の稲は、今から7,000年前のもの。野生種の稲は、当然、もっと古い時代から出土している。

Dの地域は、黄河の中上流域。この地域から広

がっていたものは、陸稲と雑穀になる。いわゆる「ミレット」の起源がこの地域にあるのだ。

これらの言語の拡散と農耕の拡散は、それらを携えた人の拡散により生じたものだろう。

### ■中国との共同研究

この10年間、中国の研究者と共同研究を続けており、各地域の大学の研究者や埋蔵文化財センターと協同の作業をすすめ、北から南にかけて遺跡出土の人骨を調査し、比較研究をおこなっている。

### ■東胡林遺跡

北京市の郊外、東胡林遺跡で保存状況の良い人骨がみつまっている。この人骨は、約1万年前、旧石器時代が終わって、新石器時代に移行する時期のもの。顔が長く平坦で眼窩が円く、典型的な北東アジア人の特徴をもっている(図8)。



図8

### ■早都山遺跡

次は、早都山遺跡から出土した人骨。日本でいうと弥生時代に相当する約2,500年前の人骨だが、この人骨も北東アジア人の特徴を明確に表している(図9)。



図9

### ■買湖遺跡

次に今から7,000年前くらいの河南省買湖遺跡。

大規模に調査が行われ、すでに発掘調査報告書も刊行されている。各種科学的な分析は、現在もすすめられており、栽培イネの発祥と考えられている河姆渡文化と同時期のイネがみつまっている。この遺跡から出土する人骨にも、明らかに北東アジア人の特徴を示すものが出土している。(図10)。



図10

### ■西坡遺跡

西坡遺跡は、今から5,300年前の仰韶文化に属する。上部の人骨は、北東アジア人の特徴を持つ人骨だが、下部の人骨は、ちょっと違った様子を示している(図11)。



図11

### ■八里崗遺跡

八里崗遺跡は、同じく河南省で2004年から北京大学により大規模に発掘調査が行われている埋葬遺跡。今から5,000~6,000年前の仰韶文化に属する。

前期、中期、後期の層序にわかれ、この遺跡でもイネがみつまっている。北京大学のザン・チー先生が担当されており、図12のように遺体が整然と並べられたような状態で埋葬されていた。全部で500体の人骨がみつまっている。



図12

### ■人工変形障害

頭蓋骨の後ろ部分が平らになっているが、人工変形頭蓋というもの。中国の風習で幼少期に板を頭の後ろにしばりつけたことにより起こったもの。アメリカのインディアンにもこのような風習があった。このような調整で、顔の長さ、形を変えていた。土圧で変形したものと、人工変形頭蓋のものと遠めの写真ではわかりにくいだが、成人のかなりの数の人たちがこのような変形した頭の形をしている。写真は、6,500年前のイネ出土例写真。栽培されたイネの痕跡だとわかっている(図13)。

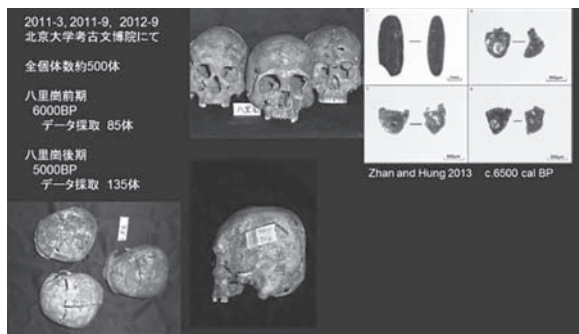


図13

### ■水田稲作の発祥地

水田稲作の発祥の地といわれている河姆渡遺跡田螺山遺跡は現在も遺跡は発掘中。博物館となっているが、遺跡全体を覆い屋にしているような状態で、東京ドームくらいの規模。炭化した植物遺体は、日本であれば江戸時代の出土品ではないかと思うくらい保存状況が良い。

### ■河姆渡遺跡出土の人骨

河姆渡遺跡出土の人骨は、報告書を見ると何十体もみつまっているはずなのだが、実際に保存状態の良いものは、この2体しかない(図14)。北



図14

東アジア系の形質をもっているが、この地方の特徴なのか、体は小柄。

### ■高庙遺跡

湖南省高庙遺跡は、今から6,000年前ほどの採集狩猟民の遺跡。私は、発掘調査後の整理作業から参加している。高庙遺跡から出土した人骨は、屈葬で葬られている。中国周辺の地域では、農耕民はほとんどが伸展葬。それに対して、採集狩猟民は、屈葬であることが多い。写真は、大人と子どもの骨が4、5体分残存する（図15）。土圧でつぶれたような形になっていた状態から、すべての破片をクリーニングして、復元した頭骨が写真のような状態。これまでみてきた北東アジア人とは、かなり顔つきが違い、簡単に言うと、立体的で顔が低く、頬骨が張り出している特徴をもち縄文人に似た顔つきといえる。

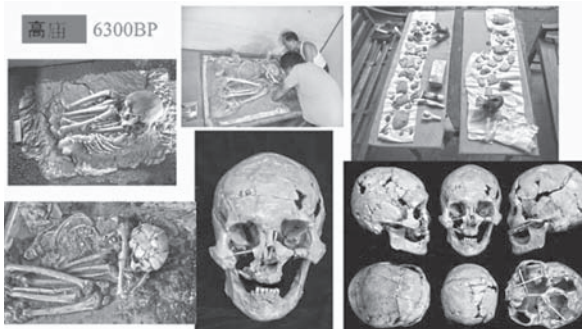


図15

### ■甌皮岩遺跡

甌皮岩遺跡は、約9,000年前から6,000年前くらいの洞窟遺跡で、中国社会科学院が発掘を担当している。この遺跡も新しい層準では、新石器時代の影響をうけ、イネもみつかっており、農耕を行っていたことがわかっているが、写真の人骨は、先土器時代の狩猟採集民のもの（図16）。この人骨

は研究許可が得られなかったので、系統分析では報告書から計測データを引用することとした。



図16

### ■灰窯田遺跡と鯉魚坡遺跡

次に紹介するプロジェクトは、ここ3年くらい取り組んできているもので、2014年11月にもまた、この現場に訪問する予定。ベトナム国境に近い広西壮族自治区にある約6,000年前の灰窯田遺跡と、同じく約5,000年前の鯉魚坡という遺跡を対象に調査を行っている。



図17

この遺跡では、埋葬方法が非常に特異的で、体を曲げて縦にした状態で埋葬していた。生身の体のまま埋葬したのであれば、このようにコンパクトな形で埋葬することはできない。そのため、死後直後に埋葬したのではなく、洞窟や海岸などで風葬にしたか、あるいは短期間土葬にして掘り起したあと、ミイラ状態になったものを束ねる形に埋葬したものだと考えられる。軟部組織肉は殆ど分解してしまっていたけれど、靭帯や関節などは、つながっている状態が残っているかたちで埋葬がおこなわれている。この遺跡では50体の人骨がみつかった（図17）。

### ■解剖的位置との相違

写真左は、屈葬のものだが、大腿骨の膝部分が下に来ている。頭から背骨、腰骨は上から下に順にならんでいる。腰のところに膝があるという奇妙な状況になっている。ミイラ化した遺体を再埋葬する際に、上半身と下半身が切り離されてしまったため、逆の位置に置いたのではないかと推測される。

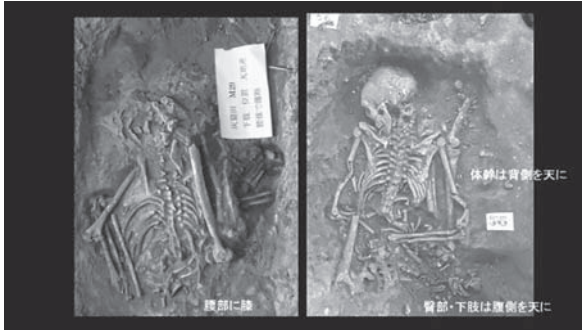


図18

写真右は、頭から胸までは背臥位、腰から下が腹臥位になっている。これも通常の状態ではそのような向きに向かせることができないので、上半身と下半身が離れてしまったものを腹側と背側を反対に埋葬してしまったものと考えられる (図18)。

### ■頂師山遺跡

同じような例は、この遺跡の近くで中国社会科学院が調査した頂師山遺跡でもみつがっている。

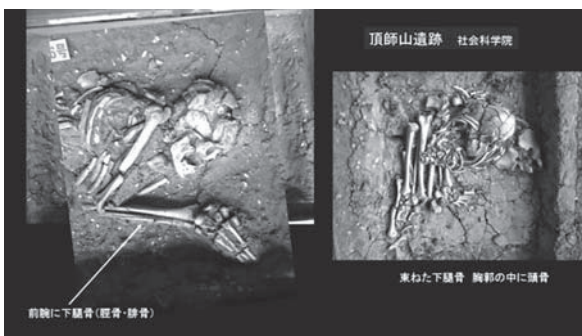


図19

写真左、人骨の手は、顔の大きさの1.5倍くらいになっている。人間の手は、通常、顔の大きさよりは小さいもの。腕の部分アップでみると、ひじから先が下腿骨(脛骨と腓骨)になっている。やはり、再埋葬時にひじから先を足の部分と取り違えてしまった例のようだ。軟部組織が

残っている状態で足と手を取り違えることはやはり考えにくいので、部分的に分離してしまったミイラ化した状態の遺体を再埋葬していると考えられる (図19)。

写真右の例も、胸郭のなかの心臓などが収まっている位置付近に、頭骨を押し込んでいる例。手足の骨は整然と束ねられている状態。一次埋葬した場所で束ねてきたか、移動してから二次埋葬場所で束ねたか、どちらかであろう。



図20

灰窯田遺跡でも、胸郭に頭骨が落ち込んだのか、もしくは人為的におしこめたのではないかと考えられる例が検出されている。比較例としては、南米におけるミイラ化した遺体を縛っている例が考えられる。おそらく、布や軟部組織が朽ちてしまうと、頭部がおちこむようになりそう (図20)。広西のこれらの遺跡の人骨は、北東アジア人とは全く違った顔つきで、頭が極めて長いのが特徴。

### ■ベトナムでの調査 Con Co Ngua遺跡

同時進行している遺跡が、ベトナムのハノイから200kmほど南に下ったThanh Hoa省にある約6,000年前のDa But文化に属するCon Co Ngua遺跡。先ほど紹介した中国の遺跡と同時期。



図21

この遺跡は、1980年にBui VinhとKim Thuyによって200㎡が調査され、103体の人骨が見つかった。さらに2013年から私たち越豪日共同調査を実施し、64㎡のトレンチから133体の人骨を発見している（図21）。

### ■遺跡内にみられる大きな石

遺跡内では、大きな石が所々で見つかった。この遺跡の営まれた時期は6,000年前くらいで、日本でいうと縄文前期、縄文海進の時期にあたり、海岸線がかなり内陸まで入ってきていた時期に相当する。この大きな石が見つかるあたりは、おそらく海岸であったのであろう。（図22）。

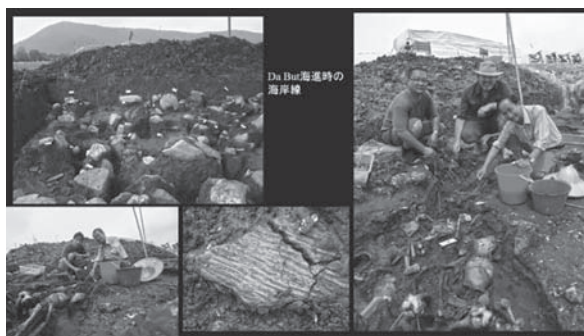


図22

### ■Con Co Ngua遺跡出土人骨の特徴

この遺跡出土人骨も中国の灰窯田遺跡、頂師山遺跡などと同様に人骨が束ねられており、頭骨が胸郭に落ち込んでいる。縄か布で遺体を縛って埋葬しているものと考えられる。中国の遺跡とベトナムの遺跡は、1,000km以上離れているが、同一の文化圏が広がっていたのであろう（図23）。

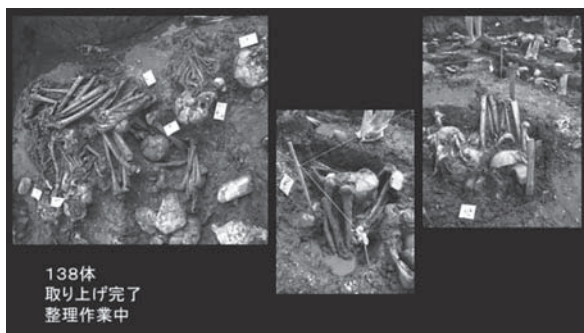


図23

人骨は、北東アジア人とは違い、現在のベトナム人とも違う顔つきをしている。顔が全体に低い。頬骨が幅広い。縄文人以上に、眉間部分が隆起する、などの特徴を示す。

### ■ネットスプリット法による分析

頭の幅、高さなど20項目ほど、計測値を設定して、Q-mode相関、サンプル間相関という統計学的手法で類似性を判断する分析をおこなっている。項目間相関を確認するのは、R-mode、サンプル間の相関を確認するのがQ-mode（図24）。

△と▽のように全く反対の形をしている場合には、-1、同じ形の相似形を表している場合には、+1、まったく形が別の形をしている場合には、0とする。

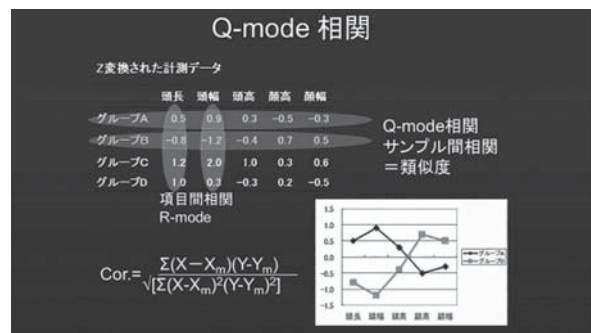


図24

昔は、リーグ戦のような系統樹を描くものがあったが、現在では近隣結合法、さらにそれを改良したネットスプリット法というものが利用されている。ネットスプリット法を形質人類学の分析に使い始めたのは、私が初めて。

### ■ネットスプリット法でわかった類似関係

ネットスプリット法で頭骨計測16項目 Q-mode相関による類似関係を描いてみた。



図25

図の中でネットワークが密集する部分が骨の形が似ている部分。骨の形が似ているということは、遺伝的な距離が近いということを表している。大きく2つのアッサンブリッジにわかれ、右の○は、シベリア付近の諸民族と日本の弥生人、中国、ベ

トナムの農耕開始時期の遺跡からみつかった人骨のグループである(図25)。

弥生人がシベリアから直接来たということではなく、シベリアにルーツがあり、中国、朝鮮半島などを経て、日本に入ってきたと考えられる。

左の○は、オーストラリア、メラネシアの住民と中国やベトナムの先史狩猟採集民から成り、日本の縄文人が同じグループに属する(図25)。

このネットスプリット法で分析してみると、中国、ベトナム、カンボジアにおいては、同一遺跡で約10,000年前から6,000年前頃の古い層序からみつかった狩猟採集民のグループから、約4,000年前の新しい層序からみつかった農耕民のグループに置換していた様相がうかがえる。縄文人から弥生人への移行がみられるのと同様に、中国、ベトナム、カンボジアにおいても、人集団の入れ替わりが起きているようである。

### ■マンバック遺跡

マンバック遺跡は、ベトナムNinh Binh省にある新石器時代の後半、3,700年前から3,500年前に移住してきた農耕民の遺跡。この人たちは、雲南あたりから下ってきたのではないかと推察している。なぜ、距離的に近い広西壮族地域ではないかという、この地域に稲作が入ってくるのは、このマンバック遺跡よりも遅い時期と考えられているからである。そのため、マンバック遺跡には雲南地方、もしくは、中国の海岸地域を通して、稲作が伝わったと推測されている。



図26

私たちが2005年と2007年の2年で調査したトレンチから99体の人骨が発見されている。埋葬人骨の頭位は、北西を向いているものが多い。300年くらいの時期差をもって、墓壙が切りあっている状態がわかる(図26)。

### ■調査概要

この遺跡からは、ニワトリ、ブタ、その他、土器、磨製石斧などが出土している。出土した99%近くの成人人骨には、抜歯が行われた痕跡があった。上顎の側切歯、および、下顎の側切歯や切歯が抜かれており、成人の儀礼として、抜歯が行われていたのではないかと考えられる(図27)。



図27

伸展葬、風習抜歯、家畜、水田稲作、言語、繊細な土器をもつこと。これらの要素がパッケージとして中国からベトナムへもたらされたものと推定される。それには、当然人間の移動も伴っているとみてよい。

### ■出土人骨の傾向

ベトナムのマンバック遺跡からは、平坦で高顔の特徴をもつ頭骨が80%、彫の深い顔立ちの頭骨が20%くらいの割合でみつまっている。彫の深い顔立ちの人は、約14,000年前のオーストラリアKow Swamp遺跡出土の人骨とも、現代のアボリジニともよく似ている。



図28

平坦で顔が高い人骨は、ベトナムのドンソン遺跡から出土した日本の弥生時代はじめにあたる鉄器時代の人骨や、前漢の長江付近の人骨、さらに日本の弥生人と入れ替えてもわからないくらい似

ている (図28)。

この結果から、ベトナムのマンバック遺跡では、同一遺跡内に先住系の人と移民系の人と共存していたのだということがわかる。

### ■タイの遺跡群

マンバック遺跡と対比される遺跡群として、タイの遺跡群があげられる。



図29

2011年、タイ文化庁のPhimai支局に人類学資料施設が建設された。ここには、タイ文化庁 (FAD) とニュージーランドの Otago 大学の Charles Higham と Nancy Tyles の共同発掘調査によって出土した約1,000体の先史人骨が保管されている (図29)。

### ■Ban Non Wat遺跡の発掘調査

Ban Non Wat 遺跡の発掘調査は、Charles Higham と James Cook 大学の Nigel Chang が発掘をおこなっている。(図30)。

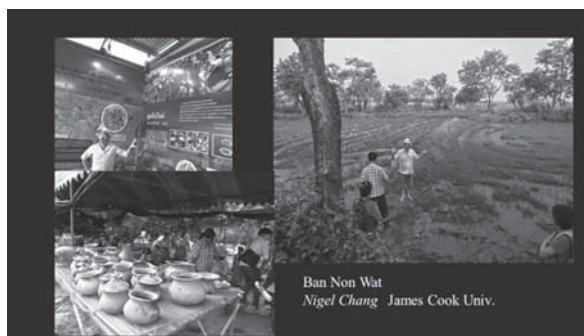


図30

タイの新石器時代の人たちも、約3,800年前から約1,600年前の農耕開始期に、ベトナムマンバック遺跡の人たちと同様に、タイにも移住してきた同系の集団であると考えられる。

### ■Han Cho 遺跡の調査

Han Cho 遺跡は、2004年、2005年にかけて私

たちが調査した約11,000年前の先土器時代ホアビン文化人の遺跡である。



図31

洞窟の前庭部に1 mにも満たない掘り込みで見つかった人骨は、屈葬で頭骨と手、足の骨はあるが脊柱は失われていた。AMS<sup>14</sup>C年代測定で11,000年の年代が出ている。出土した人骨は、ホアビン文化の特徴が表れている (図31)。

### ■Gua Cha 遺跡出土人骨

ケンブリッジ大学が調査した、約8,000年前のマレーシアGua Cha 遺跡出土人骨は、Han Cho 遺跡とともに、ホアビン文化の特徴が表れていた。



図32

前後に長い脳頭蓋 (長頭)、長方形に角ばった眼窩、突出した眉間、陥没した鼻根部、幅広い鼻腔口 (梨状孔)、やや突顎、低く幅広い顔面を特徴とし、北東アジア人とは全く異なっている。縄文人とは多少の共通点がみられる。

約9,000年前のマレーシアGua Cha遺跡出土の人骨とオーストラリアのアボリジニ、メラネシアのニューブリテン、スリランカのVeda。これらの人骨もよく似ている。それと比較するとブリアートの人骨は、目の位置がおでこにあるような高い位置にあり、鼻筋が平らである (図32)。



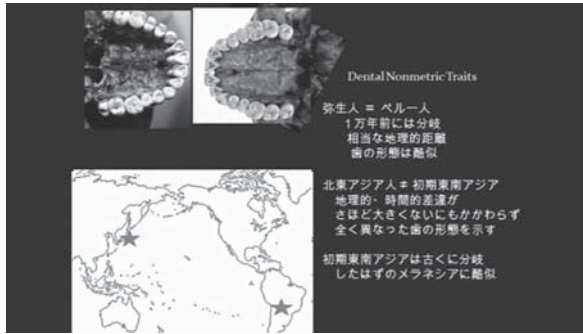


図36

■初期東南アジア人と北東アジア人

その反対に、初期の東南アジア人と北東アジア人は地理的にも、時間的にも近い関係にありながら、全く歯の形態は異なる。スダ・サフル型の人たちの歯は、古くに分岐したはずのメラネシアの人たちの歯に酷似している。そのため、もっと古い西ユーラシアのどこかでスダ・サフル型とシベリア型は分岐しているのではないかと考えるようになった。

■他分野の研究

私の歯の分析から考察した結論をサポートするような研究も他分野から発表されている。



図37

ラスムーセンが2011年、サイエンスに掲載した論文によると、先住民から寄贈された100年前の毛髪からゲノム配列の解析結果では、脱アフリカには、2段階あるという。第1グループは約70,000年前アフリカを出発し、約50,000年前にオーストラリアに到達し、アボリジニの祖先となり、第2グループは、約30,000年前にアフリカを出発して、まだ定かではないが、ユーラシアの南回りか、北回りかを移動して、北東アジア、アメリカに移動したのではないかと（図37）。

2014年にPickrellとReichの2名が『BioRxiv』

という雑誌に掲載した論文には、北東アジア人の遺伝形質がパキスタンや西ユーラシアのあたりまでみられることが発表されている。それに対して、オーストラリア先住民の遺伝形質は、アフリカ、インド、東南アジアにつながりをもっている。ここでもシベリア型の人とスダ・サフル型の人たちは、別系統で移住してきていることを示唆している。青が60,000年前、赤が約30,000年前に移動があったことを示した図では、カスピ海の北か南かはわからないが、そのあたりからユーラシア北部を通して、シベリアにむかったことが推定される（図38）。



図38

さらに、2007年にオッペンハイマーが出した『Out of Eden』という著書に掲載されたミトコンドリアDNAの分析結果でも、上記の分析と同じようにシベリア型の人とスダ・サフル型の人たちは別系統で移住してきたことを示している。

これらのデータを総合すると、おそらく、南周りは、インドを経由。約80,000年前にはスダラント（東南アジア）へ。その後、50,000年前にはサフルラント（オーストラリア、メラネシア）へ、20,000年前から7,000年前のホアビン文化は、その代表であろう。縄文人の祖先もこの系譜であるがのちに北回りグループと若干の混血があったと考えられる。

北回りは、もともとマンモスハンターだった人々が、約30,000年前にシベリア・ステップ地帯を東進。旧石器時代にも細石刃文化とともに少数は日本列島へ、あるいはアメリカへ向かったグループもあったようだ。最終氷期に寒冷地適応し、東アジアを南下、7,000年ほど前には長江付近で稲作農耕の技術を確立させたようだ。言語、家畜、

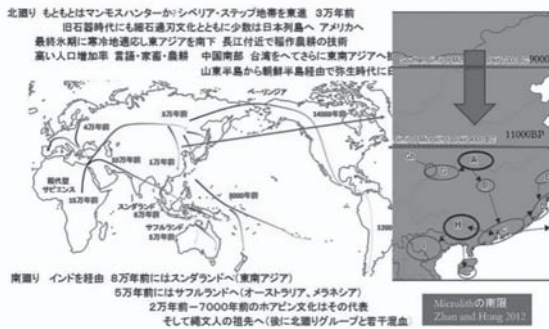


図39

農耕をもつことにより高い人口増加率となり、これらの能力を持つ人たちがさらに、中国南部や台湾を経て東南アジアに拡散していったことが窺える。日本にも山東半島から朝鮮半島などを経て弥生時代に日本に渡来してきたのであろう(図39)。

2012年にZhan氏とHung氏が発表した細石器(Microlith)の南限に関する論文では、11,000年前に長江流域まで伝わっており、9,000年前に黄河付近まで後退してきていることがわかる。長江付近まで細石刃を携えた人々が移動し、その後、後続の文化に移行していったことが推測できる(図39)。

25,000年前の周口店上洞人は、3体みつまっているが、いずれもスダ・サフル型の形態をもっており、北東アジア人の系譜にはつながらない。南の形質をもつひとは、北京周口店あたりまでは南下しており、北の形質をもつひとは、長江付近まで南下していたと考えられる。

最近ではさらに問題を複雑にさせる発見があった。2010年、Reichが『nature』に発表したアルタイ山脈デニソア洞窟で発見した人の歯である。残念ながら歯しか発見されなかったが、DNAを抽出することができ、そのDNAの分析から40万年前にネアンデルタール人の祖先から分岐し、約30,000年前まで生存していたのではないかと考えられている(図40)。

このデニソア人の遺伝子は、現在のメラネシア、オーストラリアにもみられるという。40万年前に分岐したデニソア人と同じルーツを持つ人が、メラネシアオーストラリアにきて、そのあと、南回りの脱アフリカの人たちがこの地に到達したのか。そして、この2つのグループが混血して、さらに、第3のグループとして北東アジアのひとた

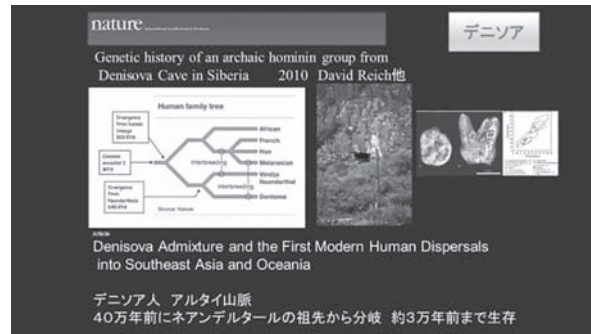


図40

ちが到達した。そのような3重構造をかंगाえなければならないのか。今後の研究の進展に注目が集まるところである(図41)。



図41

---

## 北海道立埋蔵文化財センター年報16

平成26（2014）年度

---

平成27年4月30日発行

編集：公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

発行：北海道立埋蔵文化財センター

〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1

Tel：(011)386-3231 Fax：(011)386-3238

E-mail：mail@domaibun.or.jp

URL <http://www.domaibun.or.jp/>

印刷：社会福祉法人 北海道リハビリ

〒061-1195 北広島市西の里507番地1

Tel：(011)375-2116(代) Fax：(011)375-2115

---